東北大学埋蔵文化財調査室調査報告5

東北大学

ISSN 2185-6990

東北大学埋蔵文化財調査室調査報告５

仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区 第16地点

仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区　第16地点

仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第16地点（BK16）
北西から仙台城二の丸・千貫沢を望む

東北大学埋蔵文化財調査室
２０１６

東北大学埋蔵文化財調査室調査報告５

仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区
第16地点

東北大学埋蔵文化財調査室
２０１６

1．仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第16地点調査区全景（北西から）

2．仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第16地点調査終了状況（上が北）

3．堀（新段階）埋土堆積状況（西から）

4．堀（古段階）東側調査区埋土堆積状況（西から）

序

本報告書は、『東北大学埋蔵文化財調査室調査報告』の５冊目として、川内北キャンパスにおける学生支援センター新営工事に伴い実施した、仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第16地点の調査成果をまとめたものです。

東北大学埋蔵文化財調査室では、以前は『東北大学埋蔵文化財調査年報』として、年度ごとに事業概要と調査成果の報告をまとめて刊行してきました。2007年度より年度ごとの事業概要の報告は、『東北大学埋蔵文化財調査室年次報告』として別に刊行し、東北大学構内における埋蔵文化財調査の発掘調査の報告については『東北大学埋蔵文化財調査室調査報告』というシリーズで刊行しております。本報告書は、その５冊目となります。

今回報告する仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第16地点の調査では、仙台城二の丸の北側に位置する堀の北岸の状況が明らかとなりました。これまでにも、二の丸地区第８地点（『年報』５）、第12地点（『年報』11）の調査で、同じ堀の北岸を検出していました。また、北方武家屋敷地区第13地点（『調査報告』２）の調査では、二の丸北側を通っていた筋違橋通の一部を復元していました。こうした継続的な調査は、仙台城を研究する上で、非常に重要な成果となっています。

調査の実施から報告書の刊行まで、大学内外の関係機関の御協力を得て、滞りなく事業を進めることができました。ここに厚くお礼申し上げるとともに、本書で報告されるデータが各方面で活用されることを望むものです。

東北大学埋蔵文化財調査室
室長　阿子島　香

例　言

1．本調査報告は、東北大学構内において、東北大学埋蔵文化財調査室が2013年度に行った仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第16地点の調査成果をまとめたものである。

2．報告する遺跡と略号、調査期間、調査担当者は以下のとおりである。

　遺跡と略号：仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第16地点（BK16）

　調査期間　：2013年４月１日～12月19日

　調査担当者：藤沢　敦・柴田恵子・菅野智則・大久保弥生

3．調査・整理作業は、東北大学埋蔵文化財調査室が行った。

4．本報告の編集・執筆は、菅野智則・柴田恵子・石橋宏が担当した。なお、第Ⅶ章に関しては、調査担当者の一人である藤沢敦（現東北大学総合学術博物館）からご教示を頂いた。

　第Ⅰ章　石橋、菅野

　第Ⅱ章・第Ⅲ章・第Ⅳ章・第Ⅶ章　菅野

　第Ⅴ章　柴田

5．英文要旨については、柴田恵子が作成し、阿子島香が校訂した。

6．第Ⅵ章は、古代の森研究舎の吉川純子氏による分析報告を、本報告書の体裁に合わせて編集した。

7．遺物実測図の作成にあたっては、原図はすべて手描きで作成している。この遺物実測図と遺構の測量図は、デジタルトレースによって原版を作成した。また、磁器と陶器の文様部分の図面原版は、国際文化財株式会社に委託し、オルソイメージャーを用いたデジタル写真から作成した。

8．遺物写真については、その大体は有限会社仙台写真工房に委託して撮影した。また、図版22～24の一部と図版30・31の遺物写真については、柴田が撮影した。

9．これまでに、本調査の概要は『年次報告』2013、「平成25年度宮城県遺跡調査成果発表会」で公表してきた。それらの内容より、本報告書の内容が優先する。

10. 発掘調査および整理・報告書作成にあたっては、以下の方々や関係機関から御指導・御協力を賜った。記して感謝申しあげる（敬称略）。

　仙台市教育委員会、宮城県教育委員会、東北大学大学院文学研究科考古学研究室、

　天野順陽（宮城県教育委員会）、鹿又喜隆（東北大学）、斎野裕彦（仙台市教育委員会）、

　鈴木　隆（仙台市教育委員会）、渡部　紀（仙台市教育委員会）、

　本田秀生（金沢城調査研究所）、滝川重徳（金沢城調査研究所）

11. 出土遺物・調査記録は、東北大学埋蔵文化財調査室で保管・管理している。

凡　例

1．図１・２の背景の元図は、国土地理院発行の１万分の１地形図（『青葉山』）を使用した。図３−１の空中写真は、整理番号USA、コース番号M182−2、写真番号157、1952（昭和27）年11月２日撮影のものである。図３のほかの地形図の出典は、それぞれに示した。

2．挿図・写真等の方位は、それぞれに示した。

3．遺物の実測図および写真の縮尺は、それぞれに示した。

4．引用・参考文献は、巻末にまとめた。また、本文中で当室が刊行した報告書類を引用する際には、下記のように略した。

例　『東北大学埋蔵文化財調査年報』１　…　『年報』１

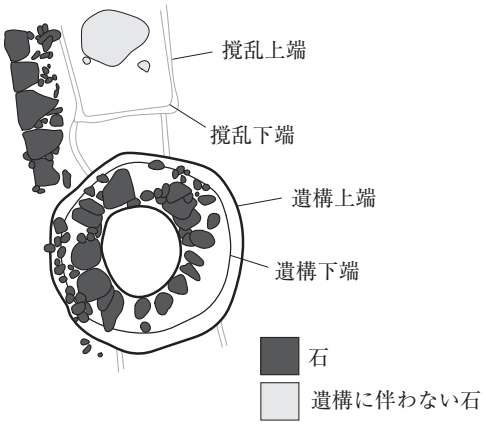
『東北大学埋蔵文化財調査室年次報告』2008　…　『年次報告』2008

『東北大学埋蔵文化財調査報告』１　…　『調査報告』１

5．元号と西暦の標記は、通常は「西暦（元号）年」（例えば「2015（平成27）年」）と表記する。ただし、近世・近代が主体となる場合は、「元号（西暦）年」（例えば「天明６（1786）年」）と表記する。

6．挿図中の表記は、特に指示しないものについては、以下の通りである。これら以外については、それぞれに指示した。

①遺構平面図



②遺構断面図

目　次

巻頭カラー図版
序
例言
凡例
目次
図目次
表目次
図版目次

第Ⅰ章　仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区の立地と歴史……1
1．仙台城と周辺武家屋敷の立地……1
2．仙台城と仙台城下の武家屋敷……1
(1) 仙台城の歴史……1
(2) 仙台城周辺の武家屋敷の変遷……5
(3) これまでの調査区と屋敷地との対応……7
3．仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区における
これまでの調査……11
第Ⅱ章　調査の方法と経過……17
1．調査地点の位置と調査経緯……17
2．調査の方法と経過……17
(1) 発掘調査の経過……17
(2) 記録方法……20
(3) 遺構の名称について……20
(4) 遺物の取り上げについて……22
(5) 整理作業……22
第Ⅲ章　基本層序と時期区分……24
1．基本層序……24
2．時期区分……24
第Ⅳ章　検出遺構……30
1．Ⅰa期の遺構……30
2．Ⅰb期の遺構 ……37
3．Ⅰc期の遺構……43
4．Ⅰ期以降の遺構……49
(1) Ⅱ期以前の遺構……49
(2) Ⅱ期の遺構……49
(3) Ⅲ期の遺構……52
(4) Ⅰ期以降における遺構の変遷……53
第Ⅴ章　出土遺物……54
1．陶磁器……54
2．土師質土器・瓦質土器……56
3．瓦……56
4．金属製品……58
5．その他の遺物……59
第Ⅵ章　出土木材の樹種同定……73
1．6号溝出土樹木の樹種同定……73
2．11号溝出土継手の樹種同定……74
第Ⅶ章　検出遺構の検討……75
1．Ⅰ期の様相……75
2．Ⅱ期・Ⅲ期の様相……77
引用・参考文献
英文要旨
写真図版
報告書抄録

図　目　次

図１　仙台城周辺の地形区分図……2
図２　仙台城と二の丸の位置……3
図３　川内地区周辺の地形……6
図４　川内地区周辺の絵図・地図（1）……8
図５　川内地区周辺の絵図・地図（2）……9
図６　川内北地区調査地点……12
図７　武家屋敷地区第16地点調査区の位置……18
図８　武家屋敷地区第16地点調査区模式図……19
図９　武家屋敷地区第16地点東壁断面図……25
図10　武家屋敷地区第16地点東壁断面図土層注記‥26
図11　武家屋敷地区第16地点における
　　近代から現代の遺構（1）……27
図12　武家屋敷地区第16地点における
　　近代から現代の遺構（2）……28
図13　武家屋敷地区第16地点における
　　近代から現代の遺構（3）……29
図14　武家屋敷地区第16地点における
　　堀（古段階）とその他の遺構……31
図15　武家屋敷地区第16地点における近世の遺構（1）‥32
図16　武家屋敷地区第16地点における近世の遺構（2）‥33
図17　堀（古段階）埋土の対応関係……35
図18　武家屋敷地区第16地点における近世の遺構（3）‥36
図19　武家屋敷地区第16地点における
　　堀（古段階）上面の遺構……38
図20　武家屋敷地区第16地点における近世の遺構（4）‥39
図21　武家屋敷地区第16地点における近世の遺構（5）‥40
図22　武家屋敷地区第16地点における近世の遺構（6）‥41
図23　武家屋敷地区第16地点における近世の遺構（7）‥42
図24　武家屋敷地区第16地点における
　　堀（新段階）の分布範囲……44
図25　武家屋敷地区第16地点における近世の遺構（8）‥45
図26　武家屋敷地区第16地点における近世の遺構（9）‥46
図27　堀（新段階）埋土の対応関係……48
図28　武家屋敷地区第16地点におけるⅢ期以前の遺構‥50
図29　武家屋敷地区第16地点におけるⅢ期の遺構‥51
図30　武家屋敷地区第16地点出土磁器……60
図31　武家屋敷地区第16地点出土陶器（1）……60
図32　武家屋敷地区第16地点出土陶器（2）……61
図33　武家屋敷地区第16地点出土
　　土師質土器・瓦質土器……61
図34　武家屋敷地区第16地点出土軒丸瓦・軒桟瓦‥61
図35　武家屋敷地区第16地点出土刻印瓦……62
図36　武家屋敷地区第16地点出土古銭……62
図37　武家屋敷地区第16地点出土煙管……62
図38　６号溝出土木材の顕微鏡写真……73
図39　11号溝出土継手の顕微鏡写真……74
図40　武家屋敷地区第16地点付近の
　　Ｉb期における道路の推定 ……76

表　目　次

表１　仙台藩の家格……10
表２　武家屋敷地区第13地点関連絵図人名……10
表３　武家屋敷地区第16地点関連絵図人名……10
表４　仙台城と仙台城周辺武家屋敷の調査一覧（1）‥15
表５　仙台城と仙台城周辺武家屋敷の調査一覧（2）‥16
表６　武家屋敷地区第16地点遺構名称対照表……21
表７　武家屋敷地区第16地点遺構属性表……23
表８　武家屋敷地区第16地点出土磁器集計表（近世）‥63
表９　武家屋敷地区第16地点出土磁器集計表
　　（近代・手描き）……63
表10　武家屋敷地区第16地点出土磁器集計表
　　（近代・擂絵）……64
表11　武家屋敷地区第16地点出土磁器集計表
　　（近代・銅版転写）……64
表12　武家屋敷地区第16地点出土磁器集計表
　　（近代・白磁）……64

表13　武家屋敷地区第16地点出土磁器集計表
（近代・型打ち・クロム青磁・色釉）‥65
表14　武家屋敷地区第16地点出土陶器集計表‥‥‥65
表15　武家屋敷地区第16地点出土瓦集計表（1）‥‥66
表16　武家屋敷地区第16地点出土瓦集計表（2）‥‥67
表17　武家屋敷地区第16地点出土土器・石製品・
木製品・その他集計表‥‥‥‥‥‥‥68
表18　武家屋敷地区第16地点出土金属製品集計表‥68
表19　武家屋敷地区第16地点出土磁器観察表‥‥‥69
表20　武家屋敷地区第16地点出土土師質土器・
瓦質土器観察表‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥69
表21　武家屋敷地区第16地点出土陶器観察表‥‥‥70
表22　武家屋敷地区第16地点出土便所
埋め甕（近代）観察表‥‥‥‥‥‥‥70
表23　武家屋敷地区第16地点出土軒丸瓦観察表‥‥71
表24　武家屋敷地区第16地点出土軒桟瓦観察表‥‥71
表25　武家屋敷地区第16地点出土軒平瓦類観察表‥71
表26　武家屋敷地区第16地点出土平瓦観察表‥‥‥71
表27　武家屋敷地区第16地点出土桟瓦観察表‥‥‥72
表28　武家屋敷地区第16地点出土刻印瓦観察表‥‥72
表29　武家屋敷地区第16地点出土古銭観察表‥‥‥72
表30　武家屋敷地区第16地点出土煙管観察表‥‥‥72
表31　武家屋敷地区第16地点出土金属製品観察表‥72
表32　竹樋継手の樹種‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥74

図　版　目　次

図版１　武家屋敷地区第16地点全景（1）‥‥‥‥‥83
図版２　武家屋敷地区第16地点全景（2）‥‥‥‥‥84
図版３　武家屋敷地区第16地点全景（3）‥‥‥‥‥85
図版４　武家屋敷地区第16地点の遺構（1）‥‥‥‥86
図版５　武家屋敷地区第16地点の遺構（2）‥‥‥‥87
図版６　武家屋敷地区第16地点の遺構（3）‥‥‥‥88
図版７　武家屋敷地区第16地点の遺構（4）‥‥‥‥89
図版８　武家屋敷地区第16地点の遺構（5）‥‥‥‥90
図版９　武家屋敷地区第16地点の遺構（6）‥‥‥‥91
図版10　武家屋敷地区第16地点の遺構（7）‥‥‥‥92
図版11　武家屋敷地区第16地点の遺構（8）‥‥‥‥93
図版12　武家屋敷地区第16地点の遺構（9）‥‥‥‥94
図版13　武家屋敷地区第16地点の遺構（10）‥‥‥‥95
図版14　武家屋敷地区第16地点の遺構（11）‥‥‥‥96
図版15　武家屋敷地区第16地点の遺構（12）‥‥‥‥97
図版16　武家屋敷地区第16地点の遺構（13）‥‥‥‥98
図版17　武家屋敷地区第16地点の遺構（14）‥‥‥‥99
図版18　武家屋敷地区第16地点の遺構（15）‥‥‥‥100
図版19　武家屋敷地区第16地点の遺構（16）‥‥‥‥101
図版20　武家屋敷地区第16地点の遺構（17）‥‥‥‥102
図版21　武家屋敷地区第16地点の遺構（18）‥‥‥‥103
図版22　武家屋敷地区第16地点出土磁器‥‥‥‥‥104
図版23　武家屋敷地区第16地点出土陶器（1）‥‥‥104
図版24　武家屋敷地区第16地点出土陶器（2）‥‥‥105
図版25　武家屋敷地区第16地点出土
土師質土器・瓦質土器‥‥‥‥‥‥105
図版26　武家屋敷地区第16地点出土軒丸瓦・軒桟瓦 ‥106
図版27　武家屋敷地区第16地点出土刻印瓦‥‥‥‥106
図版28　武家屋敷地区第16地点出土煙管‥‥‥‥‥106
図版29　武家屋敷地区第16地点出土古銭・金属製品 ‥107
図版30　武家屋敷地区第16地点出土近代遺物（1）107
図版31　武家屋敷地区第16地点出土近代遺物（2）108

第Ⅰ章　仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区の立地と歴史

１．仙台城と周辺武家屋敷の立地

仙台平野は、宮城県のほぼ中央部に位置し、西は奥羽脊梁山脈とそこから派生する丘陵地帯に接し、東は仙台湾に開いた平野である。狭義では、北は仙台市域北部の丘陵地帯、南は阿武隈川によって区切られる範囲を指す。仙台平野には、奥羽脊梁山脈に源を発した河川が西から東へ流下している。北から七北田川、広瀬川、名取川である。この中の広瀬川は、丘陵地帯を抜けて仙台平野に入ると、青葉山などの丘陵地の北東麓を流下し、やがて名取川に合流し、太平洋にそそいでいる。この広瀬川の両岸には、河岸段丘が発達している。河岸段丘は、高位から台ノ原段丘・上町段丘・中町段丘・下町段丘と分けられており、河岸段丘の間は段丘崖となっている。

仙台城は、宮城県仙台市青葉区川内および荒巻に所在する。現在の仙台市街地中心部から、広瀬川を西に渡った川内・青葉山地区に位置しており、市街地西部に張り出す青葉山丘陵の東縁辺と、その裾に広がる河岸段丘上に立地している（図１）。広瀬川が青葉山などの丘陵地の北東麓を流下しているため、広瀬川の南西側にあたる川内地区の河岸段丘はさほど広くない。一方、広瀬川の北東側には、広い河岸段丘面が連なっており、その東縁は活断層である長町－利府線によって画され、沖積平野に接している。仙台城下のほとんどの範囲は、この広瀬川北東側の河岸段丘上に位置している。現在の仙台市街地中心部も、この広瀬川の河岸段丘上に立地する。

仙台城の構成は、大きく本丸・二の丸・三の丸（東丸）に分かれる（図２）。本丸は広瀬川と竜の口渓谷に囲まれた標高115～138mの、青葉山の高位段丘面（青葉山Ⅲ面）に立地している（図１）。本丸の北西側に二の丸が、北東側に三の丸が配置されているが、本丸だけは一段高い高位段丘面に位置している。本丸の東側は、60m以上の断崖となっている。現在の広瀬川は、本丸の立地する丘陵からやや離れたところを流れている。しかし江戸時代には、広瀬川は大きく蛇行して、本丸東側の崖下までせまっていた。本丸の南側は、広瀬川の支流である竜の口渓谷の急崖で画されている。本丸は防御を重視し、このような急峻な地形を利用して造られている。

本丸の北側に広がる川内地区は、広瀬川によって形成された河岸段丘の中の、上町段丘面・中町段丘面・下町段丘面にあたる。二の丸は標高54～71mの上町段丘面に、三の丸は標高40m前後の下町段丘面に立地する。周辺の武家屋敷も、西側の標高の高い部分から広瀬川に向かって順に、上町段丘面・中町段丘面・下町段丘面に立地する。東北大学の川内北地区は、東側の一段低いグラウンド部分が中町段丘面にあたり、それ以外の区域は上町段丘面に相当する。

これらの河岸段丘を開析しつつ、広瀬川の支流が、西から東へ流れている。これらの支流のひとつである千貫沢が、二の丸の北側を流れており、千貫沢をはさんで南側が二の丸地区、北側が二の丸北方武家屋敷地区となる。千貫沢は、標高差の大きい河岸段丘を横切る形で流下していることから、これらの段丘面を深く切り込んでいる。二の丸裏門から北に延びる道路が千貫沢を渡るところに造られた千貫橋付近では、段丘面の標高が57m程度、千貫沢の沢筋の標高は46m程度である。千貫橋付近の段丘面と千貫沢の標高差は11mあまりになり、深くて急峻な沢筋となっている。大橋付近を流れる広瀬川の河原の標高は22m程度で、千貫橋付近の段丘面との標高差は、およそ35mとなる。また大手門の北側にも沢筋が残っており、仙台城の造営によって改変されていると思われるが、本来は急峻な沢筋であったと考えられる。

２．仙台城と仙台城下の武家屋敷

(1) 仙台城の歴史

仙台城は、1600（慶長15）年から、仙台藩初代藩主である伊達政宗によって築城が開始された近世城郭である。その後、幾たびかの改変を受けつつ、幕末まで仙台藩の中枢として機能していく。この仙台城は、本丸と二の丸の一部を除き、2003（平成15）年に国史跡に部分指定されている。

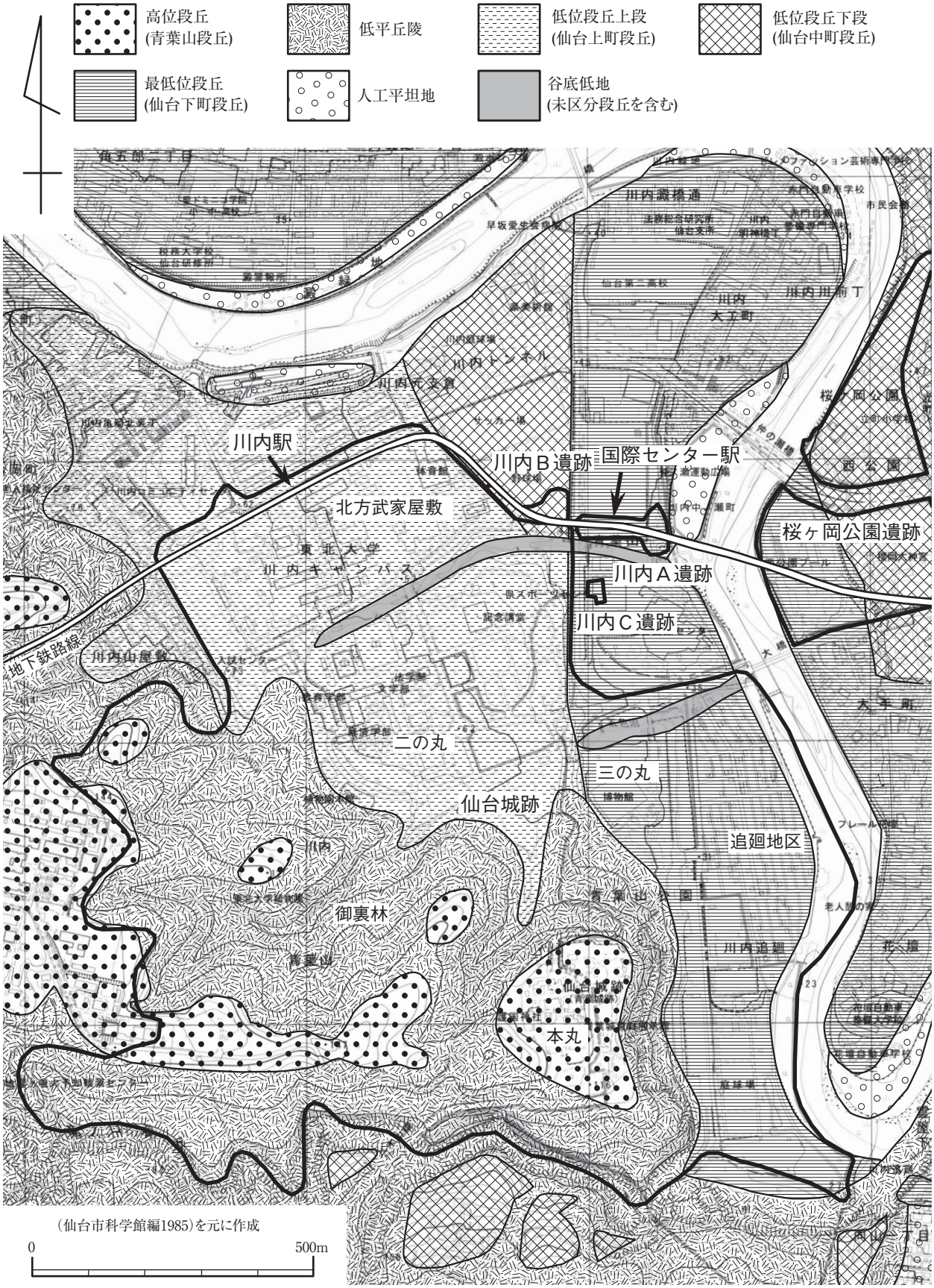


図１　仙台城周辺の地形区分図
Fig.1　Topographical map around Sendai Castle

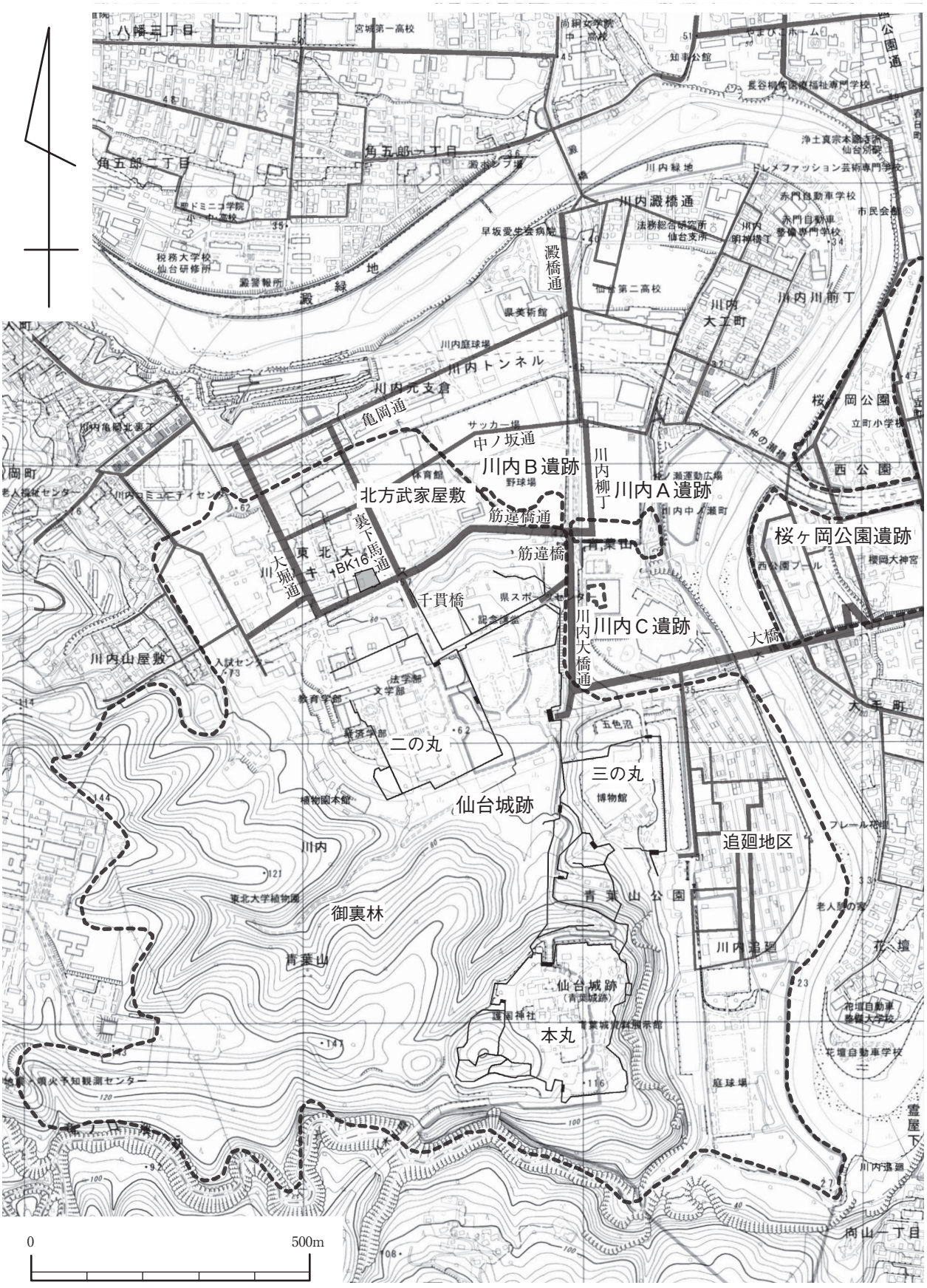


図２　仙台城と二の丸の位置
Fig.2　Distribution of Sendai Castle

この伊達政宗による築城以前には、国分氏の千代城が存在したことが知られていたが、その実態は不明なままであった。1998（平成10）年の仙台市教育委員会による本丸石垣修復工事に伴う調査の際に、虎口・竪堀・平場・通路などの遺構が検出され、初めて国分氏の千代城の遺構の一端が明らかとなった（金森安孝・渡部紀2009）。千代城は、文献記録や発掘調査成果の検討から、築城期は不明であるが、16世紀末の天正年間（1573～92年）頃に廃絶されたと考えられている。

伊達政宗によって造営された仙台城の本丸は、1602（慶長７）年には、土木工事にあたる普請がほぼ完成していたと考えられる。各種の殿舎建築は継続中であったと思われ、本丸の中心建物となる「大広間」は、1610（慶長15）年に完成したとされる。築城時に、本丸北側には石垣が築かれるが、石垣修復に伴う発掘調査によって、３時期に渡る変遷が明らかとなった。築城期のⅠ期石垣は、1616（元和２）年の地震で大きな被害を受け、Ⅱ期石垣が築かれる。Ⅱ期石垣も、1668（寛文８）年の地震で大きく崩壊し、現存するⅢ期石垣が造られたことが明らかとなっている（金森安孝・渡部紀2009）。

仙台城が築城された時点での、本丸以外の施設を含めた仙台城の全体像は、必ずしも明らかではない。

後に三の丸（東丸）とされる区域では、仙台市教育委員会による発掘調査によって、政宗時代の茶室や四阿の可能性のある建物跡などが発見されている。池跡も検出されており、庭園が伴うものと推定されている（佐藤洋ほか1985）。本丸に付随した施設として、整備が進められていたと考えられる。

この段階では、二の丸は造られておらず、後に二の丸が造られる場所には、政宗の四男である伊達宗泰の屋敷があったとの伝承がある。しかし、この伝承を検証できる資料はない。本丸の築造が進められた慶長年間（1596～1615年）には、伊達宗泰は元服前の幼少期であり、この時期に伊達宗泰の屋敷が置かれていたと想定することは難しい。伊達宗泰の屋敷が置かれていたとしても、本丸築城期より遅れる可能性もある。また、他の重臣の屋敷が置かれていた可能性を示す史料もある。文献史料に残されていない、これら以外の屋敷が置かれた可能性も検討していく必要がある。いずれにせよ、二の丸地区第９地点（NM９）などの発掘調査では、江戸時代初頭に遡る遺構が検出されており、本丸築城期から、何らかの施設が置かれていたことは確実である（『年報』８・９）。

1620（元和６）年には、伝伊達宗泰屋敷の北側に、政宗の長女五郎八（いろは）姫の居館である「西屋敷」が造られる。五郎八姫は、伊達政宗の正室愛姫との間に生まれた長女で、1599（慶長４）年に徳川家康の六男忠輝と婚約し、1606（慶長11）年に輿入れする。しかし、1616（元和２）年に忠輝が、大阪夏の陣の際の遅参・怠戦と、家臣による旗本殺害に対する不謝罪を理由に改易され、伊勢国に配流されると、五郎八姫は政宗の江戸屋敷へ帰され、さらに1620（元和６）年には仙台に移ることとなった。この五郎八姫の、仙台における居所として造られたのが「西屋敷」である。1645（正保２）年の『奥州仙台城絵図』（正保絵図）に描かれており、東西102間、南北60間であったことが記されている。東側に門が描かれ、東向きの屋敷であったことが判る。二の丸地区第５地点（NM５）の調査では、西屋敷期の礎石建物跡などが発見されており、その西側に複雑な形態の池が連なる庭園が広がっていたことが判明している（『年報』６・７）。

伊達政宗は、1627（寛永４）年、仙台城下の南東側にあたる現在の仙台市若林区古城において、若林城を造営する。「仙台屋敷構」として幕府の許可を得たものであるが、周囲に堀と土塁をめぐらした城郭である。1628（寛永５）年に若林城が完成すると、政宗は国元では若林城を居城とし、仙台城に滞在するのは、儀式など特別な場合に限られるようになる。対照的に、後の二代藩主伊達忠宗は、国元では仙台城に滞在していた。この若林城の建物が、後の二の丸造営の際に、移築されていることが仙台藩の公式記録である『治家記録』に記されている。若林城跡の第５次調査と第８次調査で調査された１号建物跡が、仙台城二の丸を描いた『御二之丸御指図』に見られる「大台所」と一致することなどが明らかとなり、若林城の建物を仙台城二の丸に移築したという文献記録を裏付けることとなった（佐藤淳ほか2008・2010）。

伊達政宗は1636（寛永13）年に死去し、伊達忠宗が二代藩主となる。忠宗は、1638（寛永15）年に、伝伊達宗

泰の屋敷跡に二の丸を造営する。二の丸が造られると、仙台藩の政治・諸儀式のほとんどは二の丸で行われるようになり、藩主の居所も二の丸へ移る。これ以降、二の丸が仙台城の実質的な中枢となり、この状態は幕末まで維持されていくこととなる。二の丸の造営とほぼ同じ頃に、三の丸（東丸）には、米蔵が置かれるようになったと考えられる。

1638（寛永15）年に二の丸が造営された時点では、五郎八姫の「西屋敷」が、二の丸の北隣に存続していた。五郎八姫が1661（寛文元）年に死去すると、もとの「西屋敷」は「天麟院様元御屋敷」と呼ばれ、蔵や作業所など、二の丸に附属する実務的な施設が置かれるように変化する。

17世紀末から18世紀初頭の元禄年間には、四代藩主伊達綱村によって、二の丸は大改造が施される。その際、もとの「西屋敷」の敷地は二の丸に取り込まれ、中奥がもとの「西屋敷」の範囲に大きく拡張された。仙台城では、藩主と側室の居住の場を「中奥」と呼んでいた。この改造によって、仙台城は完成した姿を迎えた。二の丸は、1804（文化元）年の火災でほぼ全焼する被害を受けつつも、従来通り再建され、幕末まで仙台城の中枢として維持されていく。

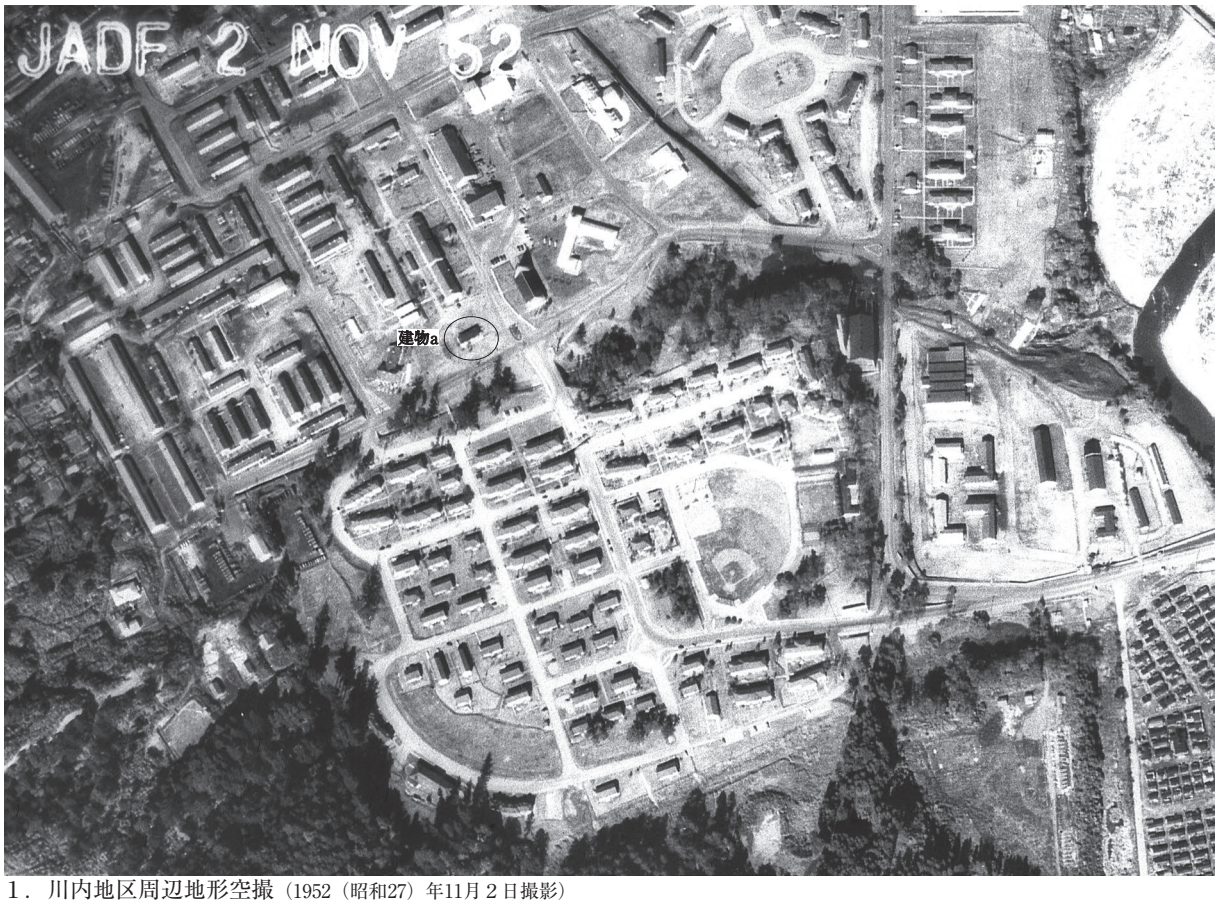
明治維新による新政府の成立と幕藩体制の崩壊により、仙台城も大きく変化する。仙台藩は奥羽越列藩同盟の中心として新政府に対抗するが、相次ぐ軍事的敗北の中で同盟は瓦解する。仙台藩は1868（慶応４・明治元）年９月に新政府に降伏謝罪し、12月には領地・領民をいったん取り上げられた上で、28万石を新たに拝領し存続が許された。1869（明治２）年の版籍奉還により、藩主伊達宗基が仙台藩知藩事となり、二の丸には藩の統治機関たる勤政庁が置かれた。1871（明治４）年の廃藩置県後は、仙台城が明治政府の管轄下に移り、二の丸には東北鎮台（後に仙台鎮台）が置かれる。本丸の建物は、明治の早い時期に取り壊されるが、二の丸の建物は鎮台本営として引き続き利用された。しかし1882（明治15）年の火災で、二の丸建物のほとんどが焼失してしまう。そして1886（明治19）年には仙台鎮台から陸軍第二師団に改称され、1888（明治21）年には正式に師団常備軍制度が施行され、敗戦まで続くこととなる。二の丸跡には師団司令部が置かれ、三の丸跡には陸軍倉庫が置かれていた。本丸跡には、1904（明治37）年に仙台招魂社（後の護国神社）が建てられ、戦没者を祀る場所へと変わる。1905（明治38）年には地形図が作成されている（図３－２）。今回報告する調査区近辺である川内北キャンパスは、「歩兵第二十九連隊営」と記載されており、方形に囲むように大規模な建物が建てられていたことがわかる。

1945（昭和20）年７月21日の仙台空襲の際には、仙台城の建物として最後まで残っていた大手門・脇櫓と巽門が焼失する。敗戦後は、二の丸跡をはじめとする川内地区のかつての軍用地が、米軍の駐屯地であるキャンプ・センダイとなる。この頃の空撮写真には、キャンプ・センダイの建物配置が明瞭に記録されている（図３－１）。そして、1957（昭和32）年に米軍からの返還を受け、二の丸地区のほとんどは東北大学が使用し、一部は仙台市の公園となった。大学の当初の建物は、米軍の建物をそのまま利用していたものであり、1969（昭和44）年の地形図にも、米軍期とほぼ同じ状況であることが記録されている（図３－４）。

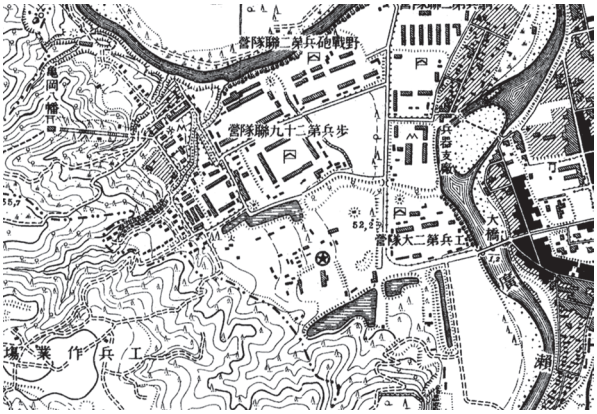
（2）仙台城周辺の武家屋敷の変遷

仙台城下は、仙台城の造営と併行して、その建設が進められていく。1601（慶長６）年正月11日に、仙台城の普請始めが行われ、同じ日に「御城下地形ノ絵図を以テ諸士等ノ屋敷割仰付ラル。」との記録が残されている（『貞山公治家記録巻之二十一』）。この時以降、城下の建設が進められていったものと考えられる。江戸時代の地誌である『仙台萩』には、1602（慶長７）年に、仙台に移る以前の本拠であった岩出山の士民に、仙台へ移るよう命令したことが記されている。その戸数などは不明ながら、家臣団や町方をはじめ多数が移住したと見られている。仙台城下の範囲は、その後徐々に拡大し、それに伴い再配置が行われる場合もあったが、基本的な構成は踏襲されていく。川内地区は、一部の寺社と職人屋敷を除くと、侍屋敷として使われていた。

仙台城下の様相を知ることができる基本的な資料は、城下絵図である。これらの城下絵図には、年代が近接す

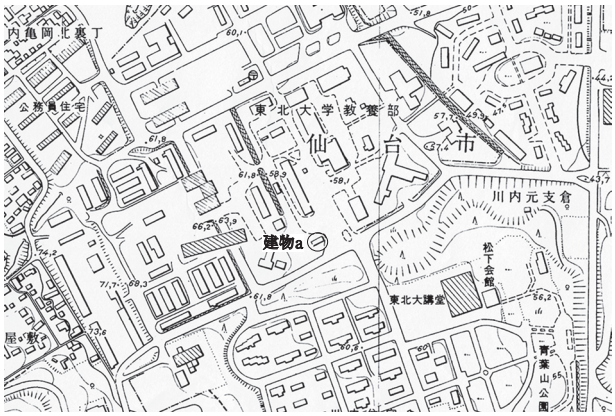


1．川内地区周辺地形空撮（1952（昭和27）年11月２日撮影）



2．川内地区周辺地形図①
（1905（明治38）年測量『仙臺南部』）

3．川内地区周辺地形図②
（1928（昭和３）年測量『仙台西北部』）



4．川内北地区周辺地形図①
（1969（昭和44）年修正『国土基本図X-QE40』）

5．川内北地区周辺地形図②
（2007（平成19）年修正『青葉山』）

図３　川内地区周辺の地形
Fig.3　Topographical map around Kawauchi campus

２・３：S=1/25,000
４・５：S=1/10,000

るものもあるため、時期による変遷が判るように選択して、川内北地区周辺の部分を示したのが、図４・５である。道路の変化を見るため、明治時代の地図についても、併せて示しておいた。

仙台城下を描いた城下絵図で最も古い絵図は、1645（正保２）年の正保絵図である（図４－１）。これは幕府提出用絵図のため、細かな屋敷割は記されていないが、仙台城の周辺には「侍屋敷」と記されており、この時点では武家屋敷が広がっていることが判る。これまでの川内北地区での調査でも、各所で江戸時代初頭に遡る遺構や遺物が発見されており、この区域では江戸時代初頭から屋敷地が整備されていったものと考えられる。

この正保絵図以降の藩政用絵図には、屋敷割が記され、人名が書き込まれたものが多くある。川内地区においては、大手門の周囲などに最も上級の家臣の屋敷が置かれ、それ以外の区域にも上級家臣の屋敷が多い。東北大学の川内北地区も、比較的上級の家臣の屋敷が置かれていた。川内地区全体の屋敷の様相については、『調査報告』１において、城下絵図をもとにした検討結果を掲載しているので、詳細はそちらを参照していただきたい。

仙台城下絵図で、川内地区の道路の位置を見ると、正保絵図（図４－１）以降、1882（明治15）年の地図（図５－13）に至るまで、基本的に変化がないことが判る。江戸時代における道路の位置の復元についても、『調査報告』１において詳しく検討しているので、ここではごく概略を述べることとする。

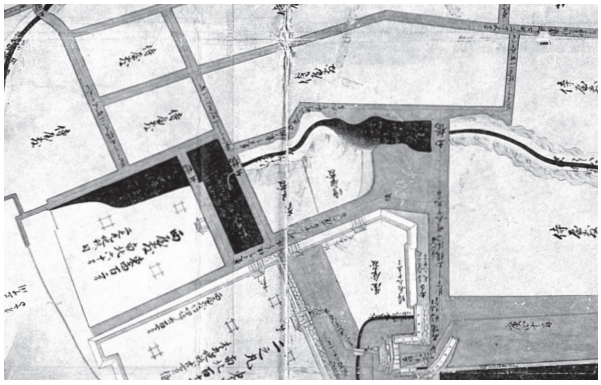
二の丸と北方武家屋敷との境には、千貫沢とそれを広げた堀がある。この千貫沢や堀沿いに「筋違橋通」が東西に走っているが、それより北側には東西方向の道路としては「中ノ坂通」と「亀岡通」の２本がある。ところが現在は、千貫沢沿いの道路の北側には、東西方向の道路は１本だけである。現在のような道路は1893（明治26）年の地図（図５－14）において、初めて見られるようになる。これと同時に、大手門から北側へ延びる道路も改変されている。大手門前から北へ延びる道路は、もともとは、千貫沢を渡る筋違橋の北側で鉤の手状に屈曲していたが、この時にまっすぐ北へ延びる道路へ変わっている。同様に、広瀬川を渡る大橋から大手門へいたる道路も、もとは大手門手前で屈曲していたのが、大橋からまっすぐ延びる形に変わっている。1889（明治22）年の広瀬川の洪水によって木橋であった大橋が流失し、第二師団の要請で鉄橋が架けられることとなり、1892（明治25）年に竣工した際に、大橋から大手門へ至る道路が直線になった。川内北地区の道路がつけ替えられたのが、大橋鉄橋架橋と同時かどうかは確認できていないが、1888（明治21）年の第二師団の設置以降、一連の過程で川内地区の整備が進められていったものと考えて良いであろう。

明治時代の地図も、初期のものは、全てを正確に測量して作成されたものではない。ある程度信頼が置けるものは、1893（明治26）年の地図以降であるが、この段階では川内北地区周辺の道路は、改変された後である。改変以前の道路を正確に測量した地図は、確認できていない。したがって、絵図や明治時代初期の地図をもとに、江戸時代の道路を正確に復元することは難しい。南北方向の道路については、ある程度復元根拠がある。しかし東西方向の道路である「中ノ坂通」と「亀岡通」については、復元根拠を欠いており、正確な位置を復元することは難しい。このような限界を踏まえて、図２では、これまでの調査・検討の成果から、江戸時代の道路の位置を、現在の地図上に推定復元している。

千貫沢の北側を東西に走るのが「筋違橋通」である。その北側を東西に走るのが「中ノ坂通」と「亀岡通」である。二の丸裏門である台所門を出て、千貫橋を渡って北に延びる道路が「裏下馬通」で、それとほぼ並行して西側にあるのが「大堀通」である。筋違橋から北へ延び「中ノ坂通」に至るのが「川内柳丁」、さらに北へ延び、澱橋へ至るのが「澱橋通」である。

(3) これまでの調査区と屋敷地との対応

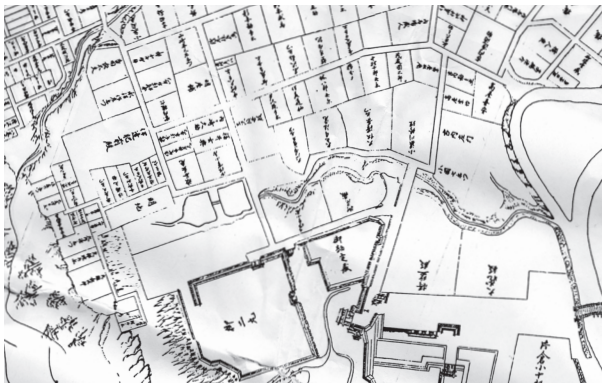
仙台藩の家格は、家格の高い順から、一門・一家・準一家・一族・宿老・着座・太刀上・召出・平士・組士・卒というように分けられていた（表１）。平士は、仙台藩家臣団の主力を構成した家臣で、多くは大番組に属する大番士であった。平士（大番士）は、登城した際に控える部屋の名前をとって、上位から虎の間番士・中の間



1．正保２（1645）年 奥州仙台城絵図

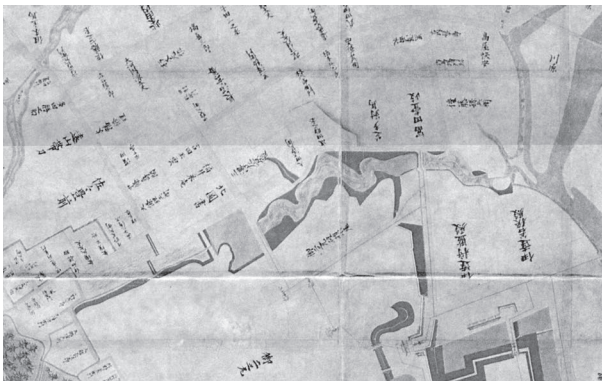
2．寛文４（1664）年 仙台城下絵図

3．寛文８・９（1668・69）年 仙台城下絵図



4．延宝６～８（1678～80）年 仙台城下大絵図

5．延宝９～天和３（1681～83）年 仙台城下絵図



6．元禄４・５（1691・92）年 仙台城下五釐卦絵図

7．享保９（1724）年以降 仙台城下絵図

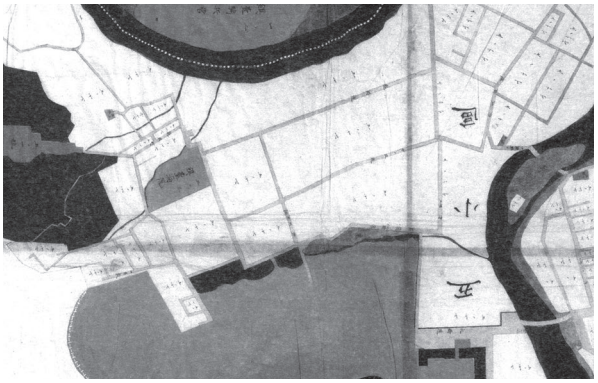
1・2・6（小林清春監修1994）
3・4　　（阿刀田令造1976：第２版）
5・7　　（吉岡一男編2005）

図４　川内地区周辺の絵図・地図（1）
Fig.4　Picture maps around the Kawauchi area（1）

8．宝暦10～明和３（1760～66）年 仙台城下絵図

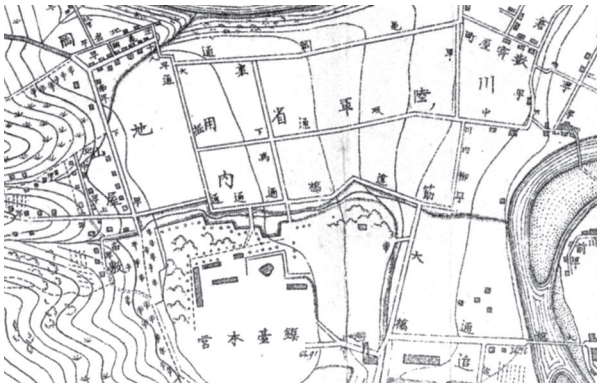
9．天明６～寛政元（1786～89）年 仙台城下絵図

10. 安政３～６（1856～59）年 安静補正改革仙府絵図

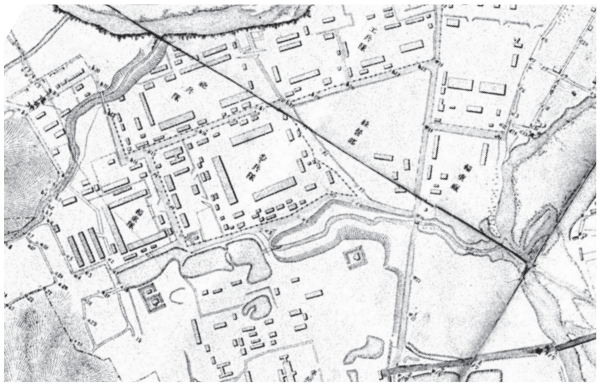


11. 明治８（1875）年 宮城郡仙台町地引図

12. 明治13（1880）年 宮城県仙台区全図



13. 明治15（1882）年 仙台区及近傍村落之図



14. 明治26（1893）年 仙台市測量全図

9・10・14（小林清春監修1994）
8・11～13（吉岡一男編2005）

図５　川内地区周辺の絵図・地図（2）
Fig.5　Picture maps around the Kawauchi area（2）

表１　仙台藩の家格
Tab.1　List of status in *Sendai-han*

家格	人数	備考
一門	11	角田石川氏・亘理伊達氏・水沢伊達氏・涌谷伊達氏・登米伊達氏・岩谷堂伊達氏・岩出山伊達氏・宮床伊達氏・川崎伊達氏・白河氏・三沢氏
一家	17	鮎貝・秋保・柴田・小梁川・塩森・大条・泉田・村田・黒木・石母田・瀬上・中村・石川・中目・亘理・梁川・片倉
準一家	10	猪苗代・天童・松前・葦名・本宮・高泉・葛西・上遠野・保土原・福原
一族	22	大立目・大町（胆沢郡）・大塚・大内・西大条・小原・西大立目・中島（江刺郡）・宮内・中島（伊具郡）・茂庭・遠藤・佐藤・畠中・片平・下郡山・沼辺・大町（宮城郡）・高城・大松沢・石母田・坂
宿老	3	着座のうち一番座の三家（遠藤・但木・後藤）
着座	28	正月等の儀式で登城し着座して藩主に挨拶する家臣
太刀上	10	正月賀礼に太刀を献上し藩主から盃を頂戴する家柄
召出一番座	38	正月宴会に召し出される家柄
召出二番座	51	正月宴会に召し出される家柄
平士（1000石以上）	6	
平士（500石以上）	68	
平士（100石以上）	994	
合計	1258	

表２　武家屋敷地区第13地点関連絵図人名
Tab.2　List of names of *samurai* lived at this location

年代	図	「筋違橋通」沿い	
		「裏下馬通」交差点から１区画目	「裏下馬通」交差点から２区画目
1664（寛文４）年	図４－２	記載無し	大河内善左衛門　不明　20貫文
1668・69（寛文８・９）年	図４－３	記載無し	大河内善左衛門　不明　20貫文
1678～80（延宝６～８）年	図４－４	三沢頼母　一門　100貫文 北側と同一区画	大河内善左衛門　不明　20貫文
1681～83（延宝９～天和３）年	図４－５	記載無し	大河内善左衛門　不明　20貫文
1691・92（元禄４・５）年	図４－６	三沢左京　一門　100貫文	太田次郎兵衛　召出　130貫文
1724（享保９）年以降	図４－７	黒沢要人　着座　300貫文 北側と同一区画	岩山縫殿介　虎間　62貫文 北側と同一区画
1760～66（宝暦10～明和３）年	図５－８	大立目下野　一族　100貫文 北側と同一区画	記載無し
1786～89（天明６～寛政元）年	図５－９	高泉主計　準一家　270貫文 北側と同一区画	古内進　不明　不明
1856～59（安政３～６）年	図５－10	布施備前　着座　170貫文 北側と同一区画	佐伯勇五郎　不明　不明

表３　武家屋敷地区第16地点関連絵図人名
Tab.3　List of names of *samurai* lived at this location

年代	図	「筋違橋通」沿い	
		東区画	西区画
1664（寛文４）年	図４－２	御作事小屋	澁谷益庵　内科医　5貫文
1668・69（寛文８・９）年	図４－３	御小屋	澁谷益庵　内科医　5貫文
1678～80（延宝６～８）年	図４－４	御作事小屋	澁谷益庵　内科医　5貫文
1681～83（延宝９～天和３）年	図４－５	市川江左衛門　不明　不明	澁谷益安　内科医　5貫文
1691・92（元禄４・５）年	図４－６	北図書　召出　100貫文	東側と同一区画
1724（享保９）年以降	図４－７	黒沢正太夫　不明　不明	真山十左衛門　虎間270貫文
1760～66（宝暦10～明和３）年	図５－８	富塚平馬　不明　不明	真山太之助　虎間270貫文
1786～89（天明６～寛政元）年	図５－９	記載無し	真山九郎兵衛　虎間200貫文
1856～59（安政３～６）年	図５－10	佐々豊前　着座303貫文	真山大吉　虎間200貫文

番士・次の間番士・広間番士に分けられた。組士と卒が下級藩士となる。なお仙台藩では、生産高や知行高を、一般的な石高ではなく、戦国時代以来の貫高で表示していた。貫高と石高の換算は、寛永検地を経て、１貫（1000文）を10石に換算するように定められた。寛永検地以前の換算については、いくつかの説がある。ただし、ここで検討材料とする屋敷拝領者が記載されている藩政用絵図が、寛文４年（1664年）以降のものしか存在せず、全て寛永検地より新しい時期のものとなるので、１貫を10石と換算すれば良いこととなる。

武家屋敷地区第13地点（BK13）は、「筋違橋通」と「裏下馬通」の交差点の北東側に位置し、「筋違橋通」のすぐ北側にあたる場所であると考えられる（図６）。絵図と対比させて考えると、調査地点は、「筋違橋通」に面し、「裏下馬通」との交差点から１軒目と２軒目の屋敷の南端付近で、この２軒の屋敷にまたがると判断された（『調査報告』２）。

２軒の屋敷について、これらを使用していた人名を、城下絵図から拾い出し、人名をもとに、これらの家臣の禄高や家格について整理したのが表２である。詳細は『調査報告』２を参照いただきたいが、二の丸裏門の「台所門」を出て、「下馬厩」が置かれている脇という重要な場所であり、武家屋敷地区第13地点周辺は江戸時代を通じて、かなり上級の家臣の屋敷が並んでいた区域と言える。

今回報告する武家屋敷地区第16地点（BK16）は、絵図との対応を図ると「筋違橋通」と「裏下馬通」の交差点の西側に位置する。この場所は、「裏下馬通」と「大掘通」に東西を画され、北側は「中ノ坂通」、南側は「筋違橋通」と二の丸北側の堀に画された区画の南西付近にあたる。絵図ではこの区画は中央で大きく東西に２分され、さらに２分された区画は南北で２ないし３区画に区分して屋敷地として使用されている。本調査区は、おおむね東側の区画に相当するものと考えられる。同様に絵図の人名をもとに、これらの家臣の禄高や家格について整理したのが表３である。

その東側の区画では、1664（寛文４）年から1678～80（延宝６～８）年の間は、「御作事小屋」「御小屋」と書かれている。1681～83（延宝９～天和３）年の絵図では、禄高等は不明であるが「市川江左衛門」の名前が記載されており、以後、「北図書」、「黒沢正太夫」、「富塚平馬」と変遷する。1856～59（安政３～６）年の絵図では、着座で禄高303貫文の奉行職佐々豊前が東側の区画全域を屋敷地として利用している。なお、西側の区画では、17世紀中葉から後半は内科医の澁谷益庵に利用され、1724（享保９）年以降の絵図では、真山の姓を持つ一族が代々利用している。虎間番士としては禄高200貫文以上とかなり高い。

豊前を輩出した佐々氏は畠山氏の旧臣で、初代藩主政宗からの家臣であり、真山氏も政宗以前からの譜代である。特に江戸時代の中頃から後半期にかけて上級家臣の屋敷地として利用されている。

武家屋敷地区第16地点（BK16）と武家屋敷地区第13地点（BK13）は「筋違橋通」と「裏下馬通」の交差点を挟んで近接し、同じ「筋違橋通」の北側にあたることから、屋敷地の変遷と景観を考える上で重要な情報が蓄積したと言える。

３．仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区におけるこれまでの調査

仙台城の考古学的調査は、本丸・二の丸・三の丸などの各地区において実施されている。二の丸地区については、東北大学の施設整備事業などに先立ち、東北大学によって調査が実施されてきた。三の丸地区では、仙台市博物館の建て替えに伴い、仙台市教育委員会による調査が実施されている。本丸地区では、石垣修復工事に伴う仙台市教育委員会による調査が、1997（平成９）年から実施され、多大な成果をあげるとともに、史跡指定への直接的な契機となった。2001（平成13）年度からは、文化庁の国庫補助を受けた遺構確認調査が仙台市教育委員会によって開始されている。表４・５に、仙台城と周辺武家屋敷地区における調査の一覧を示しておいた。

1978（昭和53）年、川内北地区のプール西側の排水管埋設工事の際、石組の井戸などが発見された。この時、東北大学の文学部考古学研究室によって緊急の調査が行われたのが、仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区における

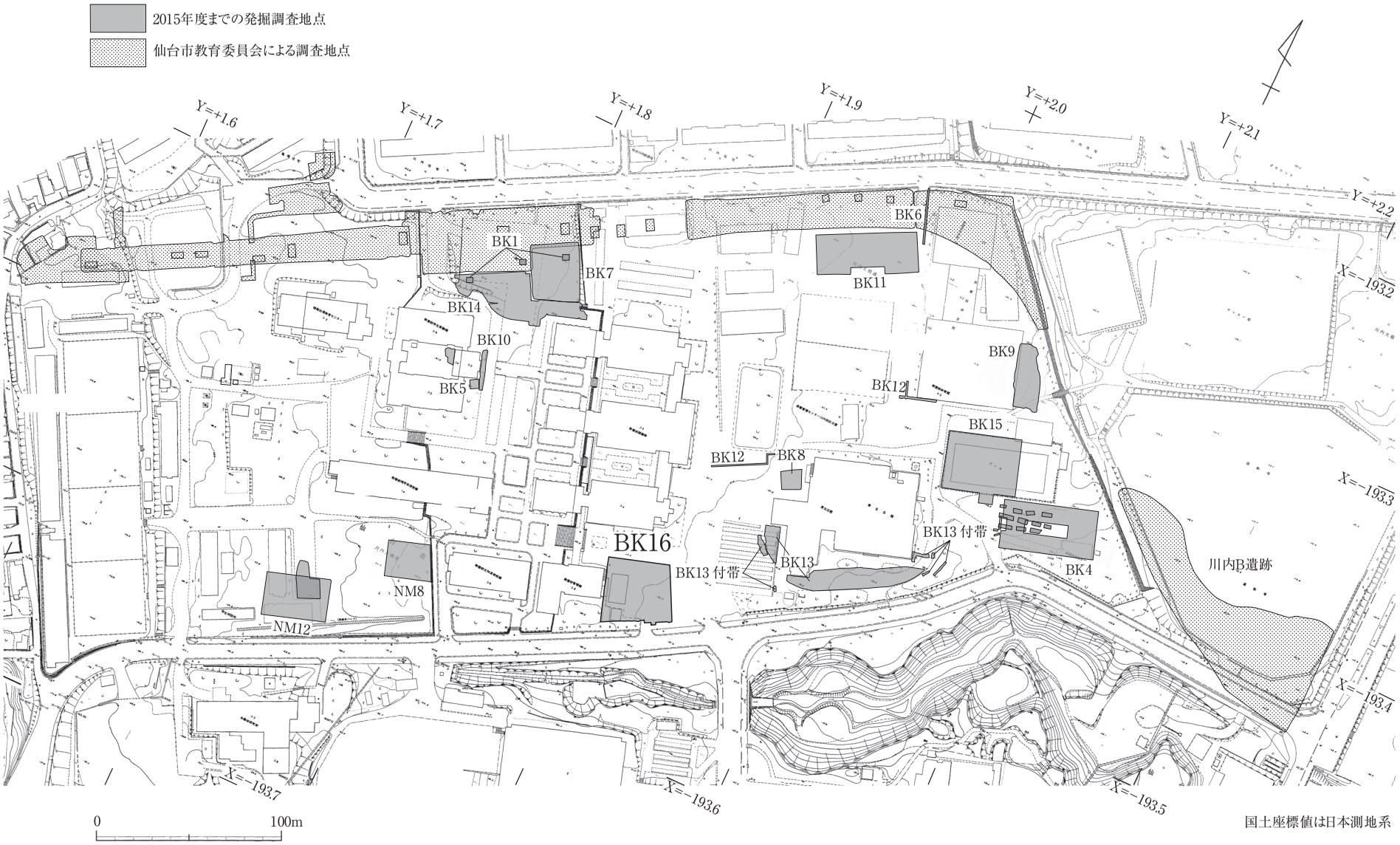


図６　川内北地区調査地点
Fig.6　Location of excavations at Kawauchi-Kita campus（NM i.e.Secondary Citadel）

最初の考古学的調査であった。しかしこの時は、既に掘削が実施された後に、露出した遺構の記録を作成する緊急の調査であったため、ごく部分的な調査にとどまらざるをえなかった。この時には、川内北地区は周知の遺跡の範囲内ではなく、新たに周知の遺跡として登録する措置もとられていない。

東北大学に埋蔵文化財調査委員会が1983（昭和58）年に設置され、構内遺跡の組織的な調査が開始されると、川内北地区についても遺跡が広がっている可能性に配慮し、必要な措置がとられるようになった。すなわち、施設建設が計画されている場所については試掘調査を行うとともに、営繕工事に際しては、立会調査を実施してきた。その結果、いくつかの調査において、江戸時代の遺構面が残存していることが明らかとなってきた。また、1986（昭和61）年度に調査を実施した二の丸地区第８地点（NM８）は、二の丸北側に東西に延びていた堀の、北側の岸の部分の調査であった（『年報』４）。二の丸に伴う堀の調査のため、調査地点名称は二の丸地区の名称を採用したが、調査を実施した場所は川内北地区であった。これらの調査は、川内南地区が周知の遺跡である仙台城跡の範囲内に含まれていたことから、周知の遺跡の隣接地という位置づけで、調査を実施していたものである。

これらの調査によって、川内北地区においても、江戸時代の遺構面が良好に残存していることが判明してきた。しかも、二の丸地区の遺構面から、途切れることなく、周辺の遺構面が連続して残っていることも明らかとなってきた。このような成果を受けて、仙台市教育委員会・宮城県教育委員会とも協議した結果、1993（平成５）年度に仙台城跡の範囲を拡大する措置がとられた。川内北地区に江戸時代の遺構面が良好に残存していることと、二の丸のすぐ北側に位置し、二の丸と密接に関連することから、仙台城跡の一部として扱うこととなった。これにより川内北地区のほとんどが、周知の遺跡である仙台城跡の範囲に含まれることとなった。

東北大学埋蔵文化財調査委員会に始まり、東北大学埋蔵文化財調査研究センターを経て、現在の埋蔵文化財調査室に至る、東北大学の構内遺跡調査組織による、施設整備などの工事に伴う二の丸北方武家屋敷地区における調査は、2015（平成27）年度までに第１～16地点の調査が実施されてきた（図６）。この内、1985（昭和60）年度に実施した第２地点（BK２）と第３地点（BK３）の調査は、結果的に立会調査で終了したため、欠番としている。したがって、14地点で調査が実施されていることとなる。

第１地点（BK１）は、2001（平成13）年度に調査を実施した第７地点と一部重なる区域で、1984（昭和59）年度に実施した試掘調査である。当時、課外活動施設の建設候補地であったため、江戸時代の遺構・遺物の有無を確認する目的で、２×２ｍの試掘調査区を３ヶ所設けて調査を行っている。その結果、東よりの調査区で、江戸時代の遺構面が残存していることが確認された。試掘調査実施後は、課外活動施設の建設場所が変更されたため、第７地点の調査が行われるまで、それ以上の調査は実施されなかった。

第４地点（BK４）は、1985（昭和60）年度に試掘調査を実施し、1994・95（平成６・７）年度に本調査を行った。試掘調査時には保健管理センターの建設予定地であったが、その後の計画見直しによって課外活動施設がこの地点に建設されることとなり、本調査を実施した。調査面積が1,143㎡となり、二の丸北方武家屋敷地区では、初めての大規模な調査となった。江戸時代の初頭から幕末に至る、多数の遺構が検出された（『年報』13）。

第５地点（BK５）は、教養部学生実験施設（当時、現学生実験棟）にエレベーターを設置するのに伴い、1989（平成元）年度に実施した。40㎡という小規模な調査であったが、溝が検出されている（『年報』７）。

1996（平成８）年度に実施した第６地点（BK６）は、給水管埋設に伴う調査である。調査面積は15㎡と狭いが、比較的多くの遺構が検出されている（『年報』14）。

2001（平成13）年度に実施した第７地点（BK７）は、マルチメディア教育研究棟新営に伴う調査である。調査を行った面積が810㎡と、まとまった規模の調査としては、第４地点に続く調査となった。礎石建物・掘立柱建物・掘立柱列や溝・井戸など、江戸時代の各時期の遺構が検出された。特筆されるものは、大規模なゴミ穴が検出され、様々な種類の遺物が大量に出土したことである。このゴミ穴からは、享保年間（1716～35年）の年号

が記されたものを含む、多数の荷札木簡が出土している。木簡の記載内容や、捨てられたゴミの内容から、堀をはさんだ二の丸地区のゴミが運び込まれて捨てられたものと考えられる（『年報』19第１～５分冊）。

第８地点（BK８）は、厚生会館前の上屋取設工事に伴い、2002（平成14）年度に調査を実施した。28.6㎡と小規模な調査であった。溝やピットなどが検出されている（『年報』20）。

第９地点（BK９）は、課外活動施設（川内ホール）新営に伴い、2003（平成15）年度に調査を実施した。体育館西側の、グラウンドとの段差に近い区域での調査であった。363.5㎡とやや規模の大きな調査であったが、段丘崖にかかる区域での調査であったため、遺構密度はさほど高くなかった。小規模な石垣や溝、掘立柱列などが発見されている（『年報』21）。

第10地点（BK10）は、学生実験棟改修に伴い、2006（平成18）年度に調査を実施した。建物の東側と、中庭の２ヶ所で調査を行った。建物東側の調査区は、第５地点の調査区に隣接し、溝・井戸などが検出されている。中庭の調査区では、道路側溝の可能性のある石垣が発見されている（『年報』24）。

第11地点（BK11）と第12地点（BK12）は、仙台市高速鉄道東西線（以下、地下鉄東西線と略する）機能補償に関係する調査である（『調査報告』１）。第11地点は、サブアリーナ棟新営に伴うもので、調査面積は1,401㎡で、大規模な調査となった。掘立柱建物・溝・井戸や大規模に掘り込まれた遺構など、多数の遺構が検出された。第12地点は、屋外給排水管設備の迂回工事に伴うもので、遺構面まで掘削が及ぶ区域のみを調査したため、59.6㎡と小規模な調査であった。

第13地点（BK13）は、厚生会館増改築に伴う調査である。2008（平成20）年度に増築建物本体部分（774.8㎡）、翌2009（平成21）年度に付帯工事部分（44.85㎡）の調査を実施している。前述のように「筋違橋通」と「裏下馬通」の交差点の北東側に位置し、千貫沢の支流の沢や掘立柱建物・柱列・ピット・溝などが確認された。

第14地点（BK14）は、地下鉄東西線川内駅の駅前整備に伴う調査である。2011（平成23）年度から調査を開始し、2012（平成24）年度も一部を継続して調査を実施したが、次の第15地点の調査を先行して実施することが必要となったため、調査途中で一時中断した。この段階で全体の調査面積954㎡の内、508.5㎡の調査が終了した。2015（平成27）年３月から調査を再開し、残りの調査区（445.5㎡）を調査した。柱列・ピット・溝・井戸・池など多数の遺構が検出されている。特に池跡は、内部を区画する際の盛土上に敷いた筵状の敷物が遺存していた。盛土が崩れないよう工夫したと推定される。

第15地点（BK15）は、課外活動施設新営に伴う調査で、2012（平成24）年度から調査を実施している。震災復旧工事に伴う調査を最優先としながらその合間をぬって2013・14（平成25・26）年度と継続して調査を実施した。1,455㎡と、東北大学が実施した北方武家屋敷地区の調査では、最大規模の調査となっている。北東側の段丘崖下へ流れる沢や、溝、柱列などが検出された。

第16地点（BK16）は学生支援センター新設に伴い、2013（平成25）年度に調査を実施した。本書で報告する調査であり、その調査面積は1,200㎡となった。調査地点は、千貫橋の北西側に位置し、堀の北岸と石組井戸を検出した。二の丸北側の堀は千貫沢の地形を利用したもので、江戸時代の絵図とも対応する。なお二の丸地区第８地点（NM８）の調査の際に同様に堀の北岸が確認されている（『年報』４）。

一方、仙台市教育委員会による調査も、地下鉄東西線建設に伴う調査を中心に、多数実施された。地下鉄東西線関係の本調査に先立ち、2004～2006（平成16～18）年度にかけて試掘調査が行われた。本調査と併行して、2007（平成19）年度にも東北大学のグラウンド部分で試掘調査が行われている。

なお川内北地区の中でももっとも東側のグラウンドについては、それまで実施した立会調査によって、確実に江戸時代に遡る遺構面が残存している場所は確認できていなかった。またこのグラウンド部分は、二の丸地区が立地する段丘面より、一段低い段丘面であったため（図１）、1993（平成５）年の仙台城跡の範囲拡大にあたって、グラウンドの区域やその周辺域は含まれなかった。

これらの試掘調査は、仙台城二の丸北方武家屋敷地区だけではなく、その東側の東北大学のグラウンド部分と仙台商業高等学校グラウンド跡地の区域、広瀬川を渡った対岸の西公園の区域でも行われている。

これらの試掘調査の結果、仙台商業高等学校グラウンド跡地の一部が川内Ａ遺跡、東北大学グラウンドの一部が川内Ｂ遺跡、広瀬川を渡った対岸の西公園部分が桜ヶ岡公園遺跡として、新たに周知の遺跡として遺跡登録がなされ、記録保存のための調査が行われるようになった。

仙台市教育委員会による地下鉄東西線建設に先立つ調査は、2005（平成17）年度の川内Ａ遺跡から始まり、二の丸北方武家屋敷地区では2006～09（平成18～21）年度にかけて、川内Ｂ遺跡では2008・09（平成20・21）年度に調査が行われている。桜ヶ岡公園遺跡では、2007・08（平成19・20）年度に調査が行われている。

これら、地下鉄東西線建設に伴う調査以外にも、仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区では雨水幹線の移設工事、桜ヶ岡公園遺跡では西公園の再整備に伴い、事前調査が行われている。2014（平成26）年度には市の施設建設に伴う試掘調査が川内Ａ遺跡の南側で行われ、新たに川内Ｃ遺跡として遺跡登録された。

仙台城三の丸地区の東側の追廻地区は、重臣を含む家臣の屋敷地や、馬場やそれに付随する施設などが置かれていた区域である。この追廻地区は、青葉山公園整備計画の対象区域となっており、公園便益施設や庭園などを設置する計画で検討が進められている。公園整備事業の推進にあたって、埋蔵文化財の確認を目的として、2006～08（平成18～20）年度に、遺構確認調査が実施されている。これらの確認調査を踏まえて、2012（平成24）年度から2013（平成25）年度にかけて追廻公園センター建築計画に伴う調査も行われた。

これらの調査が行われてきた結果、川内地区は、仙台城下の武家屋敷の中では、もっとも広い範囲で考古学的調査が実施されてきた地区となっている。特に、川内北地区の二の丸北方武家屋敷地区は、もっとも高い密度で考古学的調査が実施されている区域となってきていると言える。

表４　仙台城と仙台城周辺武家屋敷の調査一覧（1）
Tab.4　List of excavations of Sendai Castle and *Samurai* Residences around Sendai Castle（1）

年度		仙台市調査		東北大学構内		仙台市調査（周辺武家屋敷）	
		国庫補助確認調査以外	国庫補助重要遺跡遺構確認調査	二の丸地区	二の丸北方武家屋敷地区	二の丸北方武家屋敷地区	その他の周辺武家屋敷
1974	昭和49			文系厚生施設緊急調査（仙台市教委）			
1978	昭和53				プール脇排水管緊急調査（考古学研究室）		
1982	昭和57			第１地点試掘			
1983	昭和58	三の丸博物館新築（76集）		第１地点（『年報』１） 第２地点（『年報』１） 第３地点（『年報』１）			
1984	昭和59			第４地点（1987年度継続）	第１地点試掘		
1985	昭和60			第５地点試掘 第６地点（『年報』３）	第４地点試掘		
1986	昭和61			第７地点（『年報』４） 第８地点（『年報』４）			
1987	昭和62			第４地点（『年報』５） 第５地点（翌年度継続）			
1988	昭和63			第５地点（『年報』６）			
1989	平成１			第５地点付帯部（『年報』７） 第９地点試掘	第５地点（『年報』７）		
1990	平成２			第９地点（『年報』８）			
1991	平成３			第10地点（『年報』９）			
1992	平成４			第11地点試掘第12地点試掘第13地点（『年報』10）			
1993	平成５			第12地点（『年報』11） 第14地点（『年報』11）			
1994	平成６			第15地点（『年報』12）	第４地点（翌年度継続）		
1995	平成７			第11地点（『年報』13）	第４地点（『年報』13）		

＊仙台市教育委員会が刊行した報告書は、『仙台市文化財調査報告書』のシリーズ番号で示した。

表５　仙台城と仙台城周辺武家屋敷の調査一覧（2）
Tab.5　List of excavations of Sendai Castle and *Samurai* Residences around Sendai Castle（2）

年度		仙台市調査		東北大学構内		仙台市調査（周辺武家屋敷）	
		国庫補助確認調査以外	国庫補助重要遺跡遺構確認調査	二の丸地区	二の丸北方武家屋敷地区	二の丸北方武家屋敷地区	その他の周辺武家屋敷
1996	平成８	本丸１次石垣修復確認調査			第６地点（『年報』14）		
1997	平成９	本丸１次石垣修復（翌年度継続）		第16地点（『年報』15）			
1998	平成10	本丸１次石垣修復（翌年度継続）		第17地点試掘			
1999	平成11	本丸１次石垣修復（翌年度継続）					
2000	平成12	本丸１次石垣修復（翌年度継続）		第17地点（『年報』18）			
2001	平成13	本丸１次石垣修復（翌年度継続）	第１次大広間１次 第２次清水門（259集）		第７地点（『年報』19）		
2002	平成14	本丸１次石垣修復（翌年度継続）	第３次大番士土手他 第４次巽櫓 第５次本丸大広間２次（264集）		第８地点（『年報』20）		
2003	平成15	本丸１次石垣修復（275・282・298・349集）	第６次全域分布（271集） 第７次大広間３次 第８次登城路 第９次広瀬川護岸石垣（270集）		第９地点（『年報』21）		
2004	平成16	中門・清水門復旧整備（299集）	第10次大広間４次 第11次広瀬川護岸・沢曲輪他石垣（285集）			東西線試掘（289集）	川内Ａ・桜ヶ岡公園東西線試掘（289集）
2005	平成17	清水門周辺復旧整備（299集） 登城路１次（300集）	第12次大広間５次 第13次三の丸１次 第14次広瀬川護岸・中門石垣（297集）			東西線試掘（302集）	川内Ａ周辺・桜ヶ岡公園東西線試掘（302集） 川内Ａ遺跡東西線（312集）
2006	平成18		第15次大広間６次 第16次三の丸２次（309集）		第10地点（『年報』24） 第11地点（翌年度継続）	東西線（亀岡トンネル開削部・342集）	川内Ａ周辺・川内Ｂ東西線試掘（316集） 追廻遺構確認１次（350集）
2007	平成19		第17次大広間７次 第18次三の丸３次 第19次本丸北西石垣（330集）		第11地点（『調査報告』１） 第12地点（『調査報告』１）	東西線（川内駅部・立坑部・386集）	川内Ｂ東西線試掘東西線桜ヶ岡公園（広瀬川高架橋部・公園駅部他・384集） 桜ヶ岡公園２次（西公園再整備・318集） 追廻遺構確認２次（350集）
2008	平成20		第20次大広間８次 第21次造酒屋敷１次 第22次本丸北西石垣（348集）		第13地点（本体部分・『調査報告』２）	東西線（扇坂トンネル部・402集）	東西線川内Ａ（広瀬川右岸橋梁部・402集）・川内Ｂ（扇坂トンネル部・385集）・桜ヶ岡公園（公園駅部他・384集） 桜ヶ岡公園３次（西公園再整備・335集） 追廻遺構確認３次（350集）
2009	平成21	登城路２次（354集）	第23次造酒屋敷２次 第24次大広間追加 第25次広瀬川護岸石垣（374集）		第13地点（付帯工事・『調査報告』２）	東西線（扇坂トンネル・亀岡トンネル開削部・402集） 第２次雨水幹線（356集）	東西線川内Ａ（広瀬川右岸橋梁部・402集）
2010	平成22		第26次造酒屋敷３次（395集）			東西線（亀岡トンネル開削部・401集）	東西線川内Ｂ（扇坂トンネル部・401集） 追廻コート周辺試掘 桜ヶ岡公園４次（西公園再整備・378集）
2011	平成23				第14地点（翌年度継続）		
2012	平成24	大手門北側石垣土塀・中門北側石垣 本丸北西石垣（震災復旧）			第14地点（調査途中で中断） 第15地点（翌年度継続）		追廻青葉山公園センター
2013	平成25	平成24年度継続（震災復旧）			第15地点（翌年度継続） 第16地点（『調査報告』５：本報告）	歩行者通路試掘（扇坂斜面・427集）	追廻青葉山公園センター 川内Ｃ遺跡第１次（427集）
2014	平成26	本丸北西石垣北側・清水門石垣（震災復旧）			第14地点（翌年度継続） 第15地点		

＊仙台市教育委員会が刊行した報告書は、『仙台市文化財調査報告書』のシリーズ番号で示した。

第Ⅱ章　調査の方法と経過

１．調査地点の位置と調査経緯

仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第16地点（BK16）の調査は、学生支援センター新営に伴う調査である。新しく建設される学生支援センターは、川内北地区の管理棟の東側に隣接して造られることとなった。建物工事で掘削される区域の全域を調査対象として、記録保存のための事前調査を実施することとした。工期とほかの調査との関係上、建物の設計が未完了の段階から、調査を開始することとなった。予定地には、ガレージや倉庫など使用中の建物が存在し、それらの区域は撤去工事以降でないと調査できなかった。また、車両通路を確保する必要もあった。このような制約があったため、分割して順次調査を実施することとした。ガレージ等の撤去後の地形面は、ほぼ平坦な場所となる（図７）。

調査区の南側には、川内南地区と川内北地区を区切る道路があり、その南側には千貫沢が流れている。この千貫沢北側の道路は、江戸時代の道路「筋違橋通」をほぼ踏襲したものと考えられる。また、川内南地区へ至る道路が千貫沢を横切るところは土橋となっており、その東側には石垣が残っている。これは、江戸時代から続く千貫沢の土橋（千貫橋）で、石垣は改修されているものの、江戸時代から続くものである。本調査区は、その「千貫橋」の北西側にあたり、「筋違橋通」と「裏下馬通」の交差点の西側に位置している（図２）。

２．調査の方法と経過

（1）発掘調査の経過

最初に、調査区東側の建物の無い区域から調査を開始した。建物計画が未確定であったため、おおよその範囲で調査を開始することとし、2013（平成25）年４月１～５日に重機での表土掘削を開始し、検出した１号溝の調査を行った。その後に建物計画が確定したため、５月28・29日には２回目の重機掘削を行い、工事範囲に合わせて調査区を東側に拡張した。さらに掲示板の移設工事が終了した後の７月17～19日に３回目の重機掘削を行い、工事範囲に合わせて調査区を北側に拡張した。この３回の掘削した範囲に関して、調査区を横断する共同溝を基準とし、１・２区を設定した（図８）。

１区の調査では、米軍時代に埋設された石油タンクが２基発見された。撤去は建物工事の際に行うこととしたが、内部に油混じりの水が溜まっていたため、専門業者に依頼してこの滞留液を抜き取り、窒素ガスを封入して密閉した。また、２区の調査では、大きな堀の存在を確認することができた。６月には、富沢地区第10次調査（『年次報告』2013）を優先させることとして、本地区の調査は一時中断した。その後、堀にトレンチを入れて埋土堆積状況等を確認した結果、堀（新段階）と堀（古段階）に分かれることが判明した。また、堀（新段階）埋土には、遺物がほとんど含まれず、その土量が非常に多いことから、８月21日に重機で撤去した。堀（新段階）までの調査が終了した段階で、８月28日にラジコンヘリにより１・２区の空撮と写真測量を行った（図版１）。

９月５～13日には１区と２区東端の通路部分を埋め戻し、ガレージが置かれていた北西側の重機掘削を行った（ほぼ３区）。２区の堀（古段階）は、西側に広がることが予想されることから、埋め戻していない。この部分の調査は10月５日に空撮と写真測量を実施して終了した（図版２）。10月７～14日に、５号溝より北側を埋め戻し、南西部の重機掘削を行った（４区）。４区の堀（新段階）埋土も、11月７・８日に重機で掘削した。堀（新段階）埋土を撤去した段階で、11月20日に空撮・写真測量を実施した（図版３－１）。その後、堀（古段階）の調査を行い、12月11日に最終状況の空撮・写真測量を行って調査を終了した（図版３－２）。深い部分の埋め戻しを12月16～19日に行い、全ての作業を終了した。

今回の調査区は、堀の部分以外では、近・現代の盛土を除去すると、すぐに地山層となる。川内北地区は、本来は西から東へ緩やかに下る地形であったと考えられる。近代以降に段切り状に整地され、現在では平坦面が階

図７　武家屋敷地区第16地点調査区の位置
Fig.7　Location of BK16（BK16 i.e. Location 16 of *Samurai* residence）

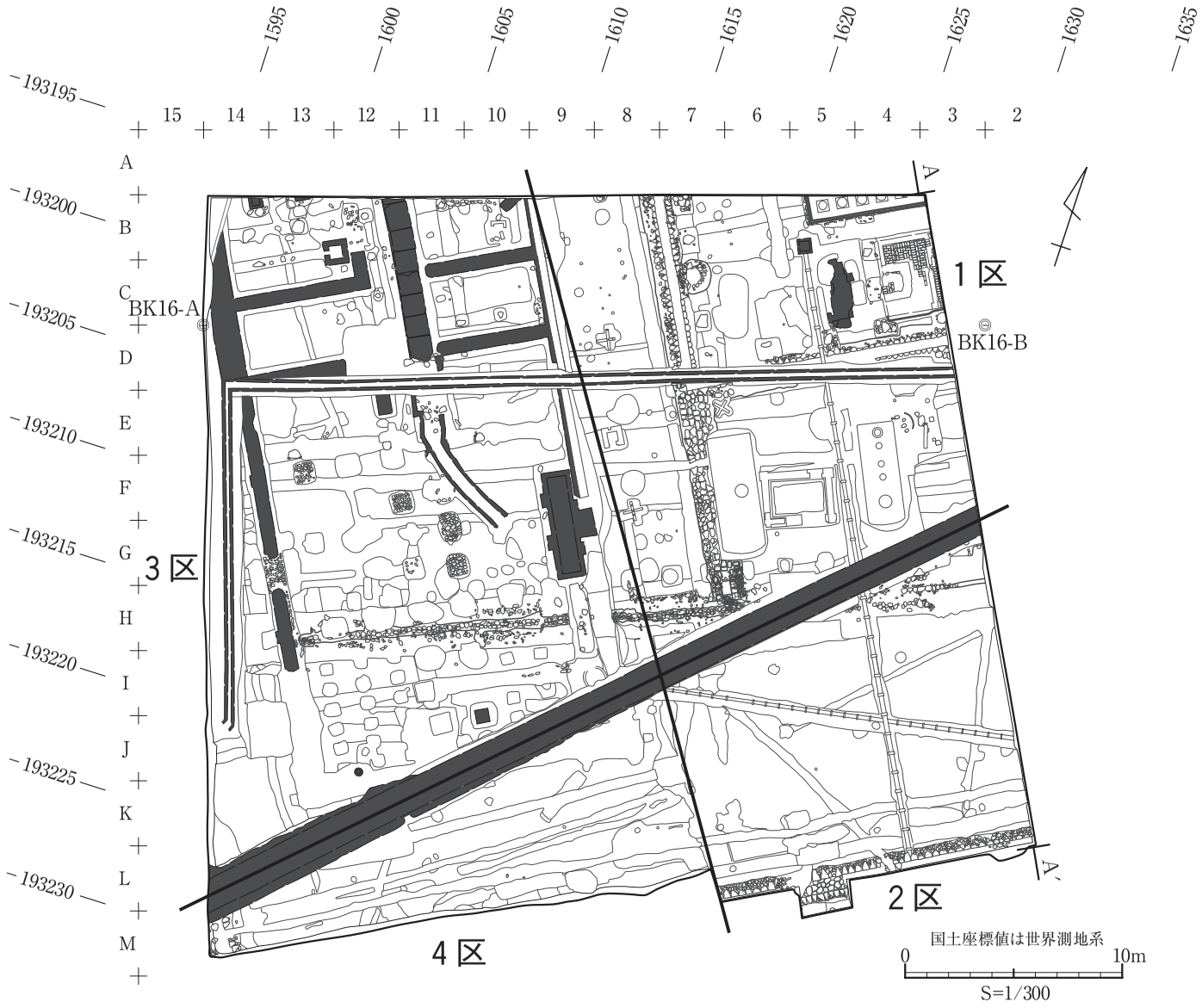


図８　武家屋敷地区第16地点調査区模式図
Fig.8　Pattern diagram of location at BK16

段状に連なっている。周辺での調査成果から、江戸時代の地表面は、調査区東端で現在の地表面付近であったと考えられ、１m近く削平されている可能性がある。もとの標高の高かった西側は、さらに削平の度合いが大きいと考えられる。この削平のため、堀より北の部分では、江戸時代に遡る可能性がある遺構は石組井戸が１基確認されただけである。石組の様相から、江戸時代に遡る井戸と考えられるが、安全確保の観点から上部の調査にとどまったため、詳細な時期は不明である。そのため、堀との対応関係も判明していない。

(2) 記録方法

調査にあたっては、おおよそ既存の管理棟や掲示板の方向に合わせて、３mグリッドを作成した（図８）。調査区南西方向を原点とし、グリッドラインに沿って局地座標を設定し、実測作業は局地座標を利用して行った。調査に際して設定した基準点の国土座標値は、以下のとおりで、基準点の位置・座標は図８に示した。平面直角座標系は、X系である。グリッドは、北で17°43′13″西偏している。

ＢＫ16－Ａ	局地座標	X＝30.000	Y＝0.000
	日本測地系	X＝－193,511.937	Y＝＋1,895.970
	世界測地系	X＝－193,203.204	Y＝＋1,596.075
ＢＫ16－Ｂ	局地座標	X＝30.000	Y＝36.000
	日本測地系	X＝－193,500.980	Y＝＋1,930.262
	世界測地系	X＝－193,192.247	Y＝＋1,630.366

今回の調査では、国際文化財株式会社に委託して、合計４回の空中写真測量と、空撮写真による写真測量を行った。それら以外の図面に関しては、手作業により作成している。

記録写真は、35mmフィルムによるカラーリバーサルとモノクロを基本として使用し、デジタル写真も同じカットで撮影した。空中写真撮影では、６×６のカラーリバーサルとモノクロ写真を撮影し、デジタル写真も同じカットで撮影している。

(3) 遺構の名称について

近世遺跡の調査においては、多種多様な遺構が検出される。その際、遺構の詳しい用途まで判明する場合もある一方で、遺構の形状からしか名称を付けられないものも存在する。そのため、異なる基準での名称が混在する場合が多い。今回調査現場において使用した遺構名称は、表６に示した通りである（表６：現場名称）。表６では、現地で付した遺構名称と、本報告にあたっての遺構名称の対照表を示した。遺物に付された注記は、全て現地での遺構名称となっている。また、遺構の属性は表７にまとめた。

比較的大型の掘り方を有するものを「遺構」とした。今回の調査では、１基の遺構名称を付したが、その後の調査で溝と判明したので、本報告書では使用していない。「土坑」は、不整形であるものも含め、小型から大型のものまで様々な規模がある掘り方を有するものである。そのうち、柱穴と想定できるような小型の土坑を「ピット」と呼称した。

ピットについては、建物や柱列を構成することが現場で判明している場合でも、ピット番号として、全体で一連の通し番号を現地で付けた。川内地区での調査の場合、遺構が複雑に重なり合うと、現場での検討では、組み合う全ての柱穴を確認できない場合が多い。調査後の図面整理の過程で、建物跡や柱列を確認している場合が多数を占める。現地で組み合うことが判明したものについて柱番号を付すと、その後に同じ建物跡などを構成することが判明したピットの番号と、柱番号が前後する場合が生じる。整理後に柱番号を付け直すと、現地での呼称との間で混乱をきたしかねない。そのため、現地で付ける遺構名称は、通し番号のピット番号に統一し、建物跡や柱列を構成するピットについては、図面整理後に柱番号を新たに付ける形で、名称を変更している。

表６　武家屋敷地区第16地点遺構名称対照表
Tab.6　List of the features name which are collated at BK16

現場名称	確定名称	時期	備考
堀跡（古段階）	堀（古段階）	Ⅰa期	
堀跡（新段階）	堀（新段階）	Ⅰc期	
Pit1	欠番	—	
Pit2	欠番	—	
Pit3	欠番	—	
Pit4	欠番	—	
Pit5	欠番	—	
Pit6	欠番	—	
Pit7	ピット７	Ⅰb期	
Pit8	欠番	—	
Pit9	ピット９	Ⅰb期	
Pit10	ピット10	Ⅰb期	
Pit11	ピット11	Ⅰb期	
１号遺構	13号溝	Ⅰa期	13号溝に変更
１号土坑	１号土坑	Ⅰa期	
１号溝	１号溝	Ⅲb期	
２号溝	２号溝	Ⅲa期	
３号溝（南北）	３号溝	Ⅲa期	
３号溝（東西）	14号溝	Ⅲa期	14号溝に変更
４号溝	４号溝	Ⅱb期	
５号溝	５号溝	Ⅱ期	
６号溝	６号溝	Ⅰb期	
７号溝	７号溝	Ⅱa期	
８号溝	欠番	—	７号溝に統合
９号溝	９号溝	Ⅲb期	
10号溝	10号溝	Ⅰb期	
11号溝	11号溝	Ⅰb期	
12号溝	12号溝	Ⅰb期	
なし	15号溝	Ⅱb期	撹乱から変更
１号井戸	１号井戸	Ⅲa期	
２号井戸	２号井戸	Ⅱ期以前	Ⅰb～Ⅰc期か。
近代トイレ	便所	Ⅲb期	
瓦溜まり１	瓦溜まり１	Ⅲa期	「治十七年高知縣和田類次」の線刻瓦あり
瓦溜まり２	瓦溜まり２	Ⅲa期	

（4）遺物の取り上げについて

当調査室の調査では、江戸時代に遡る可能性がある遺物については、全て採集することを基本方針としている。今回の調査では、師団期以降と考えられる層は、１層・撹乱として一括している。これより下位の層序から出土した遺物については、基本的に全ての遺物を採集している。１層・撹乱出土の瓦については、一定の基準を設けて現地で選別を行った。瓦は、江戸時代のものと、明治以降のものを識別することが、破片の場合ほとんど不可能なものも多い。そこで、長さと幅の判明するもの、軒瓦、刻印や線刻のあるもの、その他特殊なものについては採集するという基準を設けている。刻印や線刻の有無などについては、土壌が付着したままでは判別が難しいので、現地で土壌をおおよそ落とした上で、上記の基準に当てはまる資料のみを収集している。

（5）整理作業

当調査室での整理作業と報告書刊行については、経費は全学的基盤経費として、毎年度ほぼ一定した額が措置されている。調査の事業量は年度により多寡があるため、大きな滞りをきたすことなく調査報告書を作成できるよう、各年度に実施する整理作業を平均化して計画的に実施することとしている。武家屋敷地区第16地点の出土遺物は、整理作業前の段階で19箱と、比較的少ないものであった。他の調査の整理作業が残っていたことから、整理作業は2014年度から開始することとなった。併行して、他の調査の整理作業も進めたため、2014年度から2015年度の２ヶ年を整理作業期間とし、2015年度に報告書を刊行することとした。

2014年度は、遺構図面の整理・トレース、遺構写真の整理、出土遺物の水洗・注記・接合・分類・出土遺物の集計などの作業を実施した。2015年度は、実測図作成、トレース、磁器の文様のデジタル写真からの図化、写真撮影、遺物観察表の作成、図版レイアウト、原稿作成、編集などの作業を行った。遺物実測図の作成では、磁器と陶器の文様部分について、国際文化財株式会社に委託し、オルソイメージャーによって撮影したデジタル写真をもとに作成した。遺物写真の撮影は、有限会社仙台写真工房に委託して行ったほか、一部の遺物については、当調査室で撮影したものも含まれている。

近世遺跡の調査では、様々な材質の遺物が出土する。水浸木製品のように、材質に応じて特有の取り扱いを必要とするものも多いことから、遺物の種類ごとに整理作業を進めている。そのため本報告書でも、遺物の種類ごとに事実記載を行うこととした。遺物の種類ごとの分類基準などについては、出土遺物の報告の各項目の中で、必要に応じて記述する。

図面ないし写真を、本報告書に掲載した遺物については、種類ごとに以下の頭文字を決め、その下に通し番号の登録番号を付けている。実測図・写真図版・観察表の番号は、いずれもこの登録番号に統一している。遺物を管理する台帳も、全てこの登録番号をもとに作成しており、保管にあたっても、この登録番号を基礎に管理するようにしている。

磁器：ＣＪ　陶器：ＣＴ　土師質土器：ＣＨ　瓦質土器：ＣＧ　土製品：ＣＯ　瓦：Ｔ（古代の瓦を含む）
古銭：ＭＣ　古銭以外の金属製品：ＭＯ

今回の調査では、木製品・漆塗製品・金属製品など、保存処理が必要な遺物も少数ではあるが出土している。当調査室では、木製品と金属製品について保存処理を実施しており、武家屋敷地区第16地点から出土した遺物についても、独自に保存処理を行っている。

表７　武家屋敷地区第16地点遺構属性表
Tab.7　Attributes of all structural remains at BK16

①各種遺構

名称	時期	区名	形状	規模		確認面	重複する遺構の新古関係	
				面積（㎡）	長軸×短軸（m）		古い	新しい
堀（古段階）	Ⅰa期	I4～14 J・K2～14、L4～6	—	（172.9）	—	地山上面		６・11～13号溝 １号土坑 堀（新段階）
堀（新段階）	Ⅰc期	G3、H2～11 I～L2～14、M11～14	—	（342.4）	—	地山上面	堀（古段階） ６・10～12号溝 ピット7・9～11	5・14号溝
ピット7	Ⅰb期	I12	楕円形	（0.06）	0.4×（0.22）	11号溝上面	11号溝	10号溝 堀（新段階）
ピット9	Ⅰb期	H・I10	楕円形	0.12	0.44×0.36	地山、11号溝上面	11号溝	堀（新段階）
ピット10	Ⅰb期	I9	楕円形	0.07	0.34×0.24	地山上面		堀（新段階）
ピット11	Ⅰb期	I9・10	楕円形	0.07	0.28×0.26	地山上面		堀（新段階）
１号土坑	Ⅰa期	I6・7	不整長 楕円形	1.3	1.98×1（北側） ・0.66（南側）	地山、堀（古段階） 上面	堀（古段階） 埋没中	
便所	Ⅲb期	B3～5	—	（5.6）	（1.35）×（5.6）	地山上面		

＊規模の（　）は残存長を示す。面積は確認できた面積のみ。

②井戸

名称	時期	区	構造	規模		確認面	重複する遺構の新古関係		備考
				直径（m）	開口部面積（㎡）		古い	新しい	
１号井戸	Ⅲa期	C3、D3～5、 E3・4、F3・4	桶?	2.76	4.9	地山上面	４・15号溝	２号溝	規模は本体部のみ
２号井戸	Ⅱ期以前	H7	石組	1.52	1.9	地山上面		３号溝	

③溝

名称	時期	区	方向	規模			確認面	重複する遺構の新古関係		備考
				最大幅（m）	長さ（m）	面積（㎡）		古い	新しい	
１号溝	Ⅲb期	K2・3 L2～7	N－59.2°－E	1.7	（14.6）	（11.7）	堀（新段階）上面	堀（新段階）		９号溝との交角を復元・想定すると94.2°
２号溝	Ⅲa期	C3・4 D3～6 E6・7	N－61.3°－E	1.5	（12.1）	（10.2）	地山上面	４号溝、１号井戸		３号溝と接続。３号溝との交角は89.4°
３号溝	Ⅲa期	B・C7・8 D～F7 G・H6・7	N－147.6°－E	1.6	（19.5）	（24.6）	地山上面	４・５・７・15号溝 ２号井戸		２・14号溝と接続
４号溝	Ⅱb期	D3～6 E5～14 F13・14	N－66.6°－E	1.2	（33.1）	（15.9）	地山上面	７号溝	２・３号溝	
５号溝	Ⅱ期	G2～7 H2～14 I11～14	N－69.4°－E	2.4	（34.2）	（61.7）	堀（新段階）上面	11号溝 堀（新段階）	３・14号溝	
６号溝	Ⅰb期	J2～5 K4～7	N－56.4°－E	1.2	（14.4）	（10.5）	堀（古段階）上面	堀（古段階）	堀（新段階）	
７号溝（東西）	Ⅱa期	B～D13 E12・13 F3・4・7～12 G10～12	N－69.6°－E	0.6	（28.5）	（7.5）	地山上面		４・15号溝	東西と南北の交角は101.5°
７号溝（南北）			N－142.5°－E	0.4	（15.6）					
９号溝	Ⅲb期	M14	N－158.6°－E（推定）	（1.4）	（1.1）	（1.5）	堀（新段階）上面	堀（新段階）		
10号溝	Ⅰb期	I11・12	N－36.1°－E	0.6	（3.8）	（1.7）	地山上面	堀（古段階） 11号溝、12号溝 ピット7	堀（新段階）	
11号溝	Ⅰb期	H9・10 I9～14	N－64.1°－E	0.7	（14.8）	（5.7）	地山、 堀（古段階）上面	堀（古段階）	５・10・14号溝 ピット7・9 堀（新段階）	
12号溝	Ⅰb期	I11～14 J12～14	N－60.6°－E	（1.2）	（7.5）	（4.5）	地山、 堀（古段階）上面	堀（古段階）	10号溝 堀（新段階）	
13号溝	Ⅰa期	J・K12～14	N－82.6°－W	2.9	（3.3）	（6.0）	堀（古段階）埋土中	堀（古段階） 埋土下層	堀（古段階） 埋土上層	
14号溝	Ⅲa期	G2～7 H2～14 I11～14	N－69.4°－E	2.4	（34.2）	（51.6）	堀（新段階）上面	5・11号溝、 堀（新段階）		３号溝と接続
15号溝	Ⅱb期	E3～6 F3～14	N－69.2°－E	0.8	（33.4）	（11.2）	地山上面	７号溝		

＊長さの（　）は残存長を示す。

第Ⅲ章　基本層序と時期区分

１．基本層序

今回の調査では、現代の表土層および師団期以降の近代の整地層を１層とした。調査区東壁では、１層を1a層から1g層に細分した（図９・10）。1a層は、現代に近い時期の整地層である。1b・1d・1f層は炭がとくに目立つ層である。1c・1e層は、炭は混じるものの粘土が主体となる層である。これらの層は、地形面が平坦になるように整地した層であり、その土質等から近い時期の整地によるものと考えられる。そして、この層は、第二師団期のレンガ基礎の建物跡を覆うように分布していることから、戦後に形成された層であると言える。これらの層を切るような撹乱は、鉄管の掘り方等の米軍期から現在までになされたものと言える。また、この炭が目立つ層より下の1g層は、第二師団期に形成された層と考えられる。この1g層の上下の面で第二師団期における遺構が確認でき、その前後関係が判断できる。

近世以前の遺構に関しては、１層を除去した段階で確認を行なった。調査区を東西に横断する５号溝より北側については、１層を除去した段階で地山層が露出し、近世以前の層は削平されていた。この地山面で検出した遺構に関しては、個別に確認を行い、近世に属するものか確認しながら調査を進めた。５号溝より南側は、堀の埋土が確認された。従って、近代以降の層を除去した段階で、北側では地山、南側では堀（新段階）が検出されることとなる。

２．時期区分

本調査区で確認できた様々な遺構は、大きく区分すると、江戸期を含むそれ以前と、明治初期から第二師団設置を経た戦後までの時期、米軍・大学の時期の３期に分けられる。そのうち、明治初期から第二師団を経た戦後までの時期の遺構を掘り込面のほか、遺構同士の重複関係、遺構の軸方向等の特徴から、前期・後期の２期に区分した。従って、それぞれをⅠ期・Ⅱ期（図11）・Ⅲ期（図12）・Ⅳ期（図13）の４期に大別した。基本的に、Ⅱ期からⅣ期の近・現代の遺構は、調査時には撹乱として取り扱った。しかし、Ⅱ・Ⅲ期における石組溝などは、江戸期の同様の遺構との比較検討の上で良好な資料となるものと考えられることから、図面などの記録を作成した。本報告書では、それらの特徴的な遺構のみ第Ⅳ章で説明する。なお、このような措置は、武家屋敷地区第11地点（BK11）の調査・報告でも同様に行った（『調査報告』１）。さらに、この各大別時期に関して、それぞれ細別を行った。

Ⅰ期は、堀（古段階）が埋没する以前の時期をⅠa期、堀（古段階）埋没後の時期をⅠb期、堀（新段階）埋没後の時期をⅠc期とした。これらの遺構については、第Ⅳ章で詳述する。

Ⅱ期には、1g層によって覆われた４・７・15号溝のほか、それらと並行する５号溝がある。７号溝は、４・15号溝と重複関係がある。そのため、５・７号溝をⅡa期、４・15号溝をⅡb期とした。なお、２号井戸は、その石組の様相から江戸期のものとも考えられるが、遺物は出土していないので正確な時期は不明である。そのため、Ⅱ期以前の遺構として取り扱った。

Ⅲ期には、１g層が形成された後の遺構が属する。Ⅲa期には、大きめの石を用いた礎石建物、方形の掘り方に石を詰めた基礎を有する建物、２・３・14号の石組み溝、１号井戸が存在する。Ⅲb期には、１・９号溝、レンガ基礎による大規模な建物のほか、レンガ桝と土管などがある。

Ⅳ期は米軍期以降であり、Ⅳa期はヒューム管や石油タンク、共同溝等のライフラインを設置した時期である。Ⅳb期には、調査区の南西部に建物が１棟確認できる。この建物は、図３－１の建物aとした建物にあたるものと推定できる。Ⅳc期は、大学の建物等の跡である。

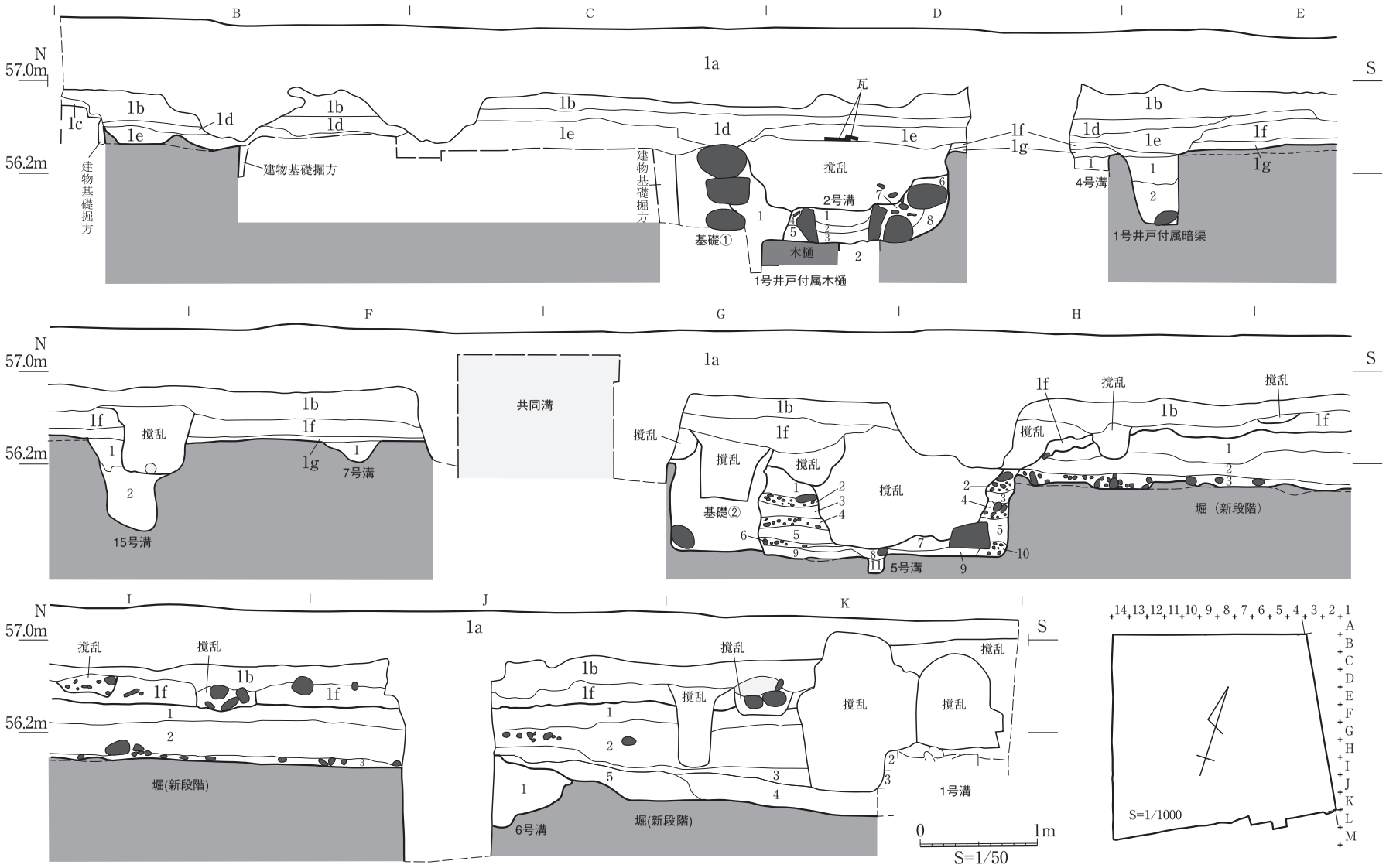


図９　武家屋敷地区第16地点東壁断面図
Fig.9　Layer sections of the east wall at BK16

基本層
1a　現代の整地・盛土層など
1b　7.5YR2/1　黒色　炭　粘性なし・しまり強　底面に黄褐色粘土を層状に僅かに含む
1c　10YR6/6　明黄褐色　粘土　粘性強・しまり強　径１cm程度の黒褐色粘土を僅かに含む　レンガを含む
1d　10YR2/1　黒色　炭　粘性なし・しまり強　径１cmの明黄褐色粘土を僅かに含む
1e　10YR5/6　黄褐色　粘土　粘性強・しまり中　褐灰色粘土をマーブル状にやや多く含む　径１-３cmの炭化物を少量含む　レンガ片を少量含む　底面に灰白色土（石灰？）を層状に含む
1f　10YR5/4　にぶい黄褐色　粘土質シルト　粘性中・しまり弱　径３cm程度の礫を多く含む　部分的に炭を多く含む
1g　10YR4/4　褐色　粘土質シルト　粘性中・しまりやや強　径５mm-１cmの灰白色シルトを少量含む

２号溝
1　2.5Y3/2 黒褐色　粘土　粘性強・しまり弱　径５mm-１cm程度の黄褐色粘土を僅かに含む　底面に木皮を多く含む　拳大の礫をやや多く含む
2　10YR3/1 黒褐色　砂質シルト　粘性弱・しまり弱　径３cm程度の礫を多く含む　木片をやや多く含む
3　10Y6/2 オリーブ灰色　粘土　粘性強・しまり弱　径１cm程度の礫を非常に多く含む
4　N3/1 暗灰色　粘土質シルト　粘性やや強・しまり中　径１cm程度のオリーブ灰色粘土ブロックを少量含む
5　N3/1 暗灰色　砂質シルト　粘性弱・しまり中　径３cm程度の礫を多く含む
6　10YR6/6　明黄褐色　粘土　粘性強・しまり強
7　2.5Y3/1 黒褐色　粘土質シルト　粘性やや強・しまり弱　径１cm程度の黄褐色粘土をやや多く含む　拳大の礫を多く含む
8　10Y5/2 オリーブ灰色　粘土　粘性強・しまり中　径３cm程度の灰色粘土ブロックを多く含む　径１cm程度の礫を少量含む
１～３層は埋土　４～８層は堀方埋土
４号溝
1　10YR4/6 褐色　粘土　粘性強・しまり弱　径５cm程度の灰黄褐色粘土を多く含む
５号溝
1　2.5Y4/2 暗灰黄色　粘土質シルト　粘性やや強・しまりやや強　径１-３cmの黄褐色粘土を少量含む　酸化鉄を僅かに含む
2　2.5Y5/4 黄褐色　砂質シルト　粘性弱・しまり中　径１cm程度の礫を非常に多く含む
3　2.5Y4/2 暗灰黄色　粘土質シルト　粘性中・しまりやや強　酸化鉄を少量含む
4　2.5Y5/4 黄褐色　砂質シルト　粘性やや弱・しまりやや強　径１cm程度の礫を非常に多く含む
5　10YR4/2 暗灰黄色　粘土質シルト　粘性やや強・しまり強　酸化鉄をやや多く含む
6　2.5Y5/4 黄褐色　砂質シルト　粘性弱・しまり強　径１-３cm程度の礫を非常に多く含む
7　N3/0 暗灰色　砂　粘性なし・しまり中　径１cm程度の黒褐色砂質シルトブロックを僅かに含む
8　7.5Y4/1 灰色　粘土　粘性強・しまり中
9　2.5Y5/6 黄褐色　粘土　粘性強・しまり強　径１cm程度の砂ブロックを少量含む
10 2.5Y4/1 黄灰色　粘土質シルト　粘性やや強・しまりやや強　径１cm程度の黄褐色粘土ブロックを僅かに含む　酸化鉄を少量含む
11 2.5GY4/1 暗オリーブ灰色　砂質シルト　粘性中・しまり弱
６号溝
1　10YR5/6 黄褐色　粘土　粘性強・しまり中　全体ににぶい黄橙色粘土小ブロックとにぶい黄褐色粘土小ブロックを斑状に含む　一部にブロック状に暗褐色粘土を含む　植栽の痕跡か
７号溝
1　10YR4/2　灰黄褐色　粘土　粘性強・しまり弱　拳大の礫を多く含む
15 号溝
1　10YR5/6 黄褐色　粘土質シルト　粘性中・しまり中と 10YR4/2 灰黄褐色　粘土　粘性強・しまり中の混合　炭化物粒を多く含む　径３cm程度の礫を僅かに含む
2　2.5Y4/2 暗灰黄色　粘土　粘性強・しまり強　径３-５cmの黄褐色粘土を少量含む　拳大の礫を僅かに含む

１号井戸付属木樋
1　10YR3/1 黒褐色　粘土　粘性強・しまり強　径１cm程度の褐灰色粘土を少量含む
１号井戸付属暗渠
1　10YR6/6 明黄褐色　粘土　粘性強・しまり中　径１cm程度の炭化物を多く含む　褐灰色粘土を下部に多く含む　径５cm程度の礫を少量含む　酸化鉄を僅かに含む
2　10YR5/6 黄褐色　粘土　粘性強・しまり弱　径３-５cmの褐灰色粘土を僅かに含む

堀（新段階）
1　図 25-①の１層と同じ
2　図 25-①の３層と同じ
3　10YR5/4 にぶい黄褐色　砂　粘性なし・しまり弱　径１-５cmの礫を帯状に含む　径１-３cmの黄橙色粘土ブロックを一部に含む
4　10YR4/4 褐色　粘土　粘性強・しまり中　鉄分を含む　径１-２cmの礫を僅かに含む　黒褐色粘土小ブロックを僅かに含む
5　10YR6/3 にぶい黄橙色　粘土　粘性やや強・しまり中　砂粒を僅かに含む　鉄分を含む　マンガンを極僅かに含む

図10　武家屋敷地区第16地点東壁断面図土層注記
Fig.10　Layer sections of the east wall at BK16

図11　武家屋敷地区第16地点における近代から現代の遺構（1）
Fig.11　Features in the modern era at BK16（1）

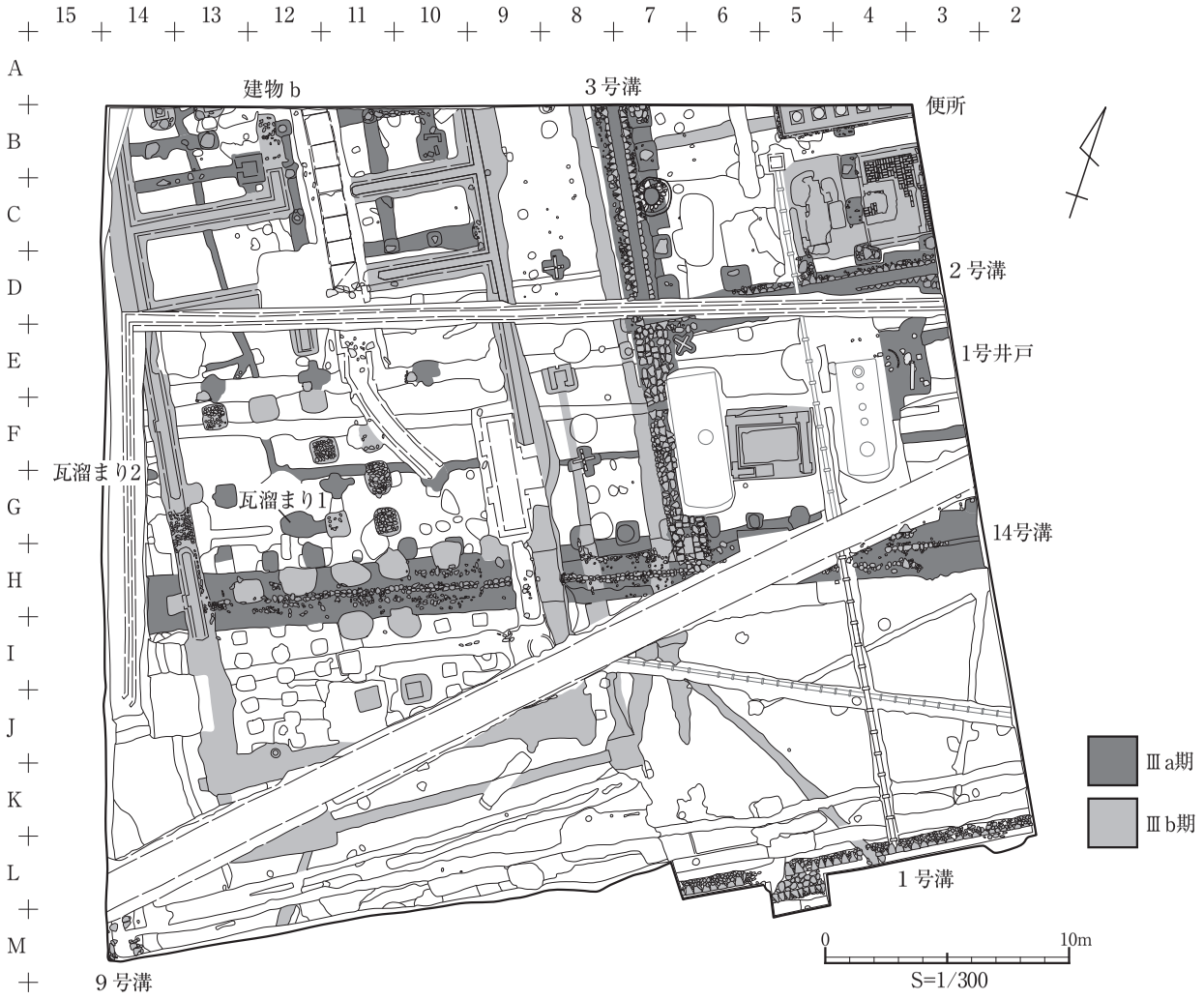


図12　武家屋敷地区第16地点における近代から現代の遺構（2）
Fig.12　Features in the modern era at BK16（2）

図13　武家屋敷地区第16地点における近代から現代の遺構（3）
Fig.13　Features in the modern era at BK16（3）

第Ⅳ章　検出遺構

１．Ⅰa期の遺構

【堀（古段階）】（図14～17、図版５－３～５、図版６～８）

今回の調査区南側全域に広がる。当初確認した堀を掘り下げている段階で、非常に固く締まり、小石を多く含む面を確認した。さらに、その面では乾裂が多数認められた。これらのことから、ある程度の期間、その面は地表面として機能していたことが考えられた。そのため、堀を堀（古段階）と堀（新段階）に区分した。

堀（古段階）の外形は整っておらず、曲線状の不整形のものとなる（図14）。３区南側では、東部と西部に分かれる。そのうち西側を堀（古段階B）、東側を堀（古段階A）とした。２・４区の堀（古段階）は、堀（古段階A）と同一のものと考えられる。しかし、説明の都合上、本報告書では２・４区の堀を「堀（古段階C）」、３区南側の堀を「堀（古段階A）」、「堀（古段階B）」と呼称して説明する。また、後にも述べるが、４区の西側調査区で地山面の高まりを検出している。堀（古段階A）と堀（古段階B）は、この西側調査区近辺で接続していたものと考えられるが、直接的な重複関係は不明である。

今回の調査では、現地表面からの深さが深くなるため、安全が確保できる範囲内で調査を行った。堀（古段階A）は、土層観察用のベルトを設定した上で掘り下げた。堀（古段階B）は、Ⅲ期の撹乱を利用して調査区を設定し、ある程度の高さまで掘り下げた。堀（古段階C）では、岸が落ち込んでいく部分は一定の深さまで調査し、岸に掘り込まれた遺構の有無を確認した。また、Ｋ３区では全面的に掘り下げたほか、東・西・中央の３ヶ所に深掘り調査区を設定し、埋土の状況などを把握することを目的とした。

・堀（古段階A）（図16－⑤、図版７－３・４）

調査できる面積が狭いことから、10列に南北方向のベルトを設定し、全面的に掘り下げた。埋土は４枚確認した。埋土は粘土が主体を占めているが、２層では有機物が腐食したとみられる黒色土が堆積していた。底面はI・J列境付近から南側に急激に落ち込む。ほかの遺構などは確認できなかった。

・堀（古段階B）（図16－④、図版６－２）

13列で確認されたⅢ期の撹乱を利用し、掘り下げを行った。当初、礫を多量に含む埋土が特徴的な１号遺構と重複しているものと考えられた。しかし、断面や平面形状等を観察した結果、１号遺構は堀（古段階B）が埋没中に形成された溝であることが判明した。その溝は、13号溝として登録した。

埋土は、11枚確認した。Ⅲ期の撹乱により５・６層程度までは、すでに破壊されていた。そのため、新たに掘り下げたのは、それ以下の層となる。これらの埋土には、砂や礫の夾雑物は少なく、地山由来の粘土が主体の土壌が堆積している。そして、下層に近い10層では、堀（古段階A）の２層と同様に黒色土が堆積していた。

これらの埋土を掘り下げた結果、北半分までは底面を検出することができた。その底面は、11号溝近辺から急激に落ち始め、凹凸が著しい。落ち込みが始まる位置は、堀（古段階A）とおおむね同じでI・J列の境近辺に位置する。

・堀（古段階C）（図15、図版５－３・４、７－１・２・５～７、図版８－１）

北・東部において岸部を確認するために掘り下げを行った。Ⅰ４～６区の北側の岸部は、撹乱部の断面である程度は確認できていたため、全面的に掘り下げた。その結果、1号土坑を検出した。東側岸部のＫ３区では、全面的に掘り下げ、底面を確認している（図21－②、図版８－６、９－２）。この区では、堀（古段階C）は西方向に向かって緩やかに傾斜していたが、６号溝近辺からは急激に落ち始める。その埋土は、２枚のみであった。最下面は地山ブロックが混じる粘土層で、その上の層は有機質が腐食した黒色土を含む粘土層である。さらにその上には、堀（新段階）の埋土が堆積する。

東側調査区では、６列に幅１m程のトレンチを設定し、約１m掘り下げた（図15－①）。北側の岸部に1号土坑

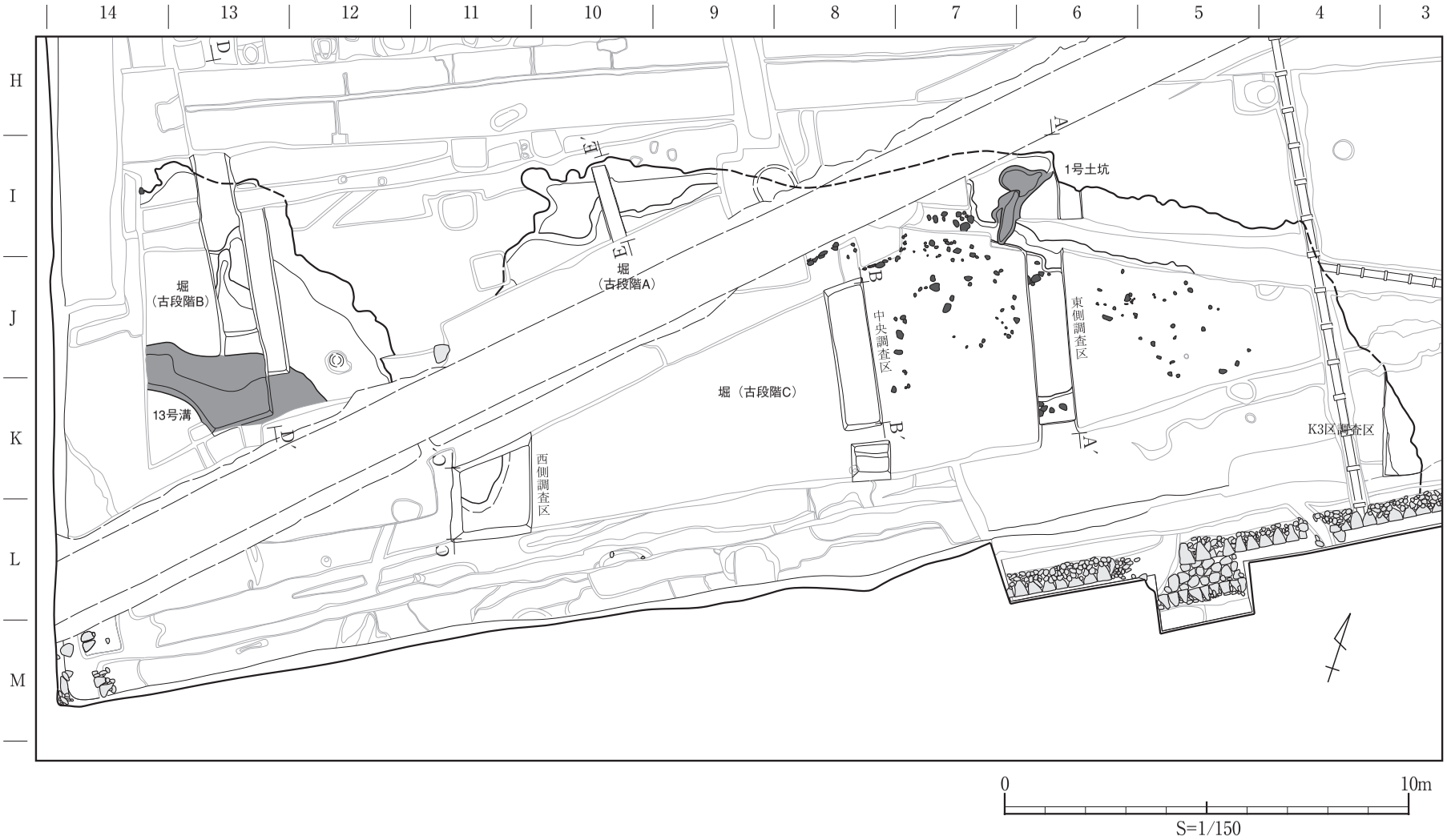
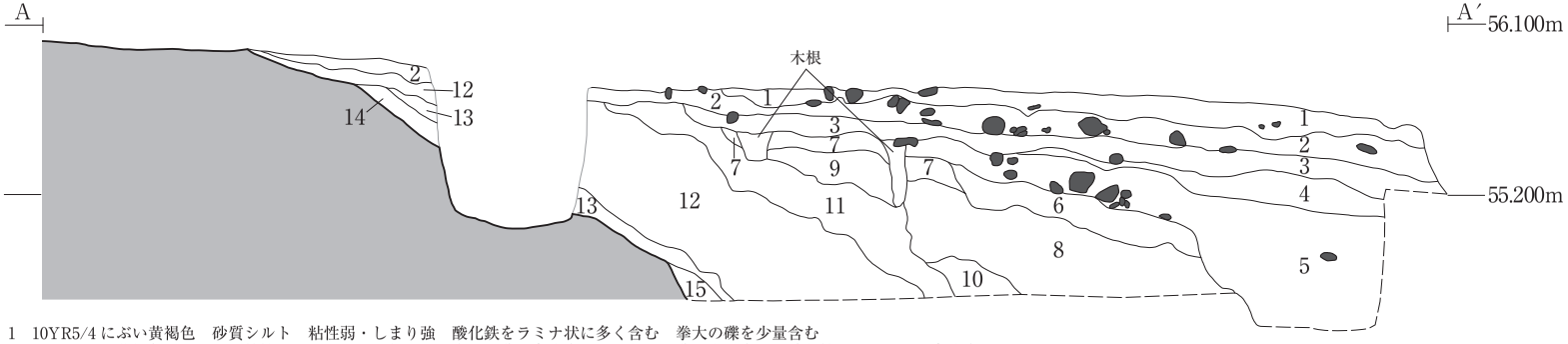


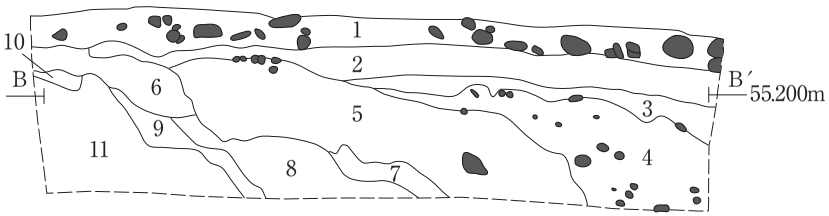
図14　武家屋敷地区第16地点における堀（古段階）とその他の遺構
Fig.14　The Distribution of an old stage moat and other features at BK16

①堀（古段階 C）東側調査区東壁断面図



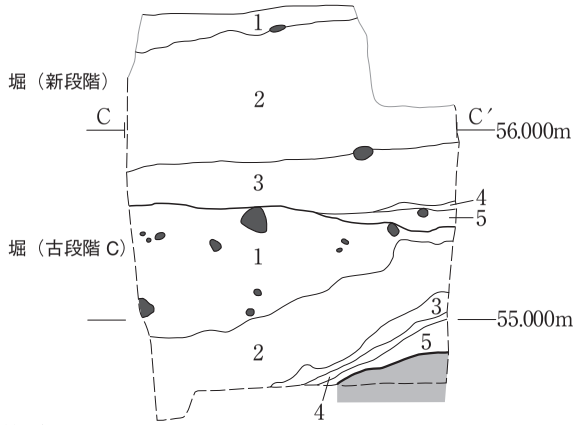
1　10YR5/4 にぶい黄褐色　砂質シルト　粘性弱・しまり強　酸化鉄をラミナ状に多く含む　拳大の礫を少量含む
2　10YR4/2 灰黄褐色　シルト　粘性中・しまり中　径１cm～拳大の礫を多く含む　風化した礫を少量含む　酸化鉄をラミナ状に多く含む
3　10YR4/3 にぶい黄褐色　粘土質シルト　粘性やや強・しまり強　黒褐色粘土を南側下層に多く含む　風化した礫を少量含む　酸化鉄をラミナ状に多く含む
4　10YR6/3 にぶい黄橙色　粘土質シルト　粘性やや強・しまりやや強　酸化鉄を斑に非常に多く含む
5　10YR3/2 黒褐色　シルト　粘性やや弱・しまりやや弱　径１cm程度の灰黄褐色粘土を少量含む　拳大の礫を非常に多く含む
6　10YR6/3 にぶい黄橙色　粘土質シルト　粘性やや強・しまりやや強　酸化鉄を斑に非常に多く含む
7　10YR6/3 にぶい黄橙色　粘土　粘性やや強・しまりやや強　黒褐色粘土をラミナ状に含む　酸化鉄をすだれ状に極僅かに含む
8　10YR3/2 黒褐色　粘土　粘性強・しまりやや強　にぶい黄橙色粘土と黄褐色粘土、にぶい黄褐色粘土を多く含む
9　10YR3/2 黒褐色　粘土質シルト　粘性中・しまり中　にぶい黄橙色粘土を極僅かに含む　酸化鉄粒を少量含む
10　10YR5/4 にぶい黄褐色　粘土質シルト　粘性やや強・しまり中　黒褐色粘土とにぶい黄橙色粘土を少量含む
11　10YR6/4 にぶい黄橙色　粘土質シルト　粘性やや強・しまり中　マンガン粒と炭化物粒を多く含む　酸化鉄を斑に少量含む
12　10YR3/3 暗褐色　粘土質シルト　粘性中・しまり中　にぶい黄橙色粘土と浅黄橙色粘土をラミナ状に含む　マンガン粒を非常に多く含む　酸化鉄をすだれ状に非常に多く含む
13　10YR3/1 黒褐色　粘土　粘性強・しまり中
14　10YR6/4 にぶい黄橙色　粘土質シルト　粘性やや強・しまり中　径１-３cmの黒褐色粘土を少量含む　酸化鉄を斑に少量含む
15　10GY5/1 みどり灰色　砂質シルト　粘性中・しまり弱　酸化鉄をすだれ状に極僅かに含む

②堀（古段階C）中央調査区東壁断面図



1　7.5YR5/1 褐灰色　シルト　粘性中・しまり強　明黄褐色粘土と酸化鉄をラミナ状に含む　明黄褐色粘土を多く含む　酸化鉄を斑に多く含む　拳大～人頭大の礫を多く含む
2　7.5YR4/1 褐灰色　粘土　粘性強・しまり中　黄橙色の粘土質シルトをラミナ状に含む　酸化鉄を斑に非常に多く含む
3　7.5YR3/1 黄褐色　粘土質シルト　粘性やや強・しまり中　黄橙色粘土を少量含む
4　N3/0 暗灰色　粘土質シルト　粘性中・しまり中　オリーブ灰色粘土をやや多く含む　径１-５cm程度の礫を多く含む　砂を全体に少量含む
5　10YR7/4 にぶい黄橙色　粘土質シルト　粘性やや強・しまりやや強　褐灰色粘土と黒褐色粘土を層状に一部含む
6　10YR4/1 褐灰色　粘土　粘性強・しまり中　オリーブ灰色粘土と黒褐色の粘土質シルトを層状に含む　酸化鉄を僅かに含む
7　10YR4/1 褐灰色　粘土　粘性強・しまり弱　明黄褐色粘土とオリーブ灰色粘土を多く含む　酸化鉄を斑に少量含む
8　10YR4/1 褐灰色　粘土　粘性強・しまり弱　黒褐色粘土、オリーブ灰色粘土とにぶい黄色粘土を層状に多く含む
9　10Y6/2 オリーブ灰色　砂質シルト　粘性弱・しまり弱　酸化鉄を極僅かに含む　10 層と類似する
10　10Y6/2 オリーブ灰色　砂質シルト　粘性弱・しまり弱
11　N3/0 暗灰色　粘土　粘性強・しまり弱　オリーブ灰色粘土をやや多く含む

③堀（古段階 C）西側調査区西壁断面図



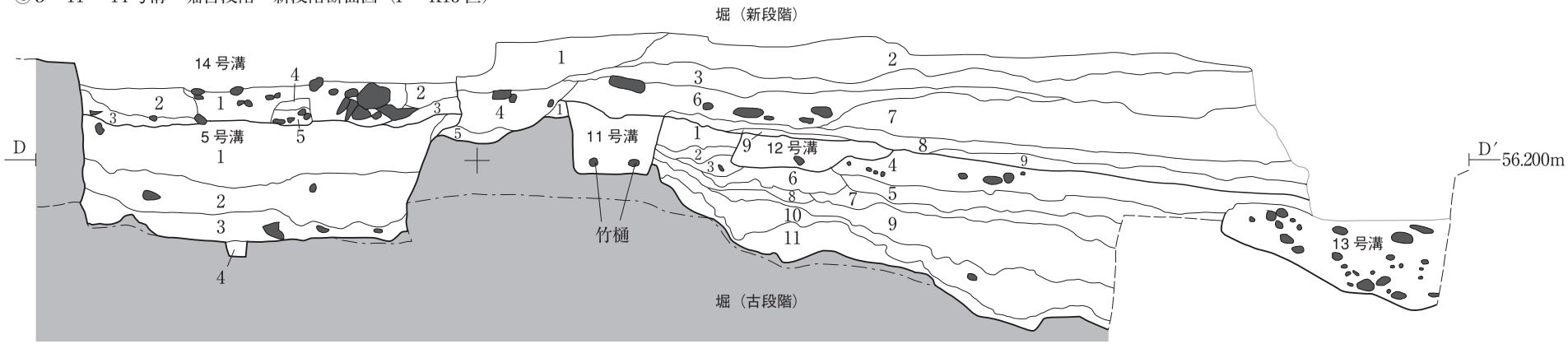
堀（新段階）
1　10YR5/6 黄褐色　砂質シルト　粘性弱・しまり弱　径３cm程度の灰黄褐色粘土を少量含む　酸化鉄を斑に少量含む
2　10YR5/6 黄褐色　砂　粘性なし・しまりやや強　灰黄褐色の粘土質シルトをラミナ状に含む　風化した礫を少量含む　酸化鉄をラミナ状に多く含む
3　10YR5/1 褐灰色　砂質シルト　粘性弱・しまりやや強　にぶい黄橙色の砂を細かいラミナ状に含む　礫を少量含む　酸化鉄をラミナ状に少量含む
4　10YR6/3 にぶい黄橙色　砂　粘性なし・しまり中　酸化鉄をラミナ状に少量含む
5　10YR4/1 褐灰色　粘土質シルト　粘性やや強・しまりやや強　酸化鉄を霜降り状にやや多く含む　径３cm程度の礫をやや多く含む

堀（古段階）
1　10YR5/2 灰黄褐色　粘土質シルト　粘性やや強・しまりやや強　風化した礫を多く含む　径３cm～拳大程度の礫をやや多く含む　酸化鉄を斑に多く含む　下層はグライ化
2　10YR4/1 褐灰色　粘土　粘性やや弱・しまり中　灰白色の砂質シルトをラミナ状に含む　径１cm程度のにぶい黄色粘土を少量含む
3　10Y6/1 灰色　粘土質シルト　粘性強・しまりやや弱　径１cm程度の礫をやや多く含む　酸化鉄を斑に少量含む
4　2.5Y4/1 黄灰色　粘土　粘性強・しまり弱
5　10Y6/2 オリーブ灰色　粘土質シルト　粘性強・しまり中　酸化鉄粒を少量含む

0　1m
S=1/40

図15　武家屋敷地区第16地点における近世の遺構（1）
Fig.15　Features of the Edo period BK16（1）

④5・11～14号溝・堀古段階・新段階断面図（I～K13区）



5号溝
1　10YR黄褐色　シルト　粘性中・しまり中　浅黄橙色、明黄褐色粘土ブロックと暗褐色土ブロックを斑状に多く含む　白色土粒、黄色土粒を含む　下部はグライ化する
2　10Y4/1灰色　粘土　粘性強・しまり中　オリーブ黒色粘土ブロックを斑状に含む　径5-10㎝の礫を僅かに含む
3　5Y4/1灰色　粘土　粘性強・しまり中　灰オリーブ色粘土ブロックを含む　木片を僅かに含む
4　5Y4/1灰色　粘土　粘性強・しまり中

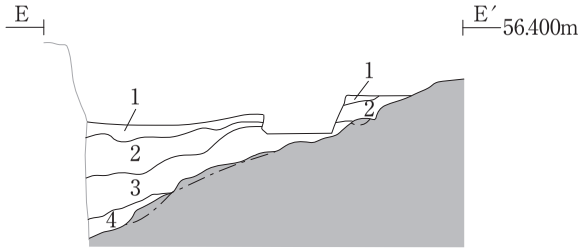
13号溝
10GY4/1暗緑灰色　砂質シルト　粘性きわめて弱・しまり強　拳大の礫を非常に多く含む　酸化鉄をラミナ状に少量含む

14号溝
1　10YR4/4褐色　シルト　粘性中・しまり中　径5㎝程度の黄褐色粘土ブロックを斑状に含む　径1-10㎝の礫を含む　黄色土粒、白色土粒、炭化物を含む　石組抜取埋土
2　10YR4/3にぶい黄橙色　シルト　粘性中・しまり中　黄褐色、明黄褐色粘土ブロックを多く含む　径1-2㎝の小礫を僅かに含む　白色土粒、マンガンを僅かに含む　掘方埋土
3　10YR4/4褐色　粘土質シルト　粘性中・しまり中　径3-5㎝の礫を含む　明黄褐色粘土小ブロックを僅かに含む　白色土粒を含む　堀方埋土
4　10YR4/4褐色　砂　粘性なし・しまり弱　埋土
5　10YR5/4にぶい黄褐色　粘土　粘性強・しまり中　白色土粒、黄色土粒、明黄褐色土粒を含む　径3㎜程度の炭化物を僅かに含む　底面溝埋土

堀（新段階）埋土
1　10YR4/2灰黄褐色　粘土　粘性強・しまり中を主体とし、にぶい黄褐色砂をラミナ状に含む　径1-3㎝の風化した小礫を僅かに含む　径5-20㎜の炭化物を僅かに含む　鉄分を含む
2　10YR5/2灰黄褐色　砂　粘性なし・しまり弱を主体とし、にぶい黄褐色砂をラミナ状にやや多く含む　径5-10㎜の風化した礫を僅かに含む　径1-2㎜の炭化物を極僅かに含む　鉄分を多く含み、砂の下面で鉄分の沈着がみられる
3　10YR5/3にぶい黄褐色　粘土　粘性中・しまり弱を主体とし、明黄褐色砂をラミナ状に含む　径5㎜程度の炭化物を僅かに含む　風化した小礫を僅かに含む
4　10YR4/3にぶい黄褐色　砂　粘性なし・しまり弱　径2-5㎝の小礫を含む　鉄分を僅かに含む　別の遺構の可能性がある
5　10YR4/3にぶい黄褐色　砂質シルト　粘性弱・しまりやや強　径5㎝程度の礫を少量含む　酸化鉄を僅かに含む　砂を少量含む　別の遺構の可能性がある
6　2.5Y6/2灰黄色　砂質シルト　粘性弱・しまり中を主体とし、にぶい黄褐色砂をラミナ状に僅かに含む　拳大～人頭大の礫を含む　径1㎝程度の炭化物を僅かに含む　にぶい黄橙色粘土小ブロックを部分的に僅かに含む
7　10YR5/3にぶい黄褐色　粘土　粘性強・しまり中を主体とし、明黄褐色砂、褐色砂をラミナ状に多く含む　径1㎝程度の炭化物を僅かに含む　マンガンを部分的に多く含む　径1㎝程度の風化した小礫を僅かに含む
8　2.5Y5/3黄褐色　砂　粘性ほぼなし・しまり極めて強　径1-2㎝程度の小礫を僅かに含む　鉄分多く含む
9　10YR4/4褐色　砂質シルト　粘性弱・しまり強　鉄分、マンガンを多く含む　径2-5㎝の小礫を僅かに含む

堀（古段階）埋土
1　10YR3/2黒褐色　粘土質シルト　粘性やや強・しまり中　径1㎝程度の灰白色粘土をやや多く含む　径1㎝程度の黄橙色粘土質シルト土を少量含む　酸化鉄を霜降り状にやや多く含む
2　10YR4/1褐灰色　粘土　粘性強・しまり中　径5㎜-1㎝程度の酸化鉄粒を少量含む　径1㎝程度の礫を極僅かに含む
3　10YR4/1褐灰色　砂質シルト　粘性弱・しまり中　径1㎝程度の風化した礫を極僅かに含む　径5㎜程度の酸化鉄粒を極僅かに含む
4　10YR6/1灰色　粘土質シルト　粘性やや強・しまり中　黒褐色粘土を層状に極僅かに含む　径3㎝程度のオリーブ灰色粘土質シルト土を少量含む　径1㎝～拳大の礫をやや多く含む　径1㎝程度の酸化鉄粒を少量含む
5　10Y5/1灰色　粘土質シルト　粘性やや強・しまり中　径1㎝程度の暗灰色粘土を極僅かに含む　酸化鉄を斑に少量含む
6　10Y5/1灰色　粘土質シルト　粘性中・しまり中　径5㎝程度の暗緑灰色粘土を少量含む　酸化鉄を斑に極僅かに含む
7　2.5Y6/4にぶい黄色　シルト　粘性やや弱・しまり中　径1㎝程度の暗灰黄色粘土を少量含む　酸化鉄を霜降り状に多く含む
8　2.5Y3/1黒褐色　粘土　粘性強・しまり弱　径5㎜程度の酸化鉄粒を極僅かに含む
9　5Y5/2灰オリーブ色　粘土　粘性強・しまり強　径1㎝程度のオリーブ黒色粘土を多く含む　径10㎝程度のオリーブ黒色粘土を僅かに含む
10　10YR3/1　黒褐色　粘土　粘性強・しまりやや強　径1-3㎝の暗灰黄色粘土をやや多く含む
11　10Y5/2オリーブ灰色　粘土　粘性強・しまり弱　径1㎝程度の黒褐色　粘土を少量含む
11・12号溝埋土の土層注記は図22-④・図23-②参照

⑤堀（古段階A）断面図（I10区）



1　10YR7/3にぶい黄橙色　粘土　粘性中・しまりやや強　暗褐色とにぶい黄褐色の粘土が混ざる　酸化鉄を斑に多く含む
2　10YR3/2黒褐色　粘土　粘性強・しまり強　明黄褐色粘土を少量含む　マンガンを少量含む　酸化鉄を斑に少量含む
3　N2/0黒色　粘土　粘性やや強・しまり強　オリーブ灰色粘土をやや多く含む　部分的にこのオリーブ灰色粘土が多い箇所もある
4　10YR5/3にぶい黄褐色　砂質シルト　粘性やや弱・しまり弱　酸化鉄を斑に少量含む

0　1m
S=1/40

図16　武家屋敷地区第16地点における近世の遺構（2）
Fig.16　Features of the modern period at BK16（2）

が位置する。その１号土坑近辺から、南側に向かって急激に傾斜し、I・J区の境近辺から更に落ち込む。その落ち込み部から南側に関しては、底面を確認することはできなかった。

埋土は15枚確認した。当初に堆積した層は、底面の急傾斜に従い堆積しているが、徐々にその傾斜は緩やかとなる。最後に堆積した１～４層の辺りでは、ほぼ水平に堆積している。また、５層堆積時には、調査区南側が大きく落ち込んでいる。この５層は、礫を多く含む特徴的な層である。また、底部近くの13層において、有機物が腐食した黒土層を確認した。

中央調査区では、８列に幅１m程のトレンチを設定し、約１m掘り下げた（図15－②）。この区の状況は、東側調査区とほぼ変わりない。ただし、堆積が厚いためか、底面はどの場所でも確認できなかった。埋土４層は東側調査区５層と対応するものと考えられる。その他の状況も、東側調査区と変わりない。

西側調査区では、K・L11区に２m四方のグリッドを設定し、約１m掘り下げた（図15－③）。その結果、北側端において地山を確認することができた。南側に向かって突端状に残っていた。そのため、埋土は東側と南側に向かって傾斜して堆積する状況となっている。

埋土は、５枚確認した。１層は、小礫を多く含む砂質の土層である。その特徴から、この層は東側調査区５層に対応するものと考えられる。また、４層は黒色の腐植土を含む層であり、この層も層準とその特徴から、東側調査区13層に対応する。埋土の層厚は、それほど厚くはない。西側に向かって傾斜するK３区のあり方や西側調査区の状況からすると、中央調査区の近辺が最も深い場所であることがわかる。

・堀（古段階）の堆積状況と遺物（図17）

各調査区の埋土の堆積状況を整理して、堀（古段階）の埋土を大別して示したのが、図17である。

各調査区では、共通する埋土の堆積状況が見て取れた。最下層には、地山由来の汚れた粘土層（埋土⑥層と呼称する。以下同様）が堆積し、その直上には、黒色土層（埋土⑤層）が堆積する。その後に、地山ブロックや黒色土を含む粘土層（埋土④層）が厚く堆積するが、水性堆積のような痕跡は認められない。そして、拳大程度の円礫を含む砂礫層（埋土③層）が堆積する。この砂礫層は、層状に堆積するのではなく南側に窪むように堆積する。その後に再び地山ブロックを含む粘土層（埋土②層）が堆積するが、この時点で堆積は平坦となる。最終的には、小礫を含む層（埋土①層）が堆積し、地表面となる。

このような状況から、本調査区における堀（古段階）は、常に滞水するような状況ではなかったことがわかる。そして、埋土⑤層の存在から、堀（古段階）の周辺には植物が繁るような景観が想定できる。また、調査区南側では窪むように埋土③層が堆積していた。堀（古段階C）の各調査区では明瞭に確認することができなかったが、堀（古段階B）で検出した13号溝のように、堀がある程度埋没した段階で溝が構築され、埋土③層により埋没した可能性もある。この層が堆積した段階で、堀（古段階）は、比較的平坦となり、次段階（Ｉb期）の各遺構が形成されたものと考えられる。

堀（古段階）出土の遺物は、陶器８点、瓦７点、古銭１点、土器４点である。調査した面積も狭いため点数も少ないが、元々含まれる遺物が多くはない。そのうち、時期がわかる資料としては、CT１がある（図版23）。この遺物は堀（古段階）埋土⑤層から出土しており、堀（古段階）が埋没していない時期の遺物とみられる。17世紀初頭から前葉の年代が比定できる。

【１号土坑】（図18－③～⑤、図版８－２・３）

堀（古段階C）の北側肩部を掘削中に検出した。形状は瓢形を呈しており、その規模は長軸1.98m×短軸北側1.00m、短軸南側0.66mとなる。検出面は、地山と堀（古段階C）の東側調査区埋土13層上面となる。堀（古段階C）が埋没する過程で形成されたものと考えられる。

埋土は７枚確認された。下部の６・７層は粘土質であり堀（古段階C）埋土13層と類似する。中層の４・５層は地山を多量に含む土層であり、周囲からの流入土と推定できる。１～３層は、しまりが比較的弱く、黒～暗褐

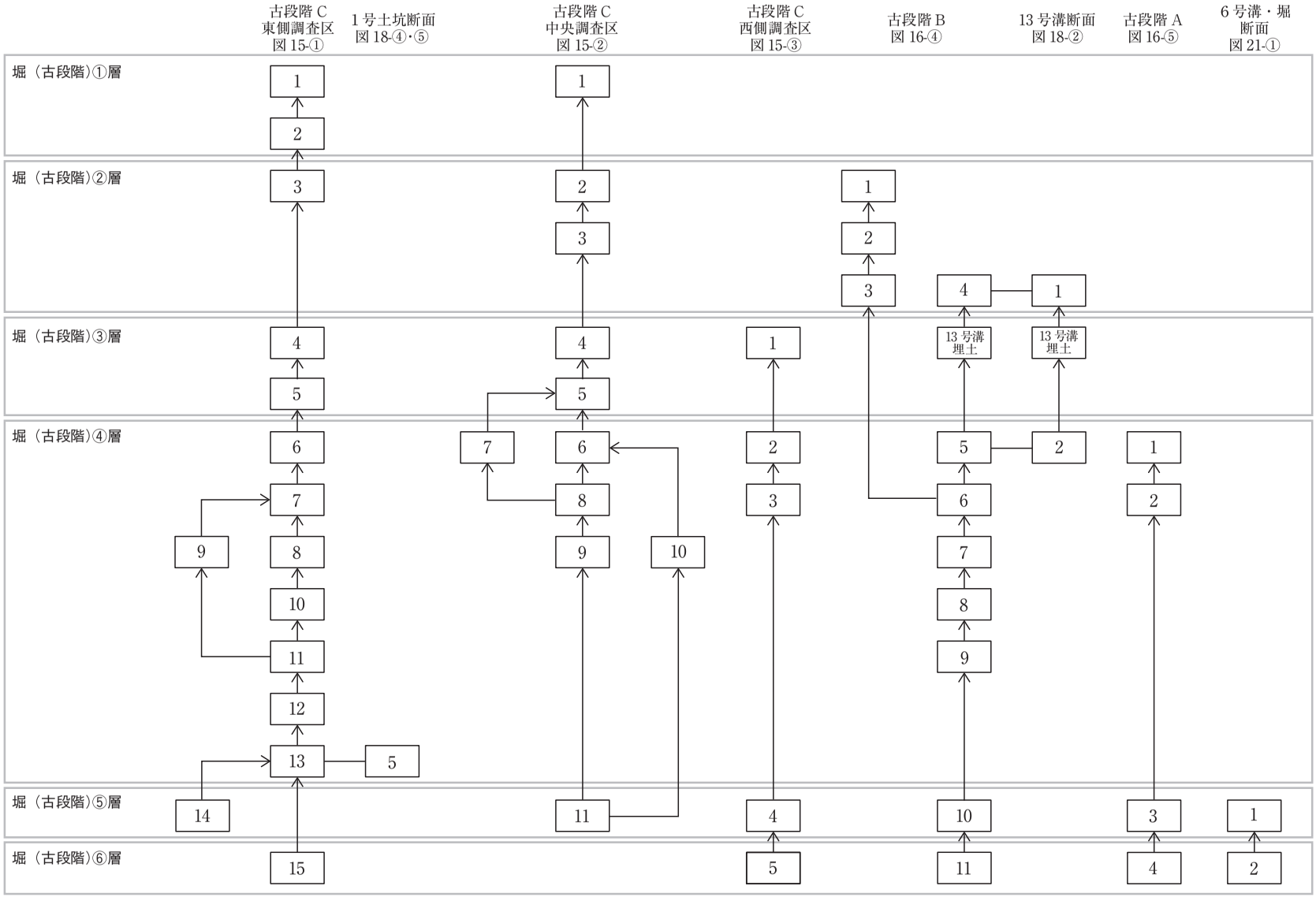
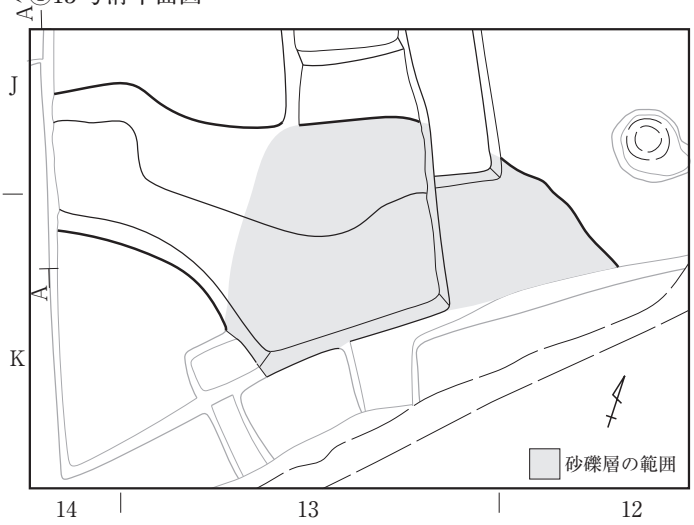
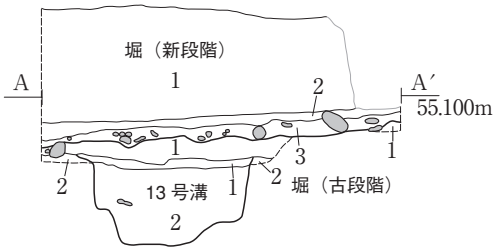


図17　堀（古段階）埋土の対応関係
Fig.17　The relationship of fill at the old stage moat.

①13 号溝平面図

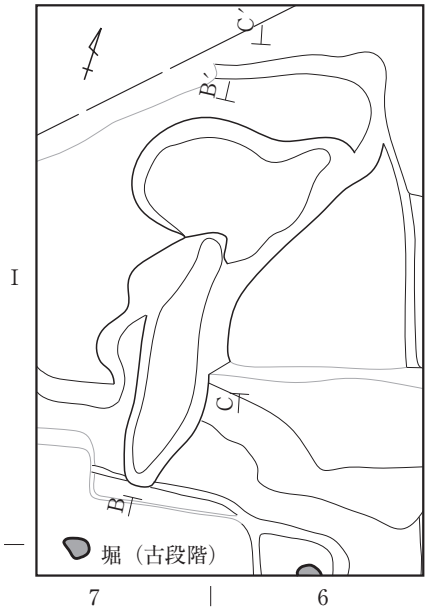


②13 号溝断面図

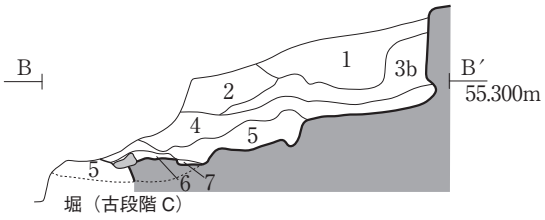


堀（新段階）
1　図 16-④の堀（新段階）7 層と同じ
2　図 16-④の堀（新段階）8 層と同じ
3　図 16-④の堀（新段階）9 層と同じ
堀（古段階）
1　図 16-④の堀（古段階）4 層と同じ
2　図 16-④の堀（古段階）5 層と同じ
13 号溝埋土
1　10YR5/2 灰黄褐色　粘土　粘性強・しまりやや強　酸化鉄を霜降り状に多く含む
2　10YR5/3 にぶい黄橙色　粘土質シルト　粘性やや強・しまり中　径 10 ㎝程度の黒褐色粘土を少量含む　砂を斑に多く含む　酸化鉄を霜降り状にやや多く含む

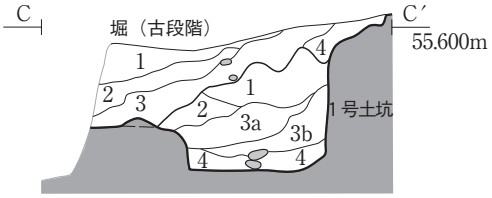
③1 号土坑平面図



④1 号土坑断面図西側



⑤1 号土坑断面図東側



1 号土坑
1　10YR2/2 黒褐色　粘土質シルト　粘性やや強・しまりやや弱　酸化鉄粒をやや多く含む　にぶい黄褐色粘土をやや多く含む　炭化物を僅かに含む
2　10YR3/3 暗褐色　粘土質シルト　粘性やや強・しまり中　にぶい黄褐色粘土を多く含む　下層に黒褐色粘土を多く含む　酸化鉄を斑状にやや多く含む
3a　10YR3/1 黒褐色　粘土　粘性強・しまりやや弱　にぶい黄橙色粘土を極僅かに含む　炭化物を極僅かに含む　酸化鉄を斑に少量含む
3b　10YR3/1 黒褐色　粘土　粘性強・しまり中　酸化鉄を斑状に少量含む　炭化物を少量含む
4　10YR4/3 にぶい黄褐色　粘土　粘性きわめて強・しまり中　黄褐色粘土を含む　南側にとくに多く含む　酸化鉄を斑に少量含む　マンガン粒を少量含む
5　10YR3/1 黄褐色　粘土　粘性きわめて強・しまり中　酸化鉄をすだれ状に少量含む
6　10YR4/2 灰黄褐色　砂質シルト　粘性やや弱・しまり弱　径 5 ㎜程度の酸化鉄粒を極僅かに含む
7　10YR4/2 灰黄褐色　粘土　粘性強・しまりやや弱　明黄褐色粘土をやや多く含む
堀（古段階）
1　10YR4/3 にぶい黄褐色　粘土質シルト　粘性中・しまり強　径 1 - 3 ㎝の灰黄褐色粘土を多く含む　径 1 ㎝程度の風化した礫を多く含む　径 3 ㎝程度の礫を多く含む　酸化鉄を斑にやや多く含む
2　10YR3/2 黒褐色　粘土質シルト　粘性やや強・しまり強　径 5 ㎜程度の灰黄褐色粘土をやや多く含む　径 2 ㎜程度の炭化物を極僅かに含む
3　10YR3/3 暗褐色　粘土質シルト　粘性やや強・しまり中　径 3 ㎝程度の灰黄褐色粘土を多く含む（南側は特に多い）　径 5 ㎜程度の炭化物を極僅かに含む　径 3 ㎝程度のにぶい黄橙色粘土を少量含む
4　7.5YR3/2 黒褐色　粘土質シルト　粘性中・しまり強　径 5 ㎜程度のにぶい黄褐色粘土を極僅かに含む　径 5 ㎜程度の炭化物を極僅かに含む
5　10YR3/2 黒褐色　粘土　粘性強・しまりやや強　径 1 ㎝程度の浅黄橙色粘土を極僅かに含む　径 5 ㎝程度の酸化鉄を極僅かに含む

0　1m
①：S=1/60
0　1m
②～⑤：S=1/40

図18　武家屋敷地区第16地点における近世の遺構（3）
Fig.18　Features of the modern period at BK16（3）

色を呈するシルトあるいは粘土の土層である。堀（新段階）が埋没するような、砂質土によって覆われていないことから、堀（古段階）が機能している時期に形成され、埋没した土坑であると言える。出土遺物はない。

【13号溝】（図18－①・②、図版８－４・５）

当初は３区のⅡ期の撹乱部底面にて確認され、１号遺構として登録した。その後、断面の検討から堀（古段階B）の埋土中に構築された溝であることが判明した。堀（古段階B）の埋土４層（図16－④）に覆われる。その層準からすると、堀（古段階）がほぼ埋まりきった段階で、13号溝が構築され、その後に最後の堀（古段階）の埋土によって覆われた状況が窺える。この溝は、南から西に向かって緩やかに湾曲しており、そのほとんどが調査区外に伸びるため詳細は不明である。規模は、南側が最大幅となり2.9m程となる。

埋土は、東側と西側で大きく様相が異なる。東側埋土は拳大の円礫を多量に含む層である（図16－④）。その土層の分布は、図18－①に示した。西側はシルト・粘土のやや均質な土層である（図18－②）。この溝の底面の高さは、西側から南側に向かって大きく傾斜しており、東側の砂礫層は最後に埋没した埋土であることが推定できる。

出土遺物としては磁器小中皿１点、陶器中碗丸１点（図版24：CT22）が出土しているが、その時期は不明である。

２．Ⅰb期の遺構

堀（古段階）が埋没した後に形成された遺構群である（図19）。

【ピット７】（図20－①・②、図版11－１・２）

３区に位置する。重複関係から11号溝より新しく、10号溝より古い。10号溝に半分を切られているため形状は不明であるが、楕円形を呈していたものと推定できる。規模は長軸40cm×残存短軸22cmである。埋土は灰褐色の粘土質シルト層の1枚のみである。柱痕跡も認められた。底面には円礫が位置しているが、掘り方等が認められないことから本ピットに伴っていないと判断した。しかし、柱の重み等でめり込んだ可能性もある。出土遺物はない。

【ピット９】（図20－①・③、図版11－３・４）

３区に位置する。重複関係から11号溝より新しい。形状は楕円形で、規模は長軸44cm×短軸36cmである。埋土は1枚のみである。柱痕跡等は確認されておらず、用途は不明である。出土遺物はない。

【ピット10】（図20－①・④、図版11－５・６）

３区に位置する。形状は不整な楕円形で、規模は長軸34cm×24cmとなる。埋土は１枚のみである。ピット９と同様に、用途は不明である。出土遺物はない。

【ピット11】（図20－①・⑤、図版11－７・８）

３区に位置する。形状は楕円形で、規模は長軸28cm×短軸26cmとなる。埋土は１枚のみである。ピット９と同様に、用途は不明である。出土遺物はない。

【６号溝】（図21、図版８－６・７、図版９－１～３）

２区に位置し、東西方向に横走する。調査区内での長さは10.5m、最大幅は1.2mとなる。埋土は1枚のみである。この溝の範囲中において、立木が腐食したような痕跡が列状に残されていた（図21－①、図版８－７）。また、埋土の中には多数の木根による撹乱が認められた。これらの痕跡から、溝を掘った後に、植樹した痕跡と推定した。この樹木の痕跡の直径は、おおむね30cm程であり、それほど大きくはない。地点によっては木根が遺存していたため、その樹種同定を行った。その結果、スギであることが判明している（第Ⅵ章）。この樹木は、堀（新段階）新段階の断面において、ピット状の痕跡として確認しており（図25－①）、堀（新段階）の埋没が進行する途中にも樹立していたことがわかる。また、６号溝は堀（古段階）が落ち始める箇所に位置していることから、

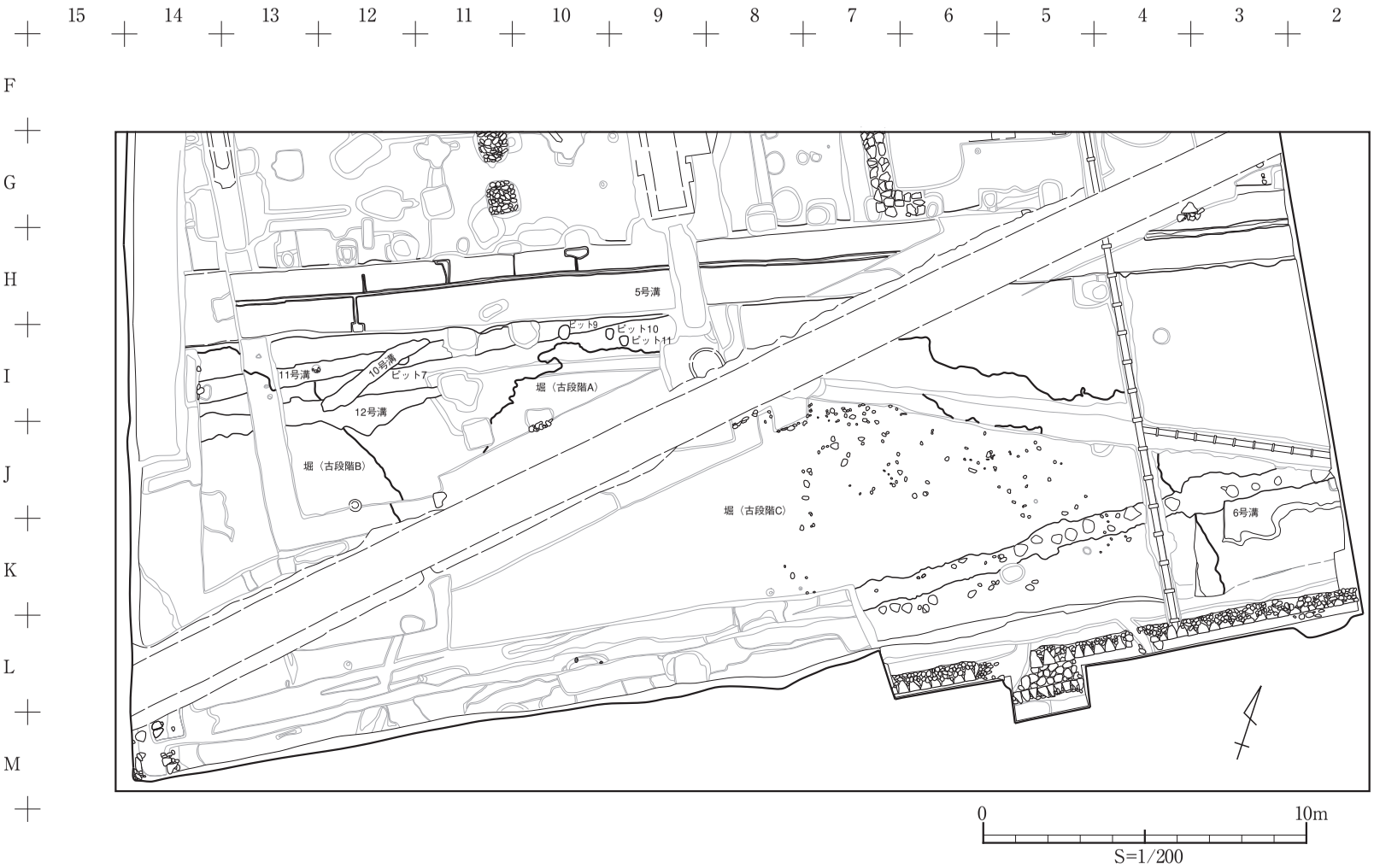
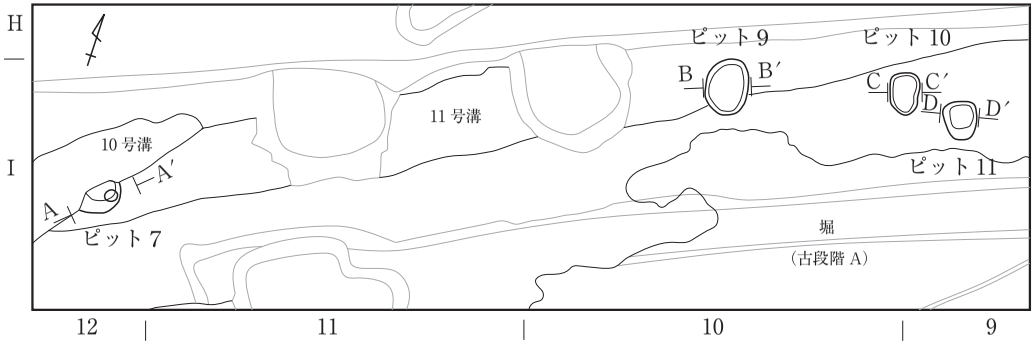
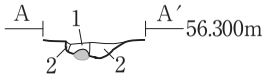


図19　武家屋敷地区第16地点における堀（古段階）上面の遺構
Fig.19　The distribution of features on the surface of the old moat at BK16

①ピット７・９～11 平面図

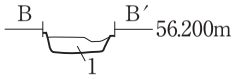


②ピット７断面



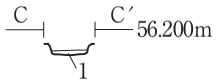
1　10YR7/4 にぶい黄橙色　粘土　粘性強・しまり強　酸化鉄を斑に少量含む　マンガン粒を僅かに含む　径５㎜-１㎝の灰黄褐色シルト土を僅かに含む　底面に径８㎝の礫がある 柱痕跡
2　10YR4/2 灰黄褐色　粘土質シルト　粘性やや強・しまり強　酸化鉄を斑に僅かに含む　マンガン粒を僅かに含む　径１㎝程度のにぶい黄橙色粘土（地山）を極僅かに含む

③ピット９断面



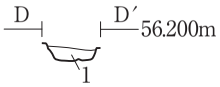
1　2.5GY4/1 暗オリーブ灰色　粘土質シルト　粘性やや強・しまり中　白色土粒を僅かに含む　径３㎝程度のオリーブ灰色粘土を極僅かに含む

④ピット 10 断面



1　2.5GY3/1 暗オリーブ灰色　粘土質シルト　粘性やや強・しまりやや弱　径３-５㎝程度のオリーブ灰色粘土を少量含む　酸化鉄を斑に含む

⑤ピット 11 断面

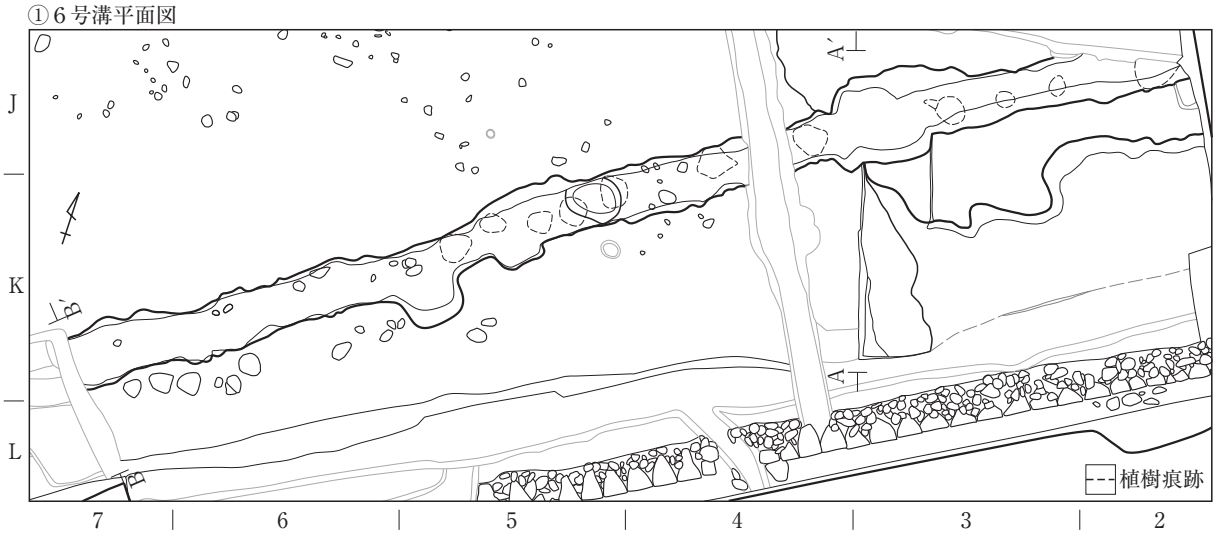


1　10YR7/4 にぶい黄橙色　粘土質シルト　粘性中・しまり中　酸化鉄を斑に非常に多く含む　炭化粒を僅かに含む

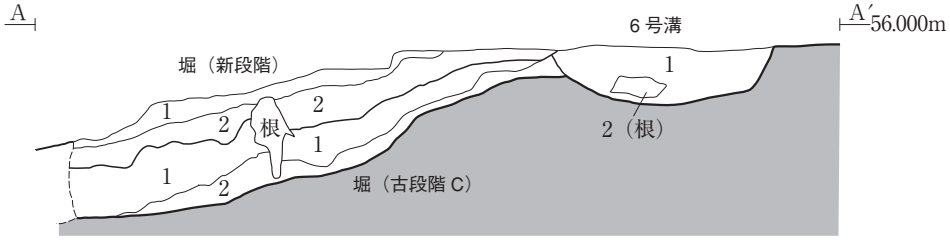
0　1m
平面図：S=1/60
0　1m
断面図：S=1/40

図20　武家屋敷地区第16地点における近世の遺構（4）
Fig.20　Features of the Edo period at BK16（4）

①６号溝平面図



②６号溝・堀断面図

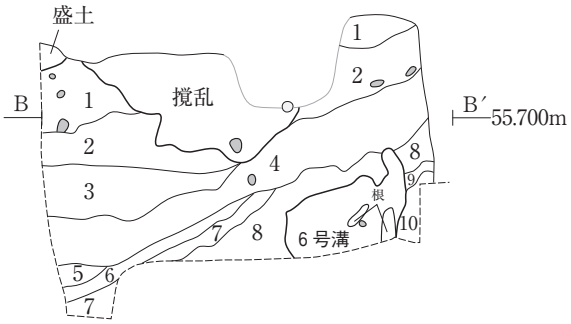


６号溝
1　10YR7/4 にぶい黄橙色　粘土　粘性強・しまり中　鉄分を多く含む　にぶい黄褐色粘土小ブロックを斑状に僅かに含む　白色土粒を含む　径５㎜程度の炭化物を僅かに含む
2　10YR3/3 暗褐色　粘土　粘性強・しまり弱　径５㎜程度の礫を僅かに含む　植栽された木の根によるもの

堀（古段階Ｃ）
1　10YR5/4 にぶい黄褐色　粘土　粘性強・しまり中　鉄分を含む　黄色土粒、白色土粒を僅かに含む　黒褐色粘土小ブロックを極僅かに含む
2　10YR5/6 黄褐色　粘土　粘性強・しまり中　白色土粒、黄色土粒を含む　にぶい黄橙色粘土小ブロックを斑状に含む

堀（新段階）
1　10YR4/3 にぶい黄褐色　粘土　粘性極めて強・しまり中　黄褐色土ブロックを僅かに含む　マンガン、白色土粒を僅かに含む　南側ではグライ化する
2　10YR7/4 にぶい黄橙色　粘土　粘性強・しまり中　鉄分を含む　褐色粘土を含む　南側ではグライ化する

③６号溝・堀（新段階）断面図（Ｋ・Ｌ7区）



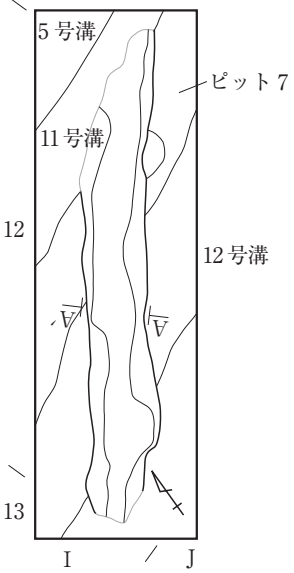
堀（新段階）
1　図 25-②の２層と同じ
2　図 25-②の４層と同じ
3　10YR4/3 にぶい黄褐色　砂質シルト　粘性弱・しまり弱　径１㎝程度の風化した礫をやや多く含む　黄褐色砂をラミナ状に含む
4　図 25-②の５層に対応するが、南側は層状に酸化鉄を多く含む
5　10YR4/1 褐灰色　粘土　粘性強・しまり中、 褐色砂を含む　酸化鉄を斑に多く含む
6　10YR4/2 灰黄褐色　砂質シルト　粘性やや弱・しまりやや弱
7　10YR4/3 にぶい黄褐色　粘土　粘性強・しまりやや強　酸化鉄を斑に少量含む　一部グライ化する
8　図 25-②の７層と同じ
9　図 25-②の８層と同じ
10　図 25-②の９層と同じ

６号溝
10YR4/3 にぶい黄褐色　粘土質シルト　粘性やや強・しまり中　褐色砂を斑に多く含む　根を含む

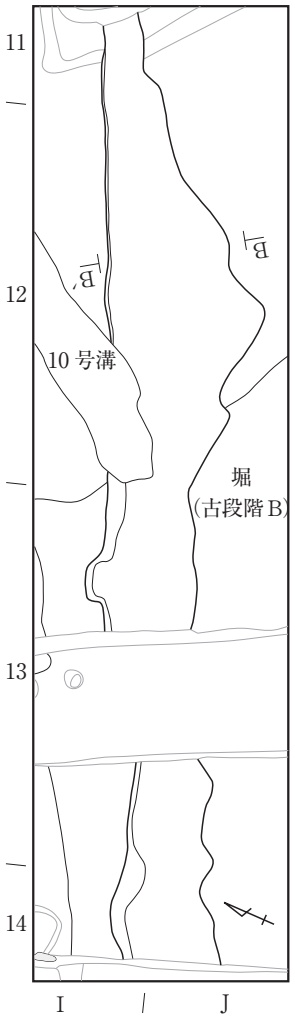
0　1m
平面図：S=1/100
0　1m
断面図：S=1/40

図21　武家屋敷地区第16地点における近世の遺構（5）
Fig.21　Features of the Edo period at BK16（5）

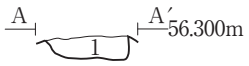
①10 号溝平面図



③12 号溝平面図

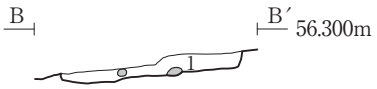


②10 号溝断面図



1　2.5GY3/1 暗オリーブ灰色　砂質シルト　粘性やや弱・しまり中　白色土粒を少量含む　砂と酸化鉄を斑に含む　径1㎝程度のオリーブ灰色粘土を少量含む　小礫を僅かに含む

④12 号溝断面図

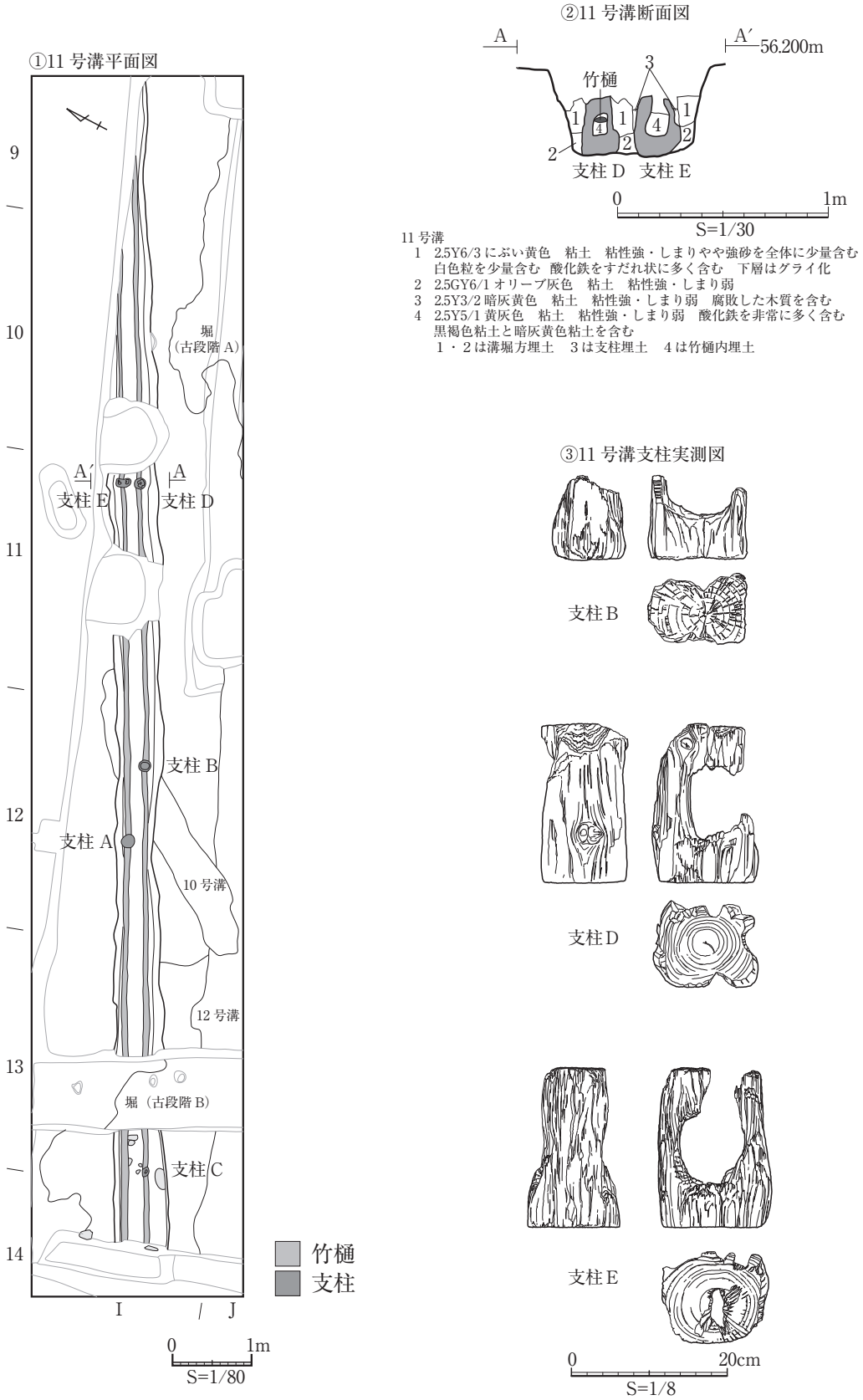


1　10YR5/3 にぶい黄褐色　粘土質シルト　粘性やや強・しまりやや強　酸化鉄を斑に多く含む　径3-5㎝程度の礫をやや多く含む　上層ににぶい黄橙色粘土を多く含む　荒砂を僅かに含む

0　1m
平面図：S=1/60

0　1m
断面図：S=1/40

図22　武家屋敷地区第16地点における近世の遺構（6）
Fig.22　Features of the Edo period at BK16（6）



11 号溝
1　2.5Y6/3 にぶい黄色　粘土　粘性強・しまりやや強砂を全体に少量含む
白色粒を少量含む　酸化鉄をすだれ状に多く含む　下層はグライ化
2　2.5GY6/1 オリーブ灰色　粘土　粘性強・しまり弱
3　2.5Y3/2 暗灰黄色　粘土　粘性強・しまり弱　腐敗した木質を含む
4　2.5Y5/1 黄灰色　粘土　粘性強・しまり弱　酸化鉄を非常に多く含む
黒褐色粘土と暗灰黄色粘土を含む
1・2は溝堀方埋土　3は支柱埋土　4は竹樋内埋土

図23　武家屋敷地区第16地点における近世の遺構（7）
Fig.23　Features of the Edo period at BK16（7）

千貫沢へと落ち込む傾斜変換点の場所に設定し、杉並木を形成しようとしたものと推定できる（図21－②）。なお、調査区外ではあるが、調査区南壁にもその痕跡が確認できている（図版16－２～４）。出土遺物はない。

【10号溝】（図22－①・②、図版９－４・５）

３区に位置する溝で、部分的にしか残っていない。11・12号溝、ピット７より新しい。残存していた長さは3.8m、最大幅は0.6mである。埋土は、暗い灰色の砂質シルト土であり、小礫をわずかに含んでいた。出土遺物はない。

【11号溝】（図23、図版９－６、10－１～３）

３区に位置する溝で、残存していた長さは14.8m、最大幅0.7mの規模となる。埋土を掘り下げた結果、木製の継手で支えた竹樋を確認することができた。

この竹樋は、調査現場では節が確認できたことから竹と判断したが、ほぼ土壌化しており取り上げることはできなかった。継手に関しては、５箇所の継手のうち３箇所のものを取り上げることができた（図23－③）。この継手は、中央部を刳り抜き、その穴に竹樋を通したものである。この支柱は、樹種同定の結果スギなどであることが判明している（第Ⅵ章）。

埋土は、周囲の地山粘土とほぼ同じであり、竹樋設置後にすぐに埋められたことが想定できる。竹材は、径３～８cm程度のもので、長さは継手間の距離から3.6m～5.1m程となる。継手部における竹同士の結合の状況は不明である。継手と竹樋を設置後、地山粘土と同じ土で埋め戻している（図23－②）。竹樋内部には、水が流れた後に溜まった泥が確認できた。なお、出土遺物はない。

近隣の調査における類似する近世の竹樋としては、仙台市教育委員会が調査した川内キャンパス北西側地点における事例がある（原河英二ほか2009）。Ⅱ区Ⅳ層上面で検出された１・２号竹樋は、18世紀代とされている。この竹樋は木製升に接続するもので、複数の継手も確認されている。

【12号溝】（図22－③・④、図版10－４・５）

３区に位置する溝で、南側は削られているため、正確な形状は不明である。北側の肩部のあり方からすると、浅い幅広の溝であったと推定できる。堀（古段階B）より新しいが、10号溝より古い。残存している長さは7.5m、同様に残存幅は1.2mとなり、近くのほかの溝と比べてやや幅広である。埋土は、周囲の土と類似するが、黒褐色土やにぶい黄橙色土、大きめの礫を含んでいる。出土遺物はない。

３．Ⅰc期の遺構

【堀（新段階）】（図24～26、図版４－６～８、５－１・２、12～15、16－１～５）

２区調査時にその南半で検出した遺構である。その北端は、大体が５・14号溝で破壊されており、Ｇ３区にて部分的に確認しているのみである（図26－④、図版16－５）。残存している埋土の深さは30cm程度と浅く、底面となる地山面も南側に比べて高い。もとより、北側はⅡ期に地表面が削平されてはいるが、Ｇ３区における状況から、堀（新段階）がより北側に伸びる可能性は低いと推定する。

今回の調査では、東側にトレンチ、中央部にベルトを設定して掘り下げ、その断面から堆積状況を確認した。西側については堀（古段階B）と同様に、Ⅲ期の撹乱を利用して堆積状況を確認した。それぞれ、東側調査区、中央調査区、西側調査区と呼称して説明する。

・東側調査区

堀（新段階）を検出した後に、その堆積状況を確認するために２区に設定した調査区である。５列に幅1m程のトレンチを設定し、掘り下げた（図版13－２、14－１～６）。

埋土は７枚確認した（図25－①）。そのうち１・２層は、小円礫を少々含み、シルトと砂が斑状に混じる層である。１層はシルト、２層は砂が主体となる。３層は最も厚い層である。粘土が主体であるが、砂やシルトを斑

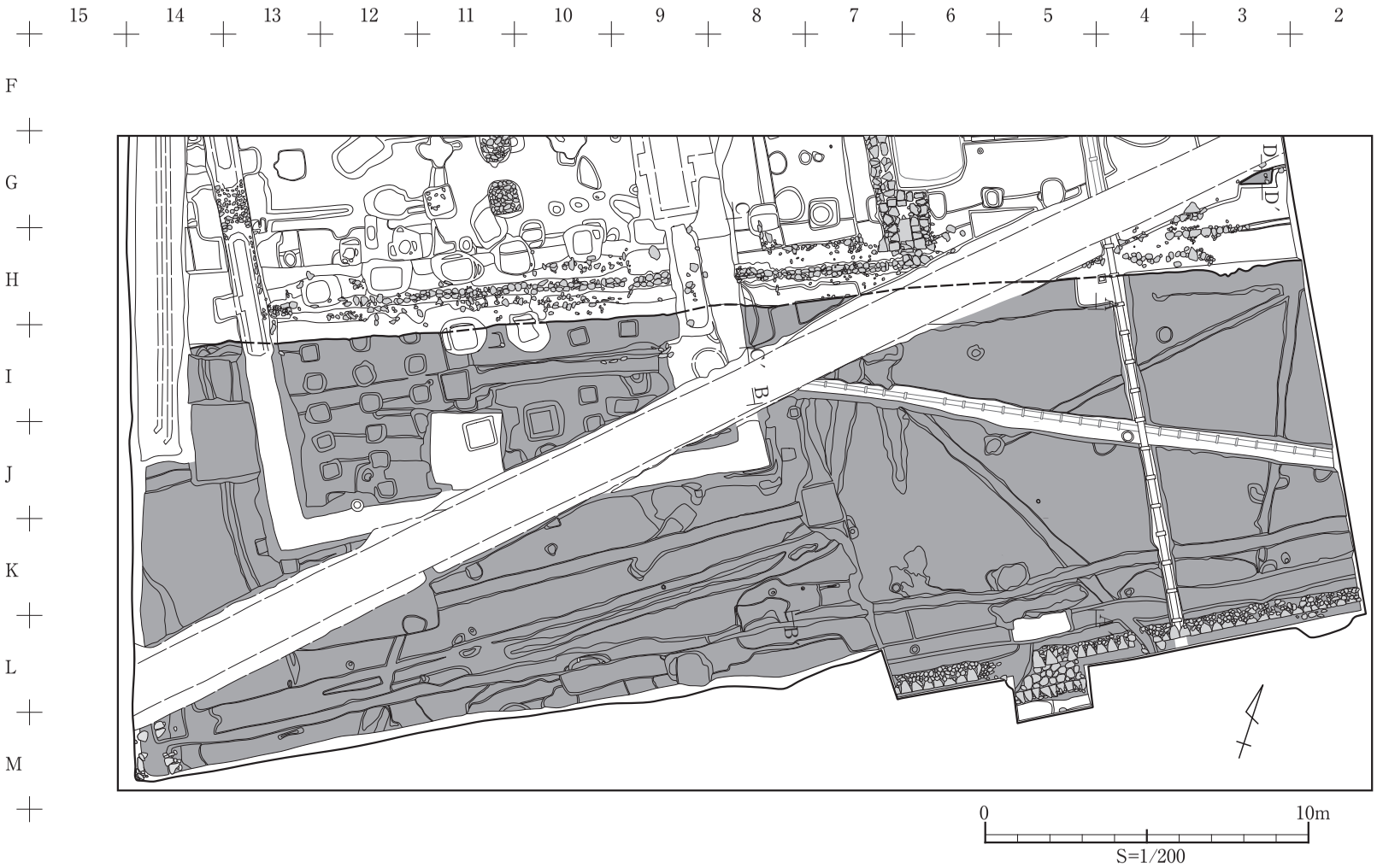
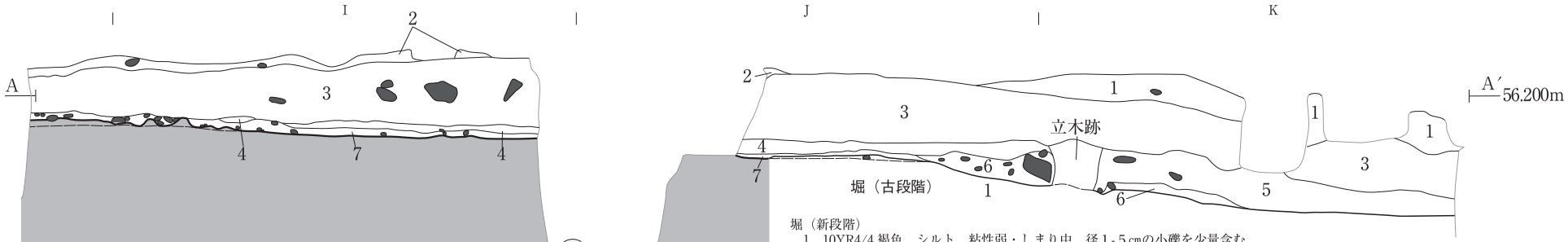


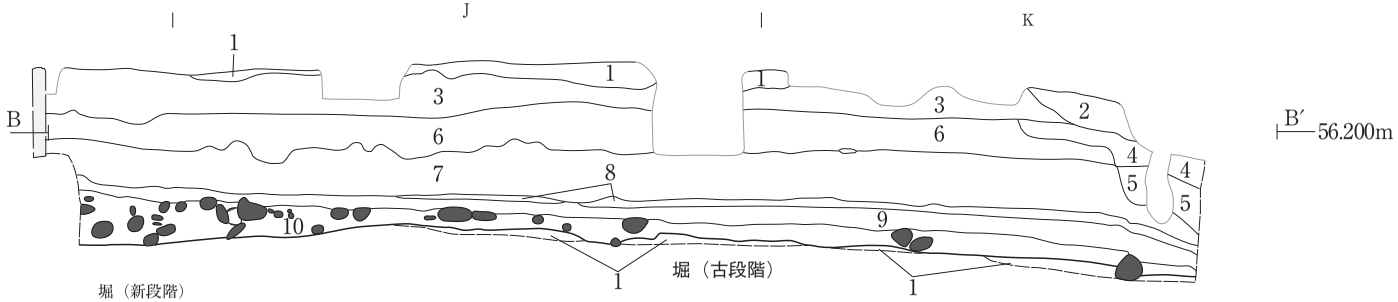
図24　武家屋敷地区第16地点における堀（新段階）の分布範囲
Fig.24　Distribution of the new stage moat at BK16

①堀（新段階）東側調査区断面図（H～K5区）



堀（新段階）
1　10YR4/4 褐色　シルト　粘性弱・しまり中　径１-５㎝の小礫を少量含む
2　10YR7/4 にぶい黄橙色　砂　粘性なし・しまりやや強　灰褐色粘土ブロックを少量含む　拳大の礫を少量含む
3　10YR5/1 褐灰色　粘土　粘性強・しまり強　径５-20㎝程度の礫を僅かに含む　北側は砂をラミナ状に含み
　南に向けて砂が多くなる　酸化鉄を多く含む
4　10YR5/1 褐灰色　砂質シルト　粘性中・しまり中　酸化鉄を僅かに含む
5　10YR4/4 褐色　シルト　粘性中・しまり弱　拳大の礫を僅かに含む
6　10YR4/4 褐色　粘土質シルト　粘性中・しまり弱　径３㎝程度の礫をやや多く含む
7　10YR4/2 灰黄褐色　粘土　粘性強・しまり中　径１-３㎝の少礫を多く含む
立木跡　３層と同じ
堀（古段階）
1　10YR4/6 褐色　粘土質シルト　粘性中・しまり強　酸化鉄を多く含む

②堀（新段階）中央調査区断面図（I～K7区）

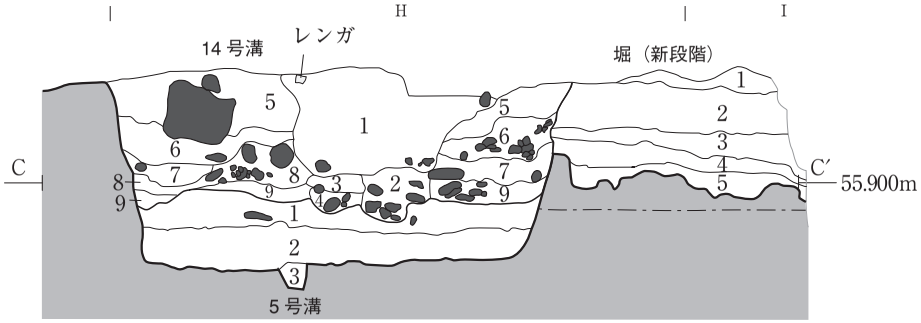


堀（新段階）
1　①の１層と同じ
2　①の２層と同じ
3　7.5YR5/6 明褐色　砂　粘性なし・しまり中　径 10 ㎝程度の灰黄褐色粘土を多く含む　下層に灰黄褐色粘土をラミナ状に含む
4　10YR5/2 灰黄褐色　シルト　粘性中・しまり中　砂を多く含む　酸化鉄をすだれ状に多く含む
5　10YR5/2 灰黄褐色　粘土　粘性強・しまり強　砂を僅かに含む　酸化鉄をすだれ状に少量含む
6　10YR5/2 灰黄褐色　粘土質シルト　粘性やや強・しまり中　砂をラミナ状に多く含む　酸化鉄を斑に多く含む　風化した礫を僅かに含む
7　10YR5/2 灰黄褐色　砂質シルト　粘性弱・しまり中　砂を斑に多く含む　下層に砂をラミナ状に含む　風化した小礫と炭化物を僅かに含む　酸化鉄を斑に少量含む
8　10YR5/2 灰黄褐色　シルト　粘性中・しまり中　酸化鉄をラミナ状に極僅かに含む
9　10YR5/3 にぶい黄褐色　シルト　粘性中・しまり中　上層に砂と灰黄褐色粘土をラミナ状に含む　白色粒を極僅かに含む
10 10YR5/3 にぶい黄褐色　シルト　粘性やや弱・しまり強　径１-20 ㎝（拳大）の礫を多く含む　酸化鉄を斑に多く含む
堀（古段階）
1　10YR6/4 にぶい黄橙色　粘土質シルト　粘性なし・しまり中 径３㎝程度の礫を少量含む　酸化鉄をラミナ状に含む　炭化物ブロックを含む

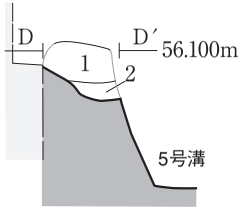
0　1m
S=1/40

図25　武家屋敷地区第16地点における近世の遺構（8）
Fig.25　Features of the modern period at BK16（8）

③5・14号溝、堀（新段階）断面図（H･I8区）



④堀（新段階）断面図（G3区）



堀（新段階）
1　10Y4/1灰色　砂質シルト　粘性弱・しまり中　下部に砂をラミナ状に多く含む
　図9の2層に対応するが、砂が少ない
2　10Y5/2オリーブ灰色　シルト　粘性中・しまり中

5号溝
1　7.5Y4/1灰色　粘土　粘性強・しまり強　オリーブ黒色と灰オリーブ色の粘土小ブロックを斑状に多く含む　黄色・白色土粒、鉄分、レンガを含む
2　7.5Y5/2灰オリーブ色　粘土　粘性強・しまり強　明黄褐色粘土小ブロックを斑状に多く含む　鉄分を含む
3　7.5Y6/2灰オリーブ色　粘土　粘性強・しまり中　明黄褐色粘土小ブロックを多く含む　鉄分を含む
　1・2　溝石組抜取埋土　3　溝埋土　4　溝底面下溝埋土　5～9　溝堀方埋土

14号溝
1　2.5Y6/4にぶい黄色　粘土　粘性強・しまり中　浅黄色、オリーブ色、黒色の粘土小ブロックを斑状に多く含む　白色・黄色土粒、鉄分、マンガンを含む
　径1-2㎝の炭化物を含む　レンガを含む
2　5Y4/2灰オリーブ色　粘土質シルト　粘性中・しまり中　黄褐色粘土小ブロックを含む　拳大の礫を多く含む
3　7.5Y3/1オリーブ黒色　砂　粘性なし・しまり弱
4　7.5Y4/2灰オリーブ色　粘土　粘性強・しまり中　拳大の礫を多く含む
5　10YR4/4褐色　シルト　粘性弱・しまりやや強　にぶい黄橙色と黄褐色の粘土小ブロックを僅かに含む　マンガン、径2-3㎝の小礫を僅かに含む
6　10YR5/4にぶい黄褐色　粘土　粘性強・しまり中　径2㎝～拳大の礫を多く含む　マンガン、白色土粒、黄色土粒を含む
7　5Y5/3灰オリーブ色　粘土　粘性強・しまりやや強　オリーブ黒色と浅黄色の粘土小ブロックを多く　斑状に含む
8　5Y3/2オリーブ黒色　砂質シルト　粘性中・しまり中　径3㎝～拳大の礫を多く含む　淡黄色粘土小ブロックを含む
9　7.5Y4/1灰色　シルト　粘性中・しまり中　径3-20㎝の小礫を僅かに含む
　1・2　溝堀方埋土　3　溝底面下溝埋土

堀（新段階）
1　図25-②の3層と同じ
2　図25-②の6層と同じ
3　図25-②の7層と同じ
4　7.5YR5/6明褐色　砂質シルト　粘性中・しまり中　鉄分沈着　風化した小礫を含む　マンガンを多く含む　図25-②の10層に対応するが、礫が少ない
5　7.5Y6/2灰オリーブ色　粘土　粘性強・しまり強　マンガンを多く含む

0　1m
S=1/40

図26　武家屋敷地区第16地点における近世の遺構（9）
Fig.26　Features of the modern period at BK16（9）

に含み、下部に粗い砂が増える。また20cm程度の大きな円礫も含んでいる。４層は砂質シルト、５層はシルト質土であり、夾雑物は少ない。６層は礫を多く含む層である。この５・６層は底面が傾斜し始まってからの堆積層である。南側７層は粘土層で小さな円礫を多く含み、非常に固い。これらの層の特徴は、堀（古段階）とは全く異なり、土質や堆積状況から水性堆積によるものと考えられる。また、その断面には、先述のようにＩb期の６号溝に伴う樹木の痕跡が認められた。３層堆積前までは樹立していたが、その後に倒壊あるいは撤去されたものと推定される。

H区からJ区北半までは底面である地山面が確認できた。J区南半からは堀（古段階）の最上面を検出した。南側に向かい緩やかに傾斜する。

調査区東壁部でも堀（新段階）の埋土を確認した（図９）。その各層は、おおむね東側調査区の各層と対応する（図27）。東側調査区の最下層である７層も存在し、その直下は地山の底面となる。また、２区南東端では堀（新段階）の痕跡は軽く窪む程度であった。そこに堆積した埋土は、東側調査区では対応する層は存在していない。

・中央調査区

４区の掘削の際に、東端にベルトを残した（図版15－１）。また、この部分の断面（図25－②）と３区南東隅（H・I－８区）における断面（図26－③）は、ほぼ南北方向に繋がることから、堀（新段階）における南北方向の断面観察を行うことができた。さらに、少し地点は離れるが、K・L７区のおける断面（図21－③）は、本調査区の埋土とほぼ対応することができ、参考となる。

この断面では、10枚の埋土を確認した（図25－②）。それらの層は、ほぼ東側調査区と対応する（図27）。東側調査区３層に相当する部分が、３～７層に細分できた。また、東側調査区４層とした均質的な砂質シルト層は、８・９層に対応し、より混ざりの少ない均質的なシルト層として細分できた。これらの状況からすると、本調査区の堆積層の特徴は、東側調査区の層とほぼ同じではあるが、それぞれの層がより厚く堆積しているものと考えられる。H・I８区における断面でも、基本的にはそれぞれの層は対応する（図27）。ただし、東側調査区７層に相当する層は存在していない。

K・L７区断面では、本調査区南端部における堀（新段階）の堆積状況が観察できた（図21－②）。その埋土は、急激に南に向かって傾斜している。堀（古段階）と同様に、千貫沢に向かい落ち込むものと推定できる。

・西側調査区

３区においてⅢ期の撹乱を利用して断面の観察を行った（図16－④）。東側調査区の１・２層と同じ層は存在していないが、３層以下の層の特徴などは類似し、対応させることは可能である（図27）。このような状況から、西側調査区においても、東側調査区と同様の過程を経て、埋没したものと考えられる。

・堀（新段階）の堆積状況と遺物（図27）

各調査区の埋土の堆積状況を整理して、堀（新段階）の埋土を大別して示したのが、図27である。

堀（古段階）と同様に、各地区の堆積状況には共通する特徴が認められた。最上面には、東側調査区１・２層のように、小円礫を少々含み、シルトと砂が斑状に混じる層（堀（新段階）埋土①層と呼称する。以下同様）がある。３区では削平されているためか、認められない。次の層は、堀（新段階）埋土の主体となる東側調査区３層（堀（新段階）埋土②層）である。中央調査区や西側調査区では、更に分かれる。その下は、東側調査区４層で認められた夾雑物の少ないシルト層（堀（新段階）埋土③層）である。この層も場所によっては細分できる。その下部には、小さな円礫を多く含み、非常に固い東側調査区７層（堀（新段階）埋土④層）が分布する。東側調査区において、７層より上部にあり、斜面に堆積した土層である５・６層は、層の特徴から一応堀（新段階）埋土④層に含めた。また、堀（新段階）埋土④層が存在しない地点、あるいはそれより下位に位置すると考えられる層については、まとめて堀（新段階）埋土⑤層とした。底面までの深さが浅い調査区東端の断面では、これらの各層が全て揃っている。

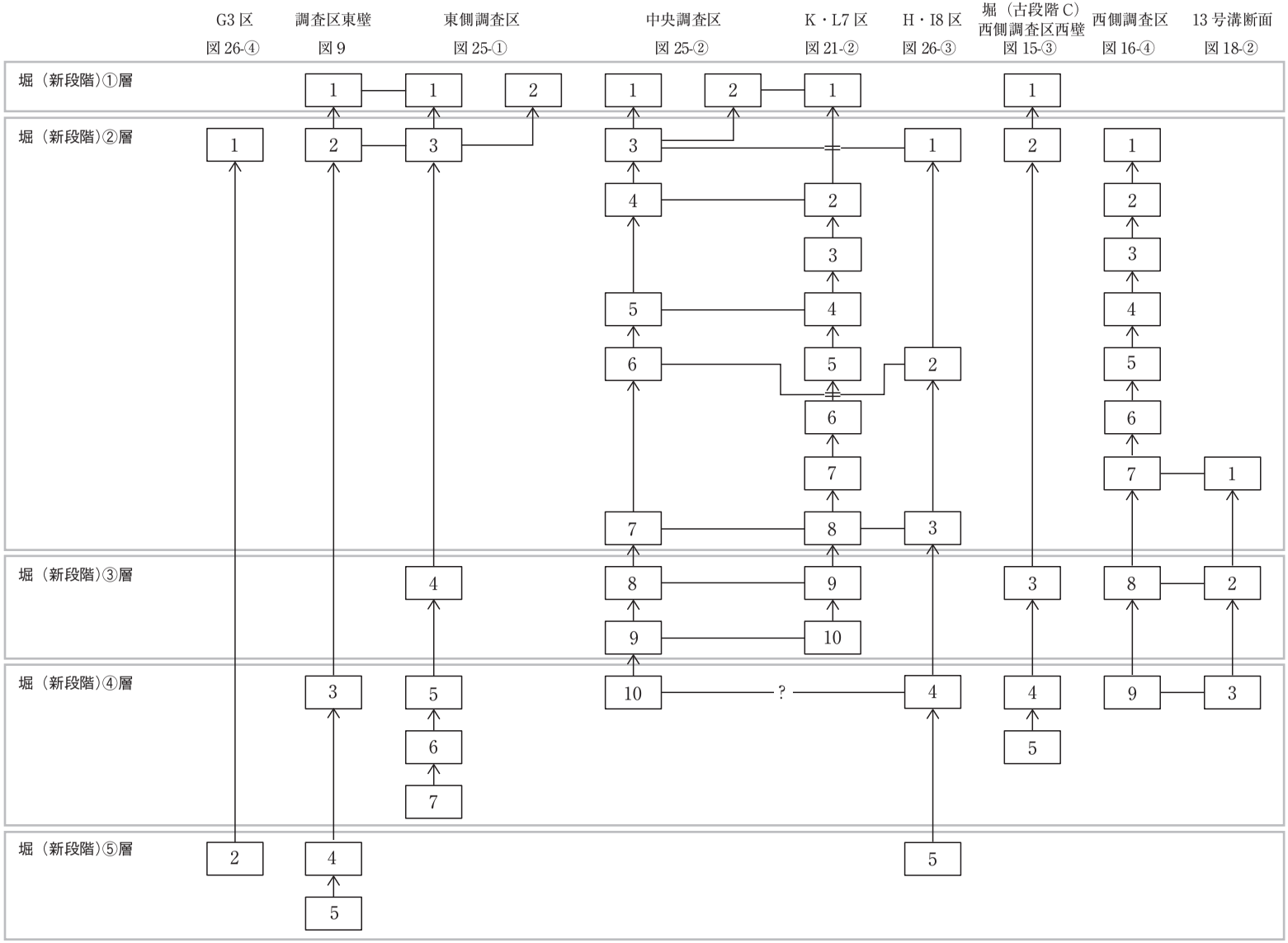


図27　堀（新段階）埋土の対応関係
Fig.27　The relationship of fill at the new stage moat.

前述したように、これらの層は水性堆積層であると考えられる。堀（古段階）直上の堀（新段階）埋土④層は、斜面部に堆積した層（東調査区５・６層）を除き、非常に固く小石を含む層であることから、地表面として利用されている時期に堆積した層とも考えられる。その後に、水害などの水が関係した大きなイベントにより堀（新段階）埋土①～③層が堆積したものと考えられる。なお、堀（新段階）埋土⑤層に関しては、部分的に堆積した土層であるため、堆積過程の詳細は不明である。

出土遺物は、磁器48点、陶器31点、瓦54点、土師質土器19点、瓦質土器１点がある。そのうち時期がある程度判明した埋土下部の資料としては、２区の埋土④層から出土した18世紀前半と推定される陶器がある（図版23：CT14）。それより上層の埋土②層には17世紀から18世紀の頃の様々な遺物が混ざる。３区の堀（新段階）埋土②層から出土した磁器２点（図30、図版22：CJ14、CJ15）は、それぞれ18世紀、17世紀後半から18世紀前半とされる。さらに、２区の堀（新段階）埋土②層からは、18世紀前葉から中葉の陶器中型丸碗がある（図31、図版23：CT８）。これらの状況からすると、堀（古段階）埋没後に地表面として利用されていた時期は18世紀前半頃と推定でき、今回検出した面までは18世紀中葉頃には埋没したものと考えられる。

４．Ⅰ期以降の遺構

Ⅰ期以降の遺構は、２号井戸以外は、明確に近代以降の時期と比定される。前述のように、これらの遺構のうち、Ⅱ・Ⅲ期の特徴的なもののみ説明する。これらの遺構からは、近代の陶磁器や金属製品などが多数出土している。

（1）Ⅱ期以前の遺構

【２号井戸】（図28－①・④、図版16－６・７）

本遺構は、１区の３号溝の石組下部より検出された石組の井戸である。遺構分布図ではⅡa期に含めているが、Ⅰ期に遡る可能性がある。後の第Ⅶ章でまとめた時期的変遷を踏まえるならば、Ⅰb期かⅠc期に相当する可能性が高い。径は1.5m程であり、安全が確保できる約1mの深さまでは半裁した。井戸の埋土は３枚ある。その中で１層は、有機物をとくに多量に含む層である。井戸の掘り方埋土に関しては１枚だけ確認している。この井戸の石組の構造からすると、近世の可能性が高い。しかし、出土遺物も無く、南側調査区における堀等の諸遺構との関係も全く不明である。

（2）Ⅱ期の遺構

【４・７・15号溝】（図11、図版17－１）

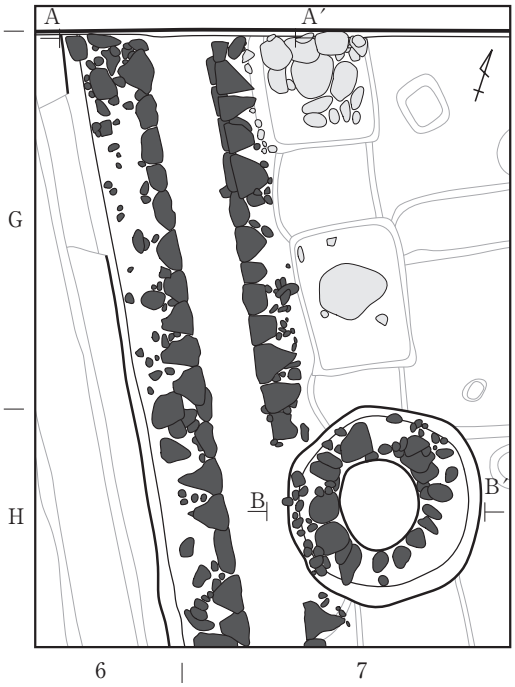
１・３区に位置する溝である。遺構の重複関係と調査区東側断面（図９）の層準などからすると、７号溝が最も古く（Ⅱa期）、４・15号溝はそれより新しい（Ⅱb期）。７号溝の埋土には、明治期に盛んに使用される粘板岩が多く含まれており、近代の遺構であることがわかる。７号溝は、３区途中で北側に曲がる。その後に様々な方向に分岐している。７号溝の最大幅は東西方向0.6m、南北方向0.4mとなり、深さ22cm程で規模は小さい。４・15号溝は、東西に横走する。それぞれの最大幅は1.2m、0.8mとなる。その規模は７号溝の倍ほどもある。

【５号溝】（図９・11・16・19・26、図版16－８、17－２～４、18－２）

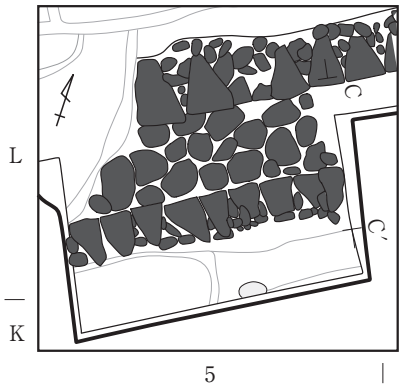
１～３区を東西に横切る規模の大きな溝である。最大幅は2.4mで、深さは西側断面で0.8m程ある。その溝の方向が７号溝とほぼ並行することから、Ⅱa期とした。堀（新段階）北端部を画するように構築されたものと考えられる。

底部中央には幅・深さ共に15cm程の四角形に近い溝が設置される（図19）。部分的に残っていないものもあるが、その溝の上に蓋状に川原石を１列並べ、暗渠状としている（図版17－２）。また、西半部では、壁際に不整方形の掘込みを作り、その掘込部と中央の溝を接続するようにしている（図19）。それらの掘込部と接続する溝

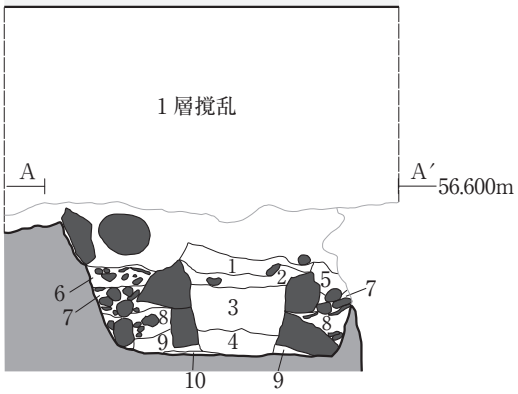
①３号溝（B・C7・8区）・２号井戸平面図



②１号溝（L5区）平面図

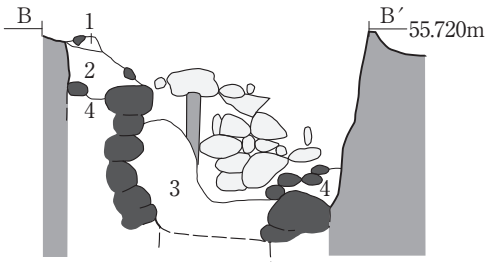


③３号溝断面図



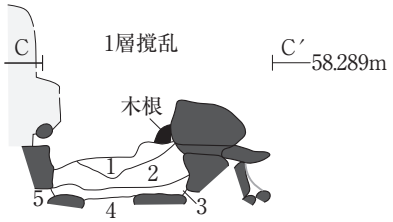
1　5Y3/1 オリーブ黒色　砂　粘性なし・しまり弱　黄褐色粘土ブロックを僅かに含む
2　N3/0 暗灰色　粘土　粘性強・しまり中　砂を少量含む
3　2.5Y4/3 オリーブ褐色　粘土質シルト　粘性やや強・しまり中　黄褐色粘土　ブロックを多量に含む　部分的にグライ化
4　2.5Y4/3 オリーブ褐色　粘土質シルト　粘性やや強・しまり弱　礫を多く含む
5　2.5Y4/1 黄灰色　粘土　粘性強・しまり中　酸化鉄を少量含む　レンガ小片を僅かに含む
6　2.5Y4/2 暗灰黄色　シルト　粘性中・しまり中　礫をやや多く含む
7　N2/0 黒色　粘土　粘性強・しまり中　拳大の礫を非常に多く含む
8　2.5Y4/2 暗灰黄色　砂質シルト　粘性中・しまり中　拳大 - 人頭大の礫を多く含む
9　5Y5/2 灰オリーブ色　粘土　粘性強・しまり中　小礫を少量含む
10　5Y5/2 灰オリーブ色　粘土　粘性やや強・しまり弱　砂を少量含む　溝堀方埋土
1 ～ 4 は溝埋土　5 ～ 10 は溝堀方埋土

④２号井戸断面図



1　10YR2/1 黒色　粘土質シルト　粘性強・しまり中　木質・植物片などの有機質を多く含む　にぶい黄橙土と褐灰色の小ブロックを僅かに含む
2　7.5Y4/1 灰色　砂　粘性なし・しまり中　オリーブ灰色粘土ブロックを斑に含む
3　2.5Y2/1 黒色　粘土　粘性強・しまり中　針葉樹の樹皮がまとまって入る
4　10YR2/1 褐灰色　粘土　粘性強・しまり中　オリーブ灰色粘土小ブロックを含む
1 ～ 3 は井戸埋土　4 は井戸堀方埋土

⑤１号溝断面図



1　2.5Y2/1 黒色　シルト　粘性中・しまり中　酸化鉄を少量含む
2　N3/0 暗灰色　砂質シルト　粘性弱・しまり弱　砂を 1 - 3 ㎝の厚さでラミナ状に含む　酸化鉄を層状に含む
3　2.5Y2/1 黒色　砂質シルト　粘性弱・しまり弱　酸化鉄を僅かに含む
4　10YR3/1 黒褐色　砂質シルト　粘性やや弱・しまり中　黄褐色粘土を極少量含む
5　10YR3/1 黒褐色　シルト　粘性中・しまり中
1 ～ 4 は溝埋土　5 は溝掘方埋土

0　1m
平面図：S=1/60
0　1m
断面図：S=1/40

図28　武家屋敷地区第16地点におけるⅢ期以前の遺構
Fig.28　Features before phase Ⅲ at BK16

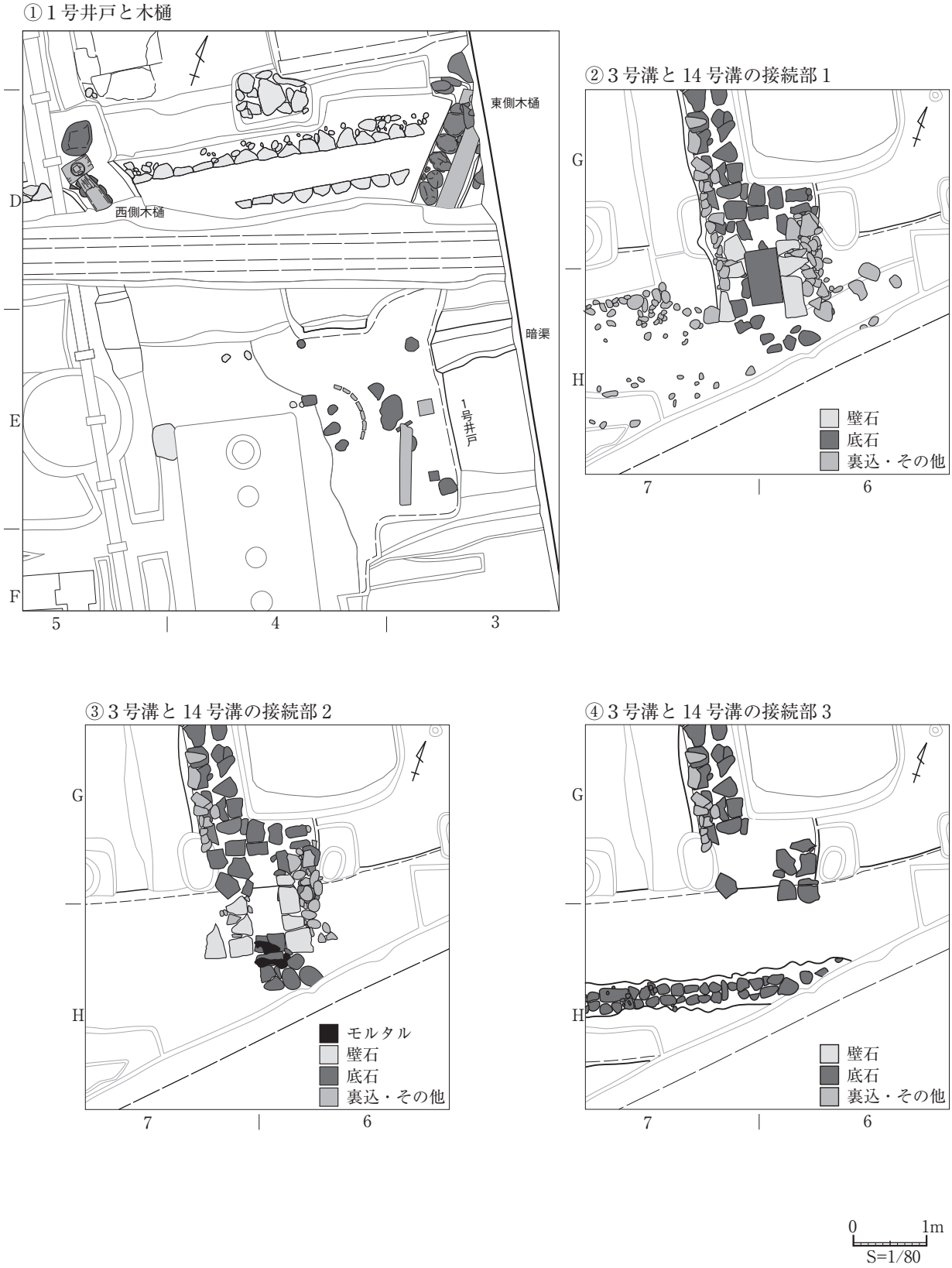


図29　武家屋敷地区第16地点におけるⅢ期の遺構
Fig.29　Features of phase Ⅲ at BK16

は、中央の溝より浅いことから、周囲から水を集め中央部に排水する構造であったものと考えられる。この溝に石組等の施設が伴ったかどうかは不明である。また、西側断面（図16）と東側断面（図９）の底面溝の底面の標高から、西から東への傾斜度を求めると0.6度（勾配１％）となる。かなり緩やかな溝であると言える。

埋土は、暗渠部分を除いて西側では３枚確認（図16－④）できたが、東側では14号溝に破壊され、ほとんど残っていない（図９）。埋土の各層は、水平に堆積した地山由来の粘土である。この層の堆積状況からすると、５号溝を廃絶する際に、地山粘土で埋め戻し、その後に14号溝を構築したことが想定される。

（3）Ⅲ期の遺構

【14号溝】（図９・12・16・19・26、図版20－４・５、21）

１～３区の５号溝と同じ場所に構築された東西方向の溝で、３号溝と接続している。その規模は、５号溝とほぼ同様である。14号溝の時期は、２・３号溝との関係からⅢa期とした。

底部中央部に溝を作り川原石を並べている（図版20－４、21－１）。しかし、５号溝とは異なり２列に敷き並べたもので、床面として構築されたものと考えられる。その埋土からは、側壁の石組で使用される石材が多数認められていることなどから、床石の左右には、石組が並んでいた可能性が高い。しかし、石組の石は全て抜き取られていて、確認はできなかった（図版20－４）。

埋土は、中央部に24cm（西側断面：図16－④）程の幅で残存していた。埋土下部は粘土質土層、埋土上部は砂質の黒褐色土層である。ただし、埋土下部については溝の埋土としたが、底面の石を並べた際の構築土である可能性もある。

石組を設置する際の掘り方の土は、粘土が主体の層と、円礫を混ぜた砂質シルト層が交互に堆積する。調査区東壁部の断面によく残っている（図９、図版４－６）。調査区東端部では、５号溝と14号溝の底面はほぼ同一レベルであった。ただし、底面の溝が暗渠状となっていることから、５号溝底部をそのまま活かして利用した可能性が考えられる。14号溝は、構築時に傾斜を付けて構築東側に向けて排水されていたものと考えられる。西側断面（図16－④）と東側断面（図９）における底面溝の標高から、西から東への傾斜角を求めると2.1度（勾配3.7%）となる。先行する５号溝に比べ、強い傾斜となっている。

また、同じ時期である１～３号溝とは軸線の方向がやや異なる。これは、14号溝が、５号溝を活かして構築されたことによるものと考えられる。

【２・３号溝】（図９・12、28－①・③、29－②～④、図版19－１～４・６、20－1・2）

２・３号溝は、１区に位置するⅢa期の石組の溝である。２号溝は東西方向、３号溝は南北方向に伸びる。３号溝はその南端で14号溝と接続する（図29、図版20－5、21－２）。２号溝と３号溝の最大幅は、それぞれ1.5m、1.6mとなり、ほぼ同規模となる。この２条の溝は、Ｄ７区でほぼ直角（89.4度）に合流する。その合流地点より南は、側壁の石組1段分高くなり、平石を床に敷き詰めた溝となる（図版20－２）。この構造から、それぞれの溝から水が溢れると、14号溝に向かって流れるようになっていたことがわかる。この敷石部分では、側石は残っていなかったが、14号溝との接続部と同様に、側壁の石組の石が上下２段あった可能性がある。

14号溝との接続部では、コーナー部には側壁の石組が２段残っていた（図29－②、図版21－２）。検出時には大きめの長方形の平石が床面に敷かれていた。上部石組と大きな床石を外し、埋土を掘り下げると、下部の石組と床面が確認できた（図29－③、図版20－５）。その床面には平石を並べており、部分的にその合間にはモルタルが詰められていた。これらのことからすると、下部平石による床面がある程度埋没した後に、上部に大きめの平石を設置したことがわかる。３号溝と14号溝との接続部のコーナーの側壁石組には、その他の石組溝で使用されている様な背部が四角錐状になる石材ではなく、立方体状の石が使用されていた。その立方体状の側石の西側には、１点のみであるが、東西方向へと繋がる側石が残っている。また、14号溝の床面に敷かれた石（図29－④）

が埋まった後に、３号溝接続部の底面が構築されている。このことから、３号溝は14号溝がある程度埋まってから構築された遺構であることがわかる。

【１号井戸】（図12・29－①、図版18－３～５、19－１）

１区に位置し、西半部をⅣ期米軍期の石油タンクにより破壊されているⅢa期の井戸である。この井戸は、今回掘削した範囲内では、ほとんどが壊されているため詳細は不明であるが、残存している部位から桶巻の井戸と捉えられる。掘り方は、非常に大きく一辺2.76m程の方形となる。

この井戸には、東側から暗渠が接続する。暗渠は、底部に10～30cm程の大きめの円礫を並べ、その上に平瓦を並べて埋められていた（図版18－３）。１号井戸との接続部分は掘り下げていないので不明ではあるが、ほかに２本の木樋が接続するものと想定できる（図版18－５、19－１）。この２本の木樋は、２号溝の下を通り、石を用いた建物基礎側まで伸び、木製の継手と接続している。これらの重複関係からすると、１号井戸・木樋・石を用いた建物基礎は２号溝より古いが、Ⅲb期の遺構との重複関係等を考えると、同時期に使用されていたものと考えられる。

【１・９号溝】（図12・28－②・⑤、図版18－６、19－５）

１号溝は、２区南端部で検出された石組溝である。底面に石を敷いており、２・３号溝とはその基本構造が異なる。ほかのレンガ造りの建物などとの関係から、Ⅲb期の遺構として捉えた。埋土は、床石面上に砂が堆積している。

９号溝は、４区西端で検出された石組溝である。この溝は、調査区外に伸びることと、検出した範囲もほとんどが撹乱を受けていることから、その詳細は不明である。その方向等から、１号溝と接続する可能性もある。

(4) Ⅰ期以降における遺構の変遷

Ⅱa期とⅡb期の遺構配置では、この場所が溝で区画されていたことがわかるのみである。建物などの痕跡は認められず、どのような用途で溝が構築されたのか不明である。ただし、５号溝の存在から、堀（新段階）北側を区画しようとした意図は看取できる。

Ⅲa期になると、石組溝と井戸のほか、礎石などの石を用いた建物が認められる。調査区北西側では礎石を用いた建物があり、その南側では方形の掘り方に石を敷き詰めた基礎による建物があったことがわかる。また、調査区北東側には、木樋や溝・井戸等の施設を備えた同様の基礎による建物が確認できる。14号溝より南には遺構等は確認できず、その北側に建物を複数並べた配置だったことがわかる。

Ⅲb期には、コンクリートとレンガを用いた堅固な基礎を有する建物が確認できる。この段階になると、14号溝のほか、石積みの溝は埋められており、土管とレンガ製の桝による排水設備を整えていたようである。この建物は、14号溝を越えて調査区南半部まで伸びる。１・９号溝はこの時期の遺構である可能性が高い。

Ⅳ期になると、この場所を米軍が利用するようになる。石油タンクやコンクリート製の共同溝の軸方向は、Ⅲb期とほぼ同様であり、前時期と類似する土地の使い方をしていたようである。また、第Ⅲ章で確認したように、図３－１の建物aは、調査区南西側４区におけるⅣb期の遺構であると考えられる。当時の空撮写真を確認すると、その周辺には建物がない（図３－１）。東北大学の移転当初も、その景観は基本的には変わらず、その建物aは「詰所」として利用されていた（東北大学百年史編集委員会編2003）。その後には、周辺地域は駐輪所として活用されており、米軍期以降は大きな土地改変は行われていない。一方で、堀（新段階）の北側では１層直下が地山であったことから、Ⅱa期までに近世の面を削平するような大きな造成が行われたと言える。

今回の調査成果から、近代以降の建造物などの変遷を細かく検討することができた。第二師団期の建物にも複数段階があることがわかり、明治初期以後の土地の使われ方が、ある程度判明したものと考えている。

第Ⅴ章　出土遺物

今回の調査地点は、大部分が明治時代以降に作られた建物や溝によって破壊されていた。そのため、近世の遺物はあまり多くなく、大部分が明治以降の遺物であった。

近代以降の遺物でも、近世以前の遺物と同じく、基本的には採取した。ただし、板ガラス、レンガについては、特徴に乏しく、接合して一個体として認識し、法量や製作技法などのデータをとらえ難いため、採集していない。

遺物の集計では、種類によって集計の仕方を考え、より実態がとらえられるように工夫した。遺物から近代以降と近世との区別が容易な磁器については、近代と近世を分けて集計を行っている。近代磁器では、製作技法ごとに、手描き、摺絵、銅版転写、型打ち、クロム青磁、色釉、白磁に分け、集計した。白磁は、胎土や釉調から近代磁器とわかるものを分類し、近世の白磁と考えられるものは近世磁器として集計している。しかし、破片資料では、どちらと見分けるのに限界がある場合もある。出土遺物全体としては、近代のものが大多数であるため、確実でない白磁は近代磁器として集計した。手描きの磁器については、呉須、釉調、文様、胎土などから近世以前と近代磁器とを分類している。

古銭は、刻まれた文字から年代が判明するため、その種類を示して集計している。

磁器、古銭以外は、近世のものと近代に作られたものを特徴から区別し難いことから、分けずに集計している。特に、金属製品や歯ブラシなどは、過去の調査の経緯から陸軍第二師団によって使われたものが大多数であろうと考えられるが、遺物からは判断できないため、近代・近世を一緒に集計している。

１．陶磁器（図30～32、表８～14・19・21、図版22～24・30）

接合・同一個体認定作業後の破片数は、近世磁器148点、近代手描き磁器502点、近代摺絵磁器532点、近代銅板転写磁器96点、近代型打ち磁器9点、クロム青磁18点、近代白磁281点、近代色釉磁器４点、陶器（近世・近代併せて）351点である（表８～19・21）。近世の陶磁器は少なく、近代陶磁器が中心である。

図化して提示したのは、近世のものを中心としている。近代以降の陶磁器は、工業化された規格品であり、『年報』11において、より完形に近いものを多数報告しているため、一部を写真で掲載したほかは、集計のみ行い、基本的には図化していない。

近世の陶磁器は、堀（古段階）、堀（新段階）、１号溝、２号溝、３号溝、４号溝、５号溝、９号溝、13号溝、14号溝から出土している。堀埋土からの出土が中心であるが、出土量は多くなく、破片も小さいものがほとんどである。13号溝は、堀（新段階）の埋土の下から検出されており、近世に属する遺構で、近世磁器、陶器が１点ずつ出土している。１号溝、２号溝、３号溝、４号溝、５号溝、９号溝、14号溝は、近代に属する溝で、主体となる遺物は、近代の磁器やガラス片・金属製品などであるが、近世の陶磁器が若干共伴して出土している。

堀（古段階）からは、磁器はなく、陶器のみである。図化したのはCT３のみで、CT１～４は写真を掲載した（図31、図版23）。CT１は、鼠志野の小中皿である。文様はみられない。CT２は、焼き締めの擂鉢の破片である、小破片のため、産地、年代はわからない。CT３は碗の底部破片で、高台内を除き、内外面に黒色の鉄釉が掛けられている。文様はみられない。胎土、高台の作りから大堀相馬の製品と推測する。大堀相馬で黒色の鉄釉製品が多くみられるのは、19世紀に入ってからであり、そのころの製品かと推測する。堀からは、古段階・新段階ともに、これ以外に19世紀に遡る陶磁器は出土していない。出土場所は、近代の建物基礎を除去した直下の堀（古段階）の検出面からであり、撹乱からのめり込みの可能性も捨てきれないため、堀（古段階）の年代を示すものではないと考えられる。CT４は岸の擂鉢で、口縁部に灰釉が掛けられ、内面の無釉部分にわずかに擂り目が観察される。年代は、岸で擂鉢が生産され、仙台城跡二の丸地区および武家屋敷地区で多く出土する17世紀代と考えられるが、破片が小さいので詳細な年代はわからない。CT３と同じく、堀（古段階）検出面からの出土である。

堀（新段階）埋土から出土した磁器は、CJ1～CJ16である。小破片のため図化できたのは７点（図30）で、他は写真のみを提示した（図版22）。CJ１は、内面に染付の文様があり、外面は無文である。破片が小さいため、器種不明としたが、端反の小中皿の可能性も考えられる。CJ２は、一重網目文の碗である。CJ３の小中皿は、高台径が比較的小さく、高台の外側より内側の削り込みが深い。見込みに草花文が描かれる。外面には圏線文がみられる。高台の作りから17世紀中葉から後葉頃と考えられる。CJ４は、小型端反碗で、梅花散らし文がみられる。口縁部内外面に圏線がある。CJ５は青磁の小中皿である。高台は輪高台で、畳付き部分のみ釉剥ぎされている。見込み文様はみられない。青磁釉は、光沢のある淡水色である。見込み蛇の目釉剥ぎや蛇の目凹形高台の要素がみられないことから17世紀中葉頃かと推測される。CJ７は、青磁の小中皿で、鍔縁状に段を有する。釉は光沢のある淡緑色で、見込みには線彫りによって草文とみられる文様が描かれている。CJ８は、小中皿で、高台が広く低いことから、17世紀後葉から18世紀代と推測される。CJ９は中型の丸碗で草文が、CJ10は中型の端反碗で蝶文が描かれている。薄手の製品で、17世紀後葉から18世紀前葉頃の年代と考えられる。CJ11は、白磁の輪花皿で、陽刻で花唐草文が描かれている。CJ14の瓶類は、網目文と、雪輪風の丸文の中に草文を描いている。丸文が18世紀代に多く用いられる文様のため、18世紀代と推定する。CJ15は、色絵の小中皿で、赤・緑・茶で梅枝文が描かれている。CJ16は、二重格子文の皿である。

堀（新段階）から出土した陶器は、CT５～21である（図31、図版23・24）。CT５は唐津の刷毛目文の大鉢である。刷毛目によって同心円状や波状の文様が描かれており、目跡がみられる。鉄釉や緑釉は観察されない。CT６の中碗は、割れ口にわずかに呉須絵とみられる文様があり、18世紀代の京・信楽と推測した。CT７は、三島手の大鉢で、線彫りと印花によって雷文、花唐草文が施文されている。白土は充填されていない。CT８は、瀬戸・美濃の灰釉腰錆碗である。CT９・10・17・20は、肥前の呉器手碗の破片である。破片資料のため、年代はしぼれず、広く17世紀後葉から18世紀後葉ととらえている。CT20は、内面にわずかに呉須絵の文様が観察される。CT11は、糠白色を呈した失透釉の小碗である。仙台城跡二の丸第17地点（『年報』18）の２号溝、14号土坑、３層一括資料には、18世紀末から19世紀初頭のまとまった資料がみられ、糠白色を呈した大堀相馬の灰釉小碗が多数出土している。CT11は、これらと同様の灰釉であり、大堀相馬の小碗と考えられる。CT12は、瀬戸・美濃の瓶類で、灰釉に緑釉が掛けられている。CT13の碗は、器面全体に被熱痕がみられ、釉薬の剥落や発泡が観察される。産地、年代とも不明である。CT15は、軟質施釉陶器である。器種はわからないが、内外面にきちんと透明釉が施釉されており、碗や鉢などが予想される。焙烙や鍋など、19世紀の軟質施釉陶器とは異なるものと考えられる。CT16は、小野相馬の中碗で、特徴的な淡青灰白色の失透釉が施釉されている。CT18は灰釉の中型丸碗で、暗青灰色の半失透釉のものである。武家屋敷地区第７地点の調査（『年報』19第２分冊）で、ごみ穴と考えられる２号遺構から、享保２（1717）年から享保18（1733）年の年号が記載された木簡とともに、18世紀前葉の陶磁器が一括して出土している。この資料の中に、胎土や灰釉が類似しており、大堀相馬、小野相馬を区別することが難しい灰釉丸碗の一群がみられた。CT18もその灰釉丸碗と類似するものであり、産地は、小野相馬？とした。CT19は、胎土から瀬戸・美濃の擂鉢の可能性が推測されるが、口縁部、底部などの特徴が不明なため、可能性を指摘するにとどめる。CT21は、志野織部の小中皿で、17世紀前葉と考えられる。鉄絵の圏線、草文が描かれている。

堀（新段階）の陶磁器は、広く年代幅をとらえているものも含まれるが、17世紀後半から18世紀中葉を示しているものが多く、堀（新段階）の埋土は、このころに埋没しているものと推測される。

堀（古段階）の遺物はごく少ないため、堀（古段階）の年代を決定することは難しいかもしれないが、堀（新段階）が17世紀後半から18世紀前半ごろを示す遺物が多く、それより下位の古段階埋土には、17世紀代の陶器と古寛永が１点出土していることから、大きくとらえて17世紀初頭から前葉に埋没したであろうと推測される。

13号溝は、堀（新段階）より古い段階の遺構である。遺物は磁器と陶器が１点ずつ出土しており、そのうち

CT22を写真で提示した（図版24）。掲載しなかった磁器は、小中皿の文様のない口縁部破片で、素地を見ると白磁ではなく、染付の文様が描かれるのではないかと考えられる。ごく小さい破片のため、年代は不明である。CT22は、胎土から肥前と考えられる。部分的に濁りのある透明釉である。小破片のため、年代はわからない。

４号溝b、５号溝は、近代に属する遺構であるが、４号溝ｂからはCT23が、５号溝からはCT24～27の近世陶器が出土している（図31・32、図版24）。CT24は、美濃の大鉢で、鉄絵草文が描かれる。残存部分には観察されないが、類似の製品では、織部釉が掛かるものもみられる。17世紀前葉と考えられる。CT25は、胎土から瀬戸・美濃の小碗と推測され、18世紀末から19世紀前葉と考えられる。口縁部に２カ所、呉須による文様がみられる。CT26は、総織部の小中皿で、17世紀前葉である。CT27は、大堀相馬の土鍋で、底面には煤が付着した使用痕が観察される。

他に、１層・撹乱から小野相馬の小中皿（CT28）が出土している（図32、図版24）。見込みは蛇の目釉剥ぎされ、印花文が施文されている。

CJ17は３号溝埋土、CJ18は３号溝底面石下埋土から出土した近代の磁器である（図版22）。CJ17は手描きの端反碗で、CJ18は摺絵の燗徳利である。近代の遺構からは、他にも銅板転写、摺絵（図版30）の技法を用いた磁器が多数出土している。

近代の磁器は、工業化された製品であり、出土量も非常に多くなる。摺絵や銅版転写では、多様な文様があり、近世の磁器とは異なる特徴をもつ。近代の磁器については、仙台城跡二の丸地区第12地点の調査（『年報』11）で大量に出土しており、器形や文様の技法の特徴をまとめ、詳細に報告している。今回の近代磁器は、これと基本的に同様の近代磁器であり、その様相に変化はないことから個々の近代磁器については検討していない。各文様技法の一部を図版30に掲載した。

２．土師質土器・瓦質土器（図33、表17・20、図版25）

土師質土器、瓦質土器ともに、出土量はあまり多くなく、土師質土器37点、瓦質土器10点が出土している。近世の遺構である堀（新段階）からは、土師質土器の皿、蓋、焼塩壺などが出土している。近代の遺構からは、土師質土器の皿、鉢類、焙烙と、瓦質土器の焜炉、火鉢、蚊遣の蓋などが出土している。明治に入り、近代化される中でも、土師質土器、瓦質土器は、材質の特性から、耐火性が必要な器種に用いられていたようである。しかし、近代の遺構からは、土師質土器の皿はほぼ出土しなくなり、焼塩壺もなくなるなど、出土する器種の上では、近世と明治以降で違いがみられる。

土師質土器、瓦質土器とも、破片資料が多く、図化できたのは、CH１～３、CG１・２の５点であった。

CH１は、土師質土器の皿である。底部が半分程度残存する破片である。全体に黒色化しており、灯明皿に転用されたものである可能性も考えられる。残存状態はあまりよくないが、他の皿はこれよりもさらに小破片である。CH２は、外面に格子状の叩き目がある在地産の焼塩壺である。ごく小破片しか残存していない。これまでの調査で、この形態の焼塩壺は、17世紀末から18世紀前葉にみられることがわかっている（『年報』19第５分冊）。CH３は、畿内系の焼塩壺の破片である。内面には布目圧痕が観察されるが、刻印は残存していない。CH３の畿内系焼塩壺の胎土に比べると、CH２の在地産の焼塩壺の胎土はやや赤みが強い特徴がある。

CG１は平面角形の火鉢で、脚付きである。CG２は蚊遣りの蓋で、内面は被熱により器面が白色化している。

３．瓦（図34・35、表15・16、23～28、図版26・27）

瓦の分類・集計・計測の基準は、年報６・７・８・９で示しており、『年報』８では、新たな種類を設定し、改めて分類基準をまとめている。さらに、『調査報告』１では、一部、分類が不明確だった種類を再整理した。今回報告する資料は、基本的にこれらの分類基準を踏襲して分類している。

出土した瓦は、軒丸瓦、軒平瓦類、軒桟瓦、平瓦、平瓦１類、平瓦２類、丸瓦、丸瓦類、桟瓦、桟瓦類、板塀瓦、棟瓦、袖瓦、不明瓦の14種類に分類された（表15・16）。瓦の出土総数は467点である。今回の調査では、近代に属する遺構・層位が中心であった。瓦の特徴のみから近世と近代を区別することは難しいが、瓦も近代のものがほとんどであると考えられる。そのため、近世が中心の調査の場合、軒丸瓦、軒平瓦、平瓦、丸瓦、丸瓦類などが多くなるが、今回の調査では、桟瓦、桟瓦類と、反りのある破片資料が含まれる平瓦１類の点数、重量が多くなるという違いがみられる。また、近代に属する１号井戸付属暗渠、瓦溜まり１、１層・撹乱では、比較的大きい破片が多く含まれていたのも特徴の一つである。

これまでの抽出基準（『年報』６）に従って、法量を計測するための基準は、次のようにした。軒丸瓦・軒平瓦・軒桟瓦については、瓦当の一部が残っている資料、平瓦・平瓦１類・平瓦２類・桟瓦・桟瓦類・丸瓦・丸瓦類・板塀瓦・棟瓦・袖瓦については、幅、長さのどちらかが計測可能な資料を抽出し、計測した。

近世に属する遺構では、堀（古段階）、堀（新段階）から瓦が出土しているが、陶磁器と同様に、小破片ばかりであり、図化の抽出基準に適う資料はなかった。そのため、近世の遺構から、図化して提示できるものはない。近代の１号溝、瓦溜まり１から瓦当面のある軒桟瓦、軒丸瓦が出土しており、その３点を図化して提示している（図34、図版26）。また、刻印のある瓦については、出土場所に関わらず、刻印部分を図化している（図35、図版27）。近代の瓦のため、図化しなかった資料については、計測した法量を表にまとめている（表23～28）。

【軒丸瓦】（図34、表23、図版26）

軒丸瓦は１層・撹乱から２点出土しており、図34に提示している（Ｔ１、Ｔ２）。いずれも連珠三巴文で、Ｔ１は右巻き、Ｔ２は左巻きの違いがある。

【軒桟瓦】（図34、表24、図版26）

軒桟瓦は25点出土している。すべて近代の遺構・層位からの出土である。計測のために抽出したのは22点で、そのうち１点（T16）を図化した。T16は、小巴部瓦当文様は連珠三巴文（右巻き）で、垂れ部分は残存していない。T16以外の軒桟瓦は、小巴部、垂れ部の文様が無文のもののみである。T19は、小巴部が膨らみのある万十であるが、これ以外で小巴部が残存するものは、すべて膨らみのない石持である。また、垂れ部が残存するものでは、無文の中剣のみである。小巴径は7.8㎝~8.5㎝、垂れの長さは4.6～5.0㎝と規格が揃っていることがうかがえる。

【軒平瓦類】（表25）

軒平瓦類は５点出土している。１層・撹乱と瓦溜まり１からの出土である。計測のため抽出したのは４点（T25～28）で、図化したものはない。軒平瓦類には、軒平瓦・軒桟瓦の可能性があるが、欠損のため断定できないものが含まれている。いずれも瓦当文様は無文の中剣で、垂れの長さも4.4～4.8㎝と規格が揃っている。前述の軒桟瓦の瓦当文様や法量とも共通する。

【平瓦】（表26）

平瓦は、５点出土しており、いずれも１号井戸付属暗渠からである。そのうち４点を計測した（T29～32）。図化したものはない。頭幅24.4～24.8㎝、尻幅24.7～25.0㎝、長さ25.3～26.3㎝、頭谷深さ2.7～2.9㎝、尻谷深さ2.1～3.2㎝、厚さ2.8～2.0㎝と法量にまとまりがあり、用途が同じ瓦であろうと考えられる。

【桟瓦】（表27）

桟瓦は、32点出土している。すべて近代の遺構からの出土である。そのうち計測のために抽出したのは４点で、図化したものはない。

【刻印のある瓦】（図35、表28、図版27）

刻印のある瓦は、８点出土しており、すべてを図化した。いずれも近代の遺構から出土した瓦である。瓦の種類では、軒桟瓦、桟瓦、桟瓦類と、それらに含まれる可能性のある平瓦１類（反りのある平瓦）にみられる。「ナ」、「エ」のような片仮名（図35－Ｔ39、Ｔ40）、漢数字の「十六」、記号のような刻印（図35－Ｔ42、Ｔ43）がみられる。「四宮」は、これまでの調査からも、「宮」の字と漢数字２文字を組み合わせた刻印がたびたび出土しており、そのバリエーションの１つと考えられる。武家屋敷地区第11地点の調査（『調査報告』１）からは、同じ「四宮」の刻印が確認されている。文字の傾きなどが若干異なることから、同じ判とまでは判断できないが、文字の大きさや特徴が非常によく似ている。これまで、「宮四九」（二の丸地区第３地点：『年報』１）、「宮五六」（二の丸地区第６地点：『年報』３）、「宮一五」、「宮二九」、「宮三？」、「宮四六」、「宮四七」、「宮五六」、「宮五七」（二の丸地区第５地点：『年報』６）、「宮五六」（二の丸地区第９地点：『年報』８）、「宮五」、「宮四四」（二の丸地区第17地点：『年報』18）が確認されており、漢数字の種類は多様である。Ｔ38よりも刻印が大きく、文字部分が凸形に浅い浮き彫りになっているものの方が多数である。Ｔ８の「和田」は、類似した刻印が二の丸地区第18地点から１点出土している。またＴ41には、「治十七年高知縣和田類次」の刻印があるが、こちらは判ではなく、文字を彫ったものである。

４．金属製品（図36・37、表18・29～31、図版28・29）

金属製品は、近世の遺構では、堀（古段階）で古寛永が１点出土しているのみである。他は、すべて近代の遺構・層位からの出土である。１層・撹乱と３号溝からの出土が多く、銃弾、薬莢、徽章、認識票など軍隊に関連した製品が多い。ボタン、フック、バックル、鳩目なども軍服に用いられたものである可能性が考えられる。近代の金属製品は、図版31に一部を掲載した。

古銭は、寛永通宝以外に、明治、大正、昭和の硬貨が出土しており、鋳造年を含めて集計した。そのうち、寛永通宝と、明治、大正の硬貨を図化した。煙管は３点出土しており、残存状況がよいため、すべてを図化した。煙管の形状は、『年報』18で示した分類に基づいている。

古寛永は、堀（古段階）から１点出土している（図36－MC１）。堀（古段階）出土の陶磁器では、年代を推測できるものが４点出土しており、そのうち３点が17世紀代を示すものが中心であった。古寛永は、明暦２（1656）年までの鋳造と考えられている（江戸遺跡研究会編2001）。それ以降も長く流通していた期間を考慮する必要があるが、陶磁器の年代と矛盾はしないと考えられる。

新寛永は、３号溝、１層・撹乱からの出土である（図36－MC2、MC3）。いずれも近代に帰属する遺構・層位からの出土である。錆化が著しく、銭名は不明確である。

MC４～６は、近代以降の銭貨である（図36）。MC４は明治十五年鋳造の半銭、MC５は明治四十二年鋳造の十銭、MC６は大正九年鋳造の五銭である。いずれも完形である。

煙管（図37）は、３号溝と１層・撹乱からの出土しており、近代の遺構・層位である。MO１は３号溝出土の延べ煙管である。首部分の上面と吸口部分の右側面に、灰吹に打ち付けたような叩打痕が観察される。MO２、MO３は、１層・撹乱出土の煙管の雁首である。油返し部分がなく、一本の管から火皿と首部が作られた形をしており、形態から19世紀以降の年代と考えられる（古泉弘1987）。MO３は、首部上面に灰吹に打ち付けたような叩打痕が観察される。

MO４は、認識票で、一面には「歩□四　機一　五□二」の刻印が観察される（図版29）。他面には布が付着している。刻印の内容から陸軍第二師団で用いられたものと考えられる。

５．その他の遺物（表17・18・21、図版24・31）

その他では、近代の遺物を写真で掲載している。

１層・撹乱を中心に硬質陶器が85点出土しており、そのうち、CT29の写真を提示した（図版24）。高台内に「硬陶」の銘があり、明治41（1908）年に金沢で設立された日本硬質陶器株式会社製であることがわかる。星文があり、軍隊用に製作された規格品である。

木製品は合計23点、石製品は合計６点と、ほとんど出土しておらず、図化したものはない。木製品は、板材、角材の破片がほとんどで、下駄、曲物などの製品は含まれていない。歯ブラシは13点出土している（表17）。素材は、骨製と、緻密な広葉樹製の木製品とが含まれているが、明確でないことから区別せずに集計している。植毛部分はすでになく、孔が開いた状態での出土である。一部を図版31に示している。

ボタンの素材は、ガラス製、骨製、銅製があり、素材別に集計した（表17・18）。ガラス製82点、骨製３点、銅製21点と、ガラス製が多い。銅製のボタンは、脚付きのもので、磁器製と骨製は２つ穴と４つ穴がみられる（図版31）。

土器は、堀（古段階）と１層・撹乱から出土している（表17）。堀（古段階）の土器は、土器片とだけ識別できる程度の残存状況で、器面は摩滅が著しい。１層・撹乱の土器は、器厚が比較的厚く、繊維を含むものであるが、器面の摩滅によって文様などの特徴は観察されない。

CT30～32は、近代便所の埋め甕である（図版31）。レンガ造りの床に方形の枠が列をなして作られており、枠内に甕が埋設された状態で検出された。便所の遺構と考えられる。上半部はすでに欠損しているが、堤産の大甕である。

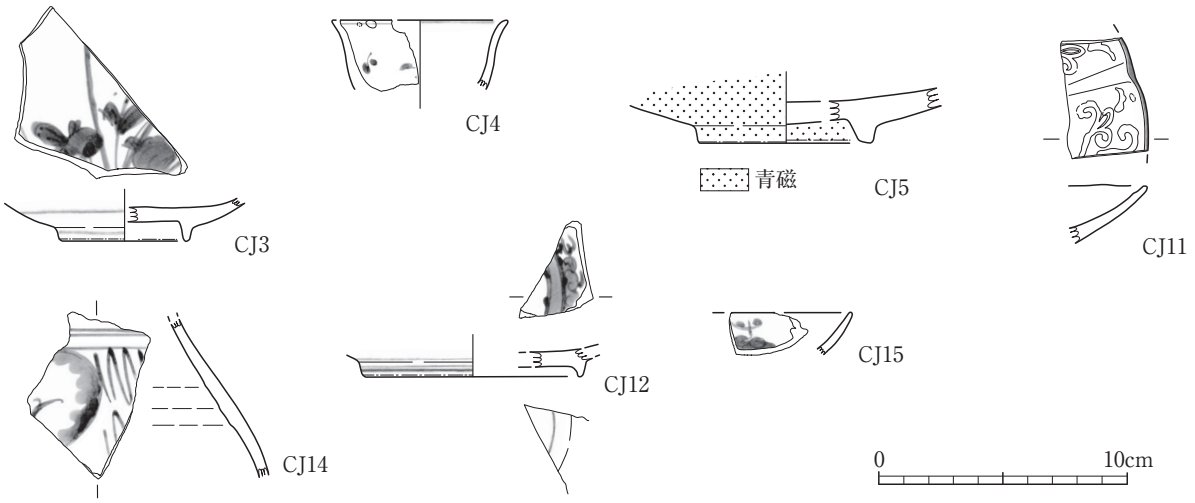


図30　武家屋敷地区第16地点出土磁器
Fig.30　Porcelains from BK16

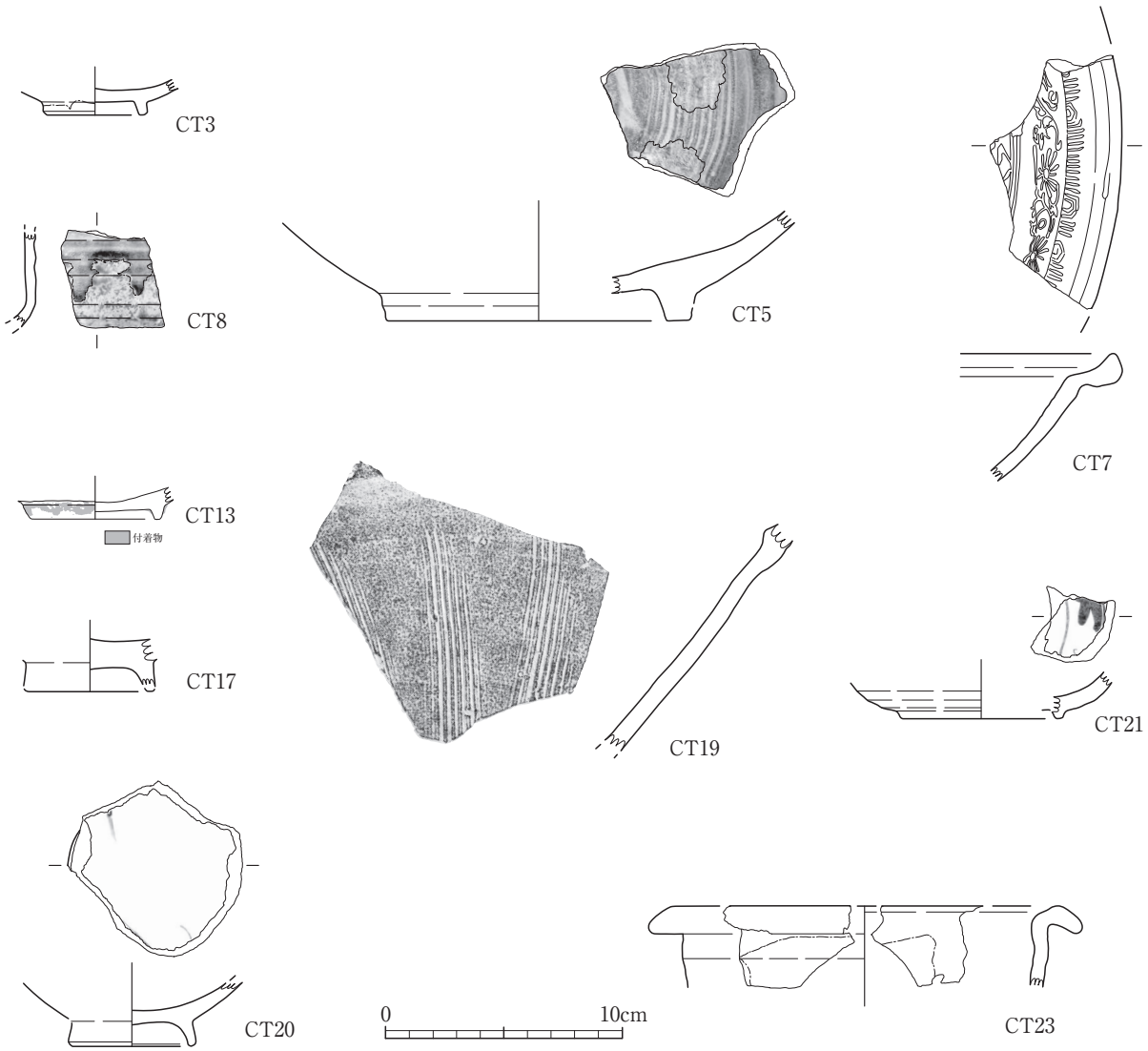


図31　武家屋敷地区第16地点出土陶器（1）
Fig.31　Glazed ceramics from BK16（1）

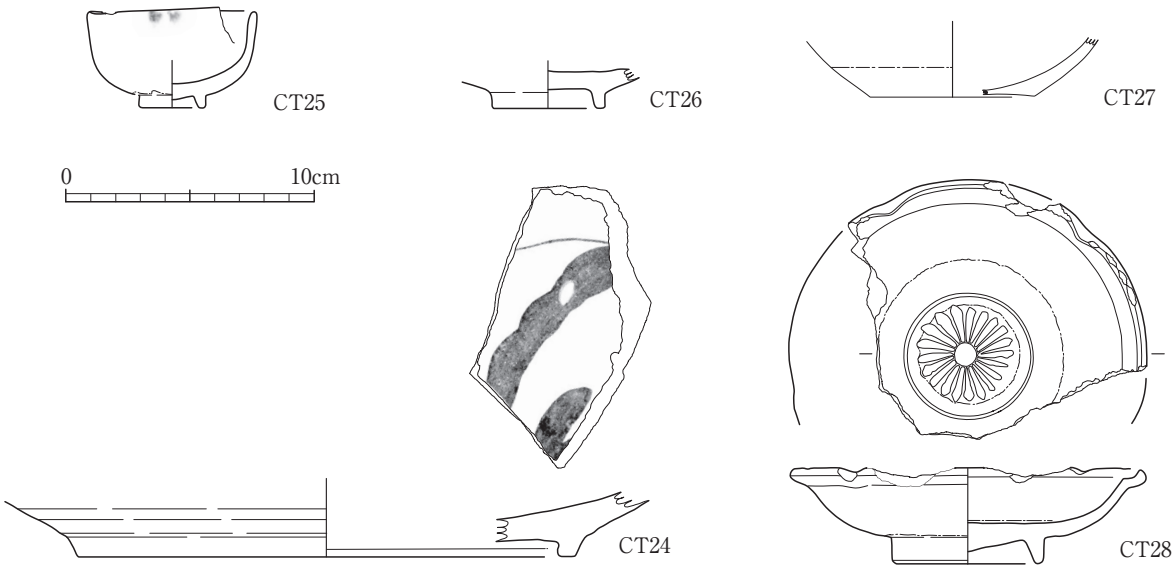


図32　武家屋敷地区第16地点出土陶器（2）
Fig.32　Glazed ceramics from BK16（2）

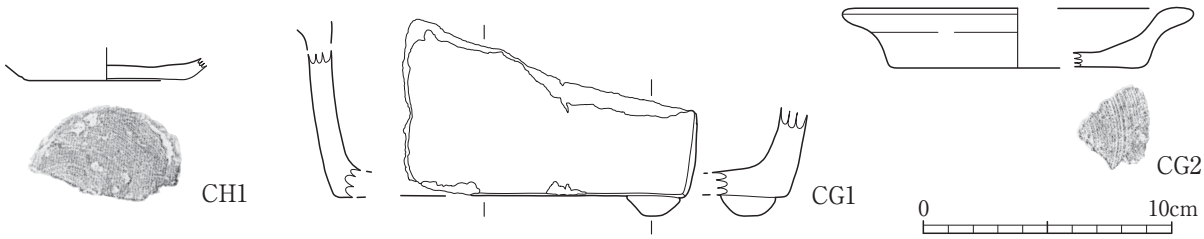


図33　武家屋敷地区第16地点出土土師質土器・瓦質土器
Fig.33　Unglazed ceramics from BK16

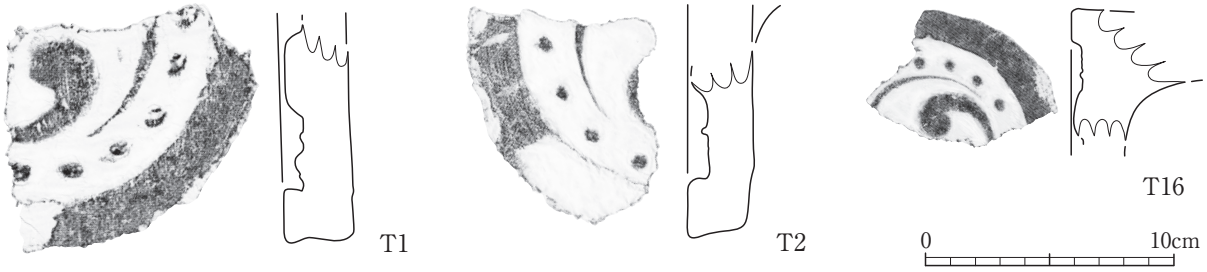


図34　武家屋敷地区第16地点出土軒丸瓦・軒桟瓦
Fig.34　Various roof tiles from BK16

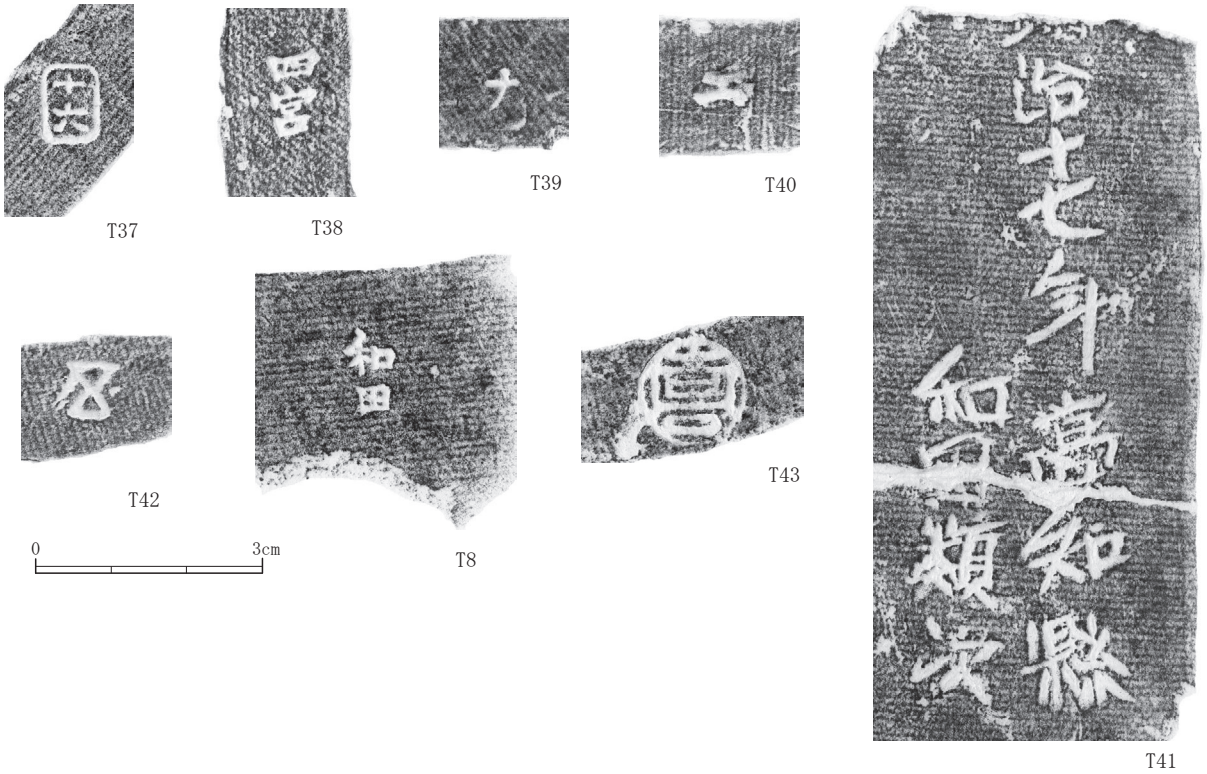


図35　武家屋敷地区第16地点出土刻印瓦
Fig.35　Roof tiles with seal impression from BK16

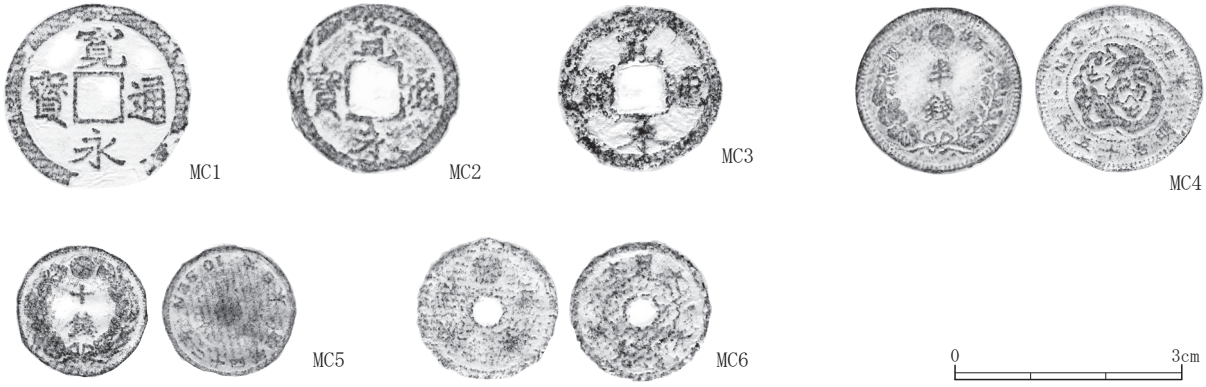


図36　武家屋敷地区第16地点出土古銭
Fig.36　Coins from BK16

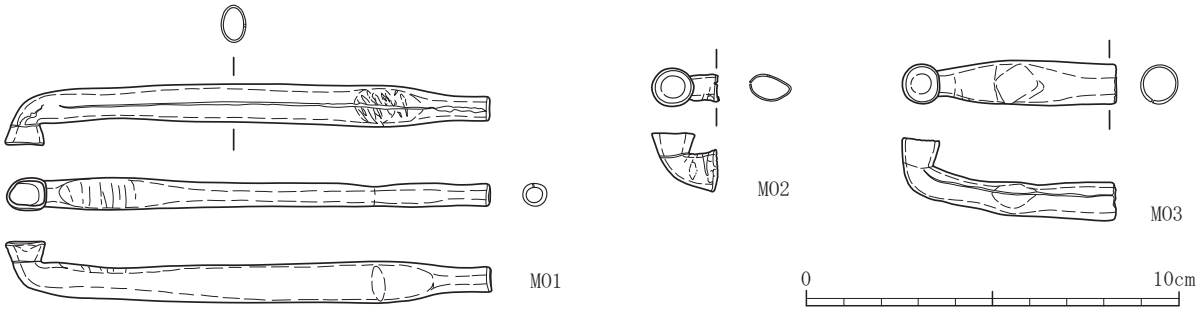


図37　武家屋敷地区第16地点出土煙管
Fig.37　Pipes from BK16

表８　武家屋敷地区第16地点出土磁器集計表（近世）
Tab.8　Distribution of porcelains belonging to Edo period from BK16

時期	出土場所		堀大別 埋土	近世磁器																					合計
				中碗					大碗	小碗			碗不明	皿			鉢		碗鉢皿不明	瓶類		袋物不明	その他	不明	
				丸	端反	筒	蓋	不明		丸	端反	不明		小中	極小	皿不明	小中	その他		燗徳利	瓶類				
Ⅰa	13号溝	埋土	—											1											1
Ⅰc	堀（新段階）１区	埋土	新段階埋土																1						1
	堀（新段階）２区	埋土	新段階埋土											1											1
		埋土２	新段階①層					1					1						1						3
		埋土３	新段階②層	1							2		4	6					2		1		蓋物1	1	18
		埋土４	新段階④層											1											1
		埋土８	新段階⑤層																1						1
	堀（新段階）３区	埋土	新段階埋土					2						4					1						7
		埋土１	新段階②層										1	2											3
		埋土４	新段階②層	1																	1				2
		埋土６	新段階②層	1							1		1	1					2						6
	堀（新段階）４区	埋土	新段階埋土											2								1			3
		埋土１	新段階①層											1											1
		埋土７	新段階②層											1											1
Ⅱ	５号溝	埋土	—	2									1									1		1	5
		掘方埋土	—											2											2
		暗渠埋土	—											1					1						2
Ⅱb	４号溝	埋土	—					1																	1
Ⅲa	３号溝	埋土	—																1						1
		平石下埋土	—	1																					1
	14号溝	埋土	—						1				1	2			1								5
		掘方埋土	—			1							1										小坏？1	1	4
	１層・撹乱		—	21	2		1	7		2			1	21		1	2		7			5	蓋物2 水滴1 仏飯器1 猪口1	3	78
合計				27	2	1	1	11	1	2	3		11	46		1	3		17		2	7	7	6	148

表９　武家屋敷地区第16地点出土磁器集計表（近代・手描き）
Tab.9　Distribution of modern porcelains period from BK16

時期	出土場所		近代磁器（手描き）																					合計
			中碗					大碗	小碗			碗不明	皿			鉢		碗鉢皿不明	瓶類		袋物不明	その他	不明	
			丸	端反	筒	蓋	不明		丸	端反	不明		小中	極小	皿不明	小中	その他		燗徳利	瓶類				
Ⅱ	５号溝	埋土											1											1
		北岸埋土											1											1
		暗渠埋土																1						1
Ⅱb	４号溝a	埋土					1																	1
Ⅲa	３号溝	埋土	1	2	1		2			2			1					1	1	1				12
		掘方埋土		1								1	1											3
		平石下埋土		1			1			2			5					7			1	小坏2		19
	14号溝	埋土		2								1	2						1			蓋2		8
	１号井戸	掘方埋土					1																	1
	１号井戸付属木樋（東側）	埋土		1																				1
Ⅲa	瓦溜り１（１層・撹乱）			1			2												1	1				5
	瓦溜り２（１層・撹乱）											1						1	1					3
	１層・撹乱		19	58	1		85			15	13	43	90			2		53	20	2	6	小坏7、猪口1 急須6、仏飯器1 蓋物（蓋）1 水滴1、蓋1 蓋物（身）1	19	445
	不明																			1				1
合計			20	66	2		92			19	13	46	101			2		63	24	5	7	23	19	502

表10　武家屋敷地区第16地点出土磁器集計表（近代・摺絵）
Tab.10　Distribution of modern porcelains period from BK16

時期	出土場所		近代磁器（摺絵）																				合計
			中碗					大碗	小碗			碗不明	皿			鉢		碗鉢皿不明	瓶類		袋物不明	その他	不明	
			丸	端反	筒	蓋	不明		丸	端反	不明		小中	極小	皿不明	小中	その他		燗徳利	瓶類				
Ⅱ	5号溝	埋土																	1					1
Ⅲa	3号溝	埋土	1																3				2	6
		掘方埋土											1						1					2
		平石下埋土	7	1															13					21
	14号溝	埋土	3											1					2					6
		掘方埋土	1																1					2
	1号井戸	掘方埋土	1																					1
Ⅲb	9号溝	掘方埋土	1																					1
Ⅲa	瓦溜り2（1層・撹乱）		1															1						2
	1層・撹乱		284				5					20	63			2		26	74	2	2	火入1、蓋1、合子1	9	490
合計			299	1			5					20	64	1		2		27	95	2	2	3	11	532

表11　武家屋敷地区第16地点出土磁器集計表（近代・銅板転写）
Tab.11　Distribution of modern porcelains period from BK16

時期	出土場所		近代磁器（銅板転写）																				合計
			中碗					大碗	小碗			碗不明	皿			鉢		碗鉢皿不明	瓶類		袋物不明	その他	不明	
			丸	端反	筒	蓋	不明		丸	端反	不明		小中	極小	皿不明	小中	その他		燗徳利	瓶類				
Ⅱ	5号溝	北岸埋土										1												1
Ⅱb	4号溝	埋土					1																	1
Ⅲa	3号溝	平石下埋土					1					1												2
	14号溝	埋土					1					1												2
		掘方埋土																			1			1
	1層・撹乱		16	1	1		9					3	12		2	5	鉢類1	4	13	3	6	蓋物（身）1、蓋物（蓋）1、急須？1、蓋1 水滴2	7	89
合計			16	1	1		12					6	12		2	5	1	4	13	3	7	6	7	96

表12　武家屋敷地区第16地点出土磁器集計表（近代・白磁）
Tab.12　Distribution of modern porcelains period from BK16

時期	出土場所		近代磁器（白磁）																				合計
			中碗					大碗	小碗			碗不明	皿			鉢		碗鉢皿不明	瓶類		袋物不明	その他	不明	
			丸	端反	筒	蓋	不明		丸	端反	不明		小中	極小	皿不明	小中	その他		燗徳利	瓶類				
Ⅱ	5号溝	暗渠埋土																1						1
		裏込め埋土																1						1
Ⅱb	4号溝	埋土																			1			1
Ⅲa	3号溝	埋土		1														1						2
		掘方埋土																				小坏？1		1
		平石下埋土		2								1						1			1	小坏？3	3	10
	14号溝	埋土					1																	1
		掘方埋土																1				小坏？1		2
Ⅲa	瓦溜り2（1層・撹乱）																					小坏1		1
	1層・撹乱		3	2	6		7		1	2		12	13			1		35	39	6	12	小坏48、水滴1、急須？5、合子（身）1	1	261
合計			3	5	6		8		1	2		13	13			1		40	39	6	13	61	80	281

表13　武家屋敷地区第16地点出土磁器集計表（近代・型打ち・クロム青磁・色釉）
Tab.13　Distribution of modern porcelains period from BK16

出土場所		近代磁器																					合計
		中碗					大碗	小碗			碗不明	皿			鉢		碗鉢皿不明	瓶類		袋物不明	その他	不明	
		丸	端反	筒	蓋	不明		丸	端反	不明		小中	極小	皿不明	小中	その他		燗徳利	瓶類				
型打ち	1層・撹乱											2	2								水滴3	2	9
	合計											2	2								3	2	9
クロム青磁	1層・撹乱	1		1		2		4			2	3								2		3	18
	合計	1		1		2		4			2	3								2		3	18
色釉	1層・撹乱			1		1											1				人形？1		4
	合計			1		1											1				1		4

表14　武家屋敷地区第16地点出土陶器集計表
Tab.14　Distribution of glazed ceramics from BK16

	出土場所		堀大別 埋土	碗					皿		鉢	擂鉢	碗鉢皿不明	土瓶・身	壺・甕・瓶	壺・甕不明	袋物不明	その他	不明	合計
				中碗			小碗	碗不明	小中	その他										
				丸	その他	不明														
Ⅰa	堀２区 （古段階Ｃ）	埋土３層	古段階②層									1							4	5
	堀４区 （古段階Ｃ）	西トレンチ 埋土４層	古段階⑤層										1							1
	堀３区 （古段階Ｂ）	古段階検出面	—					1				1								2
Ⅰa	13号溝	埋土	—	1																1
Ⅰc	堀２区 （新段階）	埋土	新段階埋土	1															1	2
		埋土１層	新段階①層										1							1
		埋土２層	新段階①層			1					大鉢1						1			3
		埋土３層	新段階②層	1		6					大鉢1	1	1				1			11
		埋土５層	新段階④層			2			1											3
	堀３区 （新段階）	埋土	新段階埋土					1								1				2
		埋土１層	新段階②層						1											1
		埋土４層	新段階②層										2							2
		埋土６層	新段階②層										1							1
		埋土８層	新段階③層			1														1
	堀４区 （新段階）	埋土	新段階埋土	1					1				1							3
	堀（新段階）	埋土	新段階埋土						1											1
Ⅱ	５号溝	北岸埋土	—			2														2
		裏込め	—						1							1				2
		埋土	—				2		1		大皿１		2		壺１			土鍋１	1	9
		掘方埋土	—						1				1						1	3
		暗渠埋土	—															土鍋１		1
Ⅱb	４号溝b	埋土	—													1				1
Ⅲa	２号溝	埋土	—		1							1							1	3
	３号溝	埋土	—	1										1					1	3
		平石下埋土	—														1	行平鍋１	1	3
	14号溝	埋土	—						1		小中2		1			1				5
		掘方埋土	—	2					3		小中１	2	2		瓶類１	1	1			13
Ⅲb	１号溝	埋土	—										1							1
	９号溝	掘方埋土	—								1									1
	１層・撹乱		—	19	平杉1 筒3 端反1	26	2	4	22	大皿1 向付1 不明2	小中1 片口1 鉢類1	16	41	24	甕8 豆甕1 瓶類4 2	14	24	仏飯器2 土鍋2 火入･香炉5 蓋1、猪口1 行平鍋2	31	263
	不明		—													1				1
合計				25	6	39	4	6	33	6	8	22	55	25	17	20	28	16	41	351

表15　武家屋敷地区第16地点出土瓦集計表（1）
Tab.15　Distribution of roof tiles from BK16（1）

時期	出土場所		堀大別埋土		平瓦１類	平瓦２類	平瓦	丸瓦	丸瓦類	軒丸瓦	軒平瓦類	軒桟瓦	桟瓦	桟瓦類	板塀瓦	その他	不明	合計
Ⅰa	堀（古段階Ｃ）２区	埋土	古段階埋土	個数	1				1								1	3
				重量g	169				215								10	394
	堀（古段階Ｃ）４区	西側調査区セクション１層	古段階①層	個数													1	1
				重量g													14	14
		西側調査区セクション４層	古段階⑤層	個数	1													1
				重量g	15													15
	堀（古段階Ｂ）３区	古段階検出面	—	個数	1				1									2
				重量g	88				34									122
Ⅰc	堀（新段階）２区	埋土	新段階埋土	個数	1													1
				重量g	87													87
		埋土１層	新段階①層	個数					1									1
				重量g					18									18
		埋土２層	新段階①層	個数					4								1	5
				重量g					620								1	621
		埋土３層	新段階②層	個数	6	1			1								4	12
				重量g	334	60			49								61	504
		埋土４層	新段階③層	個数	4												1	5
				重量g	304												15	319
		埋土５層	新段階④層	個数	1	1												2
				重量g	116	111												227
		埋土６層	新段階④層	個数													1	1
				重量g													15	15
		埋土８層	新段階⑤層	個数	1				1									1
				重量g	31				45									76
	堀（新段階）３区	埋土	新段階埋土	個数					1									1
				重量g					141									141
		埋土１層	新段階②層	個数	1													1
				重量g	53													53
		埋土４層	新段階②層	個数					1									1
				重量g					308									308
		埋土６層	新段階②層	個数	5				3						2		3	13
				重量g	566				382						228		16	1192
	堀（新段階）４区	埋土	新段階埋土	個数	8	1			1									10
				重量g	719	39			43									801
Ⅱ	５号溝	埋土	—	個数	11	5		2	4						5		2	28
				重量g	1604	572		268	724						1046		10	4224
		掘方埋土	—	個数	4	6											3	13
				重量g	292	2685											279	3256
		暗渠埋土	—	個数	3													3
				重量g	156													156

表16　武家屋敷地区第16地点出土瓦集計表（2）
Tab.16　Distribution of roof tiles from BK16（2）

時期	出土場所		堀大別埋土		平瓦１類	平瓦２類	平瓦	丸瓦	丸瓦類	軒丸瓦	軒平瓦類	軒桟瓦	桟瓦	桟瓦類	板塀瓦	その他	不明	合計
Ⅱb	４号溝	埋土	—	個数	8	1							3				2	14
				重量g	2158	47							2071				47	4323
	４号溝a	埋土	—	個数	20	1						1	2	2			4	30
				重量g	2020	88						103	44	96			76	2427
	４号溝b	埋土	—	個数	24	1						1	6	2		袖瓦1	3	38
				重量g	2416	35						176	1190	125		202	40	4184
Ⅲa	２号溝	埋土	—	個数	23				1				2	10			1	37
				重量g	3328				133				773	1369			48	5651
		掘方埋土	—	個数	1								1					2
				重量g	230								822					1052
	３号溝	埋土	—	個数	5												4	9
				重量g	999												78	1077
		掘方埋土	—	個数	4												3	7
				重量g	633												61	694
		平石下埋土	—	個数	1													1
				重量g	160													160
	14号溝	埋土	—	個数	2							1				棟瓦1		4
				重量g	254							87				104		445
		掘方埋土	—	個数	4	2											2	8
				重量g	623	410											61	1094
	１号井戸	埋土	—	個数	1													1
				重量g	119													119
		堀方埋土	—	個数	15	3						1	1	6		袖瓦1・棟瓦1		28
				重量g	3365	211						1380	59	3062		151・1555		9783
		付属暗渠	—	個数	10		5						4	2				17
				重量g	3644		8745						5845	243				11538
Ⅲb	１号溝	埋土	—	個数	29	8						1	5	10			6	59
				重量g	6557	440						143	1221	2518			90	10969
	９号溝	掘方埋土	—	個数	1												1	2
				重量g	73												32	105
Ⅲa	瓦溜り１（１層・撹乱）		—	個数	16	1			1		3	9		3		棟瓦2・袖瓦1		36
				重量g	2113	177			351		658	2660		883		661・207		7710
	１層・撹乱		—	個数	18	12			2	2	2	11	8	8	1	棟瓦2・袖瓦2	1	69
				重量g	2924	627			96	423	547	2696	8570	1349	106	340・1035	3	18716
合計				個数	230	43	5	2	23	2	5	25	32	43	8	11	45	467
				重量g	36150	5502	8745	268	3159	423	1205	7245	20595	9645	1380	4255	958	92591

表17　武家屋敷地区第16地点出土土器・石製品・木製品・その他集計表
Tab.17　Distribution of unglazed ceramics, various implements made of stone, wood and the other implements from BK16

	出土場所		堀大別 埋土	土師質土器			瓦質土器			石製品	木製品	硬質陶器	ガラス	その他	合計
				皿	その他	不明	鉢類	その他	不明						
Ⅰa	堀２区 （古段階Ｃ）	埋土３層	古段階③層											土器4	4
Ⅰc	堀（新段階） ２区	埋土３層	新段階②層	2	蓋1										3
		埋土４層	新段階④層			1									1
		埋土５層	新段階④層	1											1
		埋土８層	新段階⑤層			1									1
	堀（新段階） ３区	埋土	新段階埋土	2											2
		埋土１層	新段階②層						1						1
		埋土４層	新段階②層	4		2									6
		埋土６層	新段階②層	2											2
	堀（新段階） ４区	埋土	新段階埋土	1											1
		埋土１	新段階①層		焼塩壺1										1
		埋土３	新段階③層	1											1
Ⅱ	５号溝	埋土	—	1				火鉢1 蚊遣蓋1			板材1			軟質施釉 焙烙1	5
		掘方埋土	—		鉢類1										1
		暗渠埋土	—								角材1、板材1 木簡？1				3
Ⅱb	４号溝a	埋土	—								木簡？1				1
	４号溝b	埋土	—								板材1、角材1 小片1、竹1				4
Ⅲa	２号溝	埋土	—			2				砥石1	小片7			軟質施釉焙烙1 歯ブラシ1	12
	３号溝	掘方埋土	—	1											1
		平石下 埋土	—					焜炉1					ボタン10 瓶2	歯ブラシ1 ボタン骨製1	15
		埋土	—								角材1、板材1 小片３、竹1		瓶1	歯ブラシ2	9
	14号溝	埋土	—		鉢類1									歯ブラシ2 炻器急須2	5
		掘方埋土	—	1	焙烙1	2						碗鉢皿 不明1	瓶4		9
Ⅲb	１号溝	埋土	—											碍子14	14
	９号溝	掘方埋土	—											碍子1	1
Ⅲa	瓦溜り２（１層・撹乱）		—											碍子1	1
	1層・撹乱		—		焼塩壺1 鉢類1	6	3	焜炉2	1	硯2 不明石製品1 火打石1 碁石1	匙？1	湯飲み1 碗類22、 皿15、鉢4 碗鉢皿 不明42	ボタン72 瓶3	碍子26 歯ブラシ7 炻器急須1 ボタン骨製3 縄文土器1 不明土製品1 貝種別不明1	219
合計				16	7	14	3	5	2	6	23	85	92	71	324

表18　武家屋敷地区第16地点出土金属製品集計表
Tab.18　Distribution of various implements made of metal from BKと16

時期	出土場所		堀大別 埋土	銅製品					鉄製品			鉛製品	合計
				寛永通宝	その他古銭	煙管	ボタン	その他	釘	鎹	その他		
Ⅰa	堀（古段階Ｃ） ４区	埋土１層	古段階③層	古寛永1									1
Ⅱb	４号溝a	埋土	—							1			1
	４号溝b	埋土	—								棒状1		1
	４号溝	埋土	—							1			1
Ⅲa	２号溝	埋土	—		明治十五年半銭1			薬莢1、指貫1					3
	３号溝	埋土２層	—				4	バックル2					6
		平石下 埋土	—	新寛永1		延べ 煙管 1	5	筒状1、銃弾6、鈴1 帯金状2、リング状2 フック3、鳩目1 薬莢1、不明1				弾丸2	27
	14号溝	埋土	—					銃弾1、針金1					2
		掘方埋土	—					薬莢1					1
	１号井戸付属 木樋東側	埋土	—					帯金状1					1
	１層・撹乱		—	新寛永1	明治四十二年十銭1 大正九年五銭1 昭和十四年五銭1 昭和十五年十銭1	雁首 2	12	銃弾5、薬莢3、徽章1 鳩目3、瓶蓋類2 リング状1、鋲1 洋釘1、認識票1 フック1、円板状1	洋1 和1	2	把手1 棒状1 リング状1	柄1 銃弾2	49
合計				3	5	3	21	46	2	4	4	5	93

表19　武家屋敷地区第16地点出土磁器観察表
Tab.19　Notes on porcelains at BK16

登録番号	出土場所	堀大別埋土	器種	口径cm	底径cm	器高cm	文様	胎土	産地	製作年代	備考	図	図版
CJ001	堀（新段階）２区埋土２	新段階①層	不明	—	—	—	内面矢羽根文?	普通	肥前	18c？	端反	—	22
CJ002	堀（新段階）２区埋土２	新段階①層	碗不明	—	—	—	網目文	普通	肥前	17c後半		—	22
CJ003	堀（新段階）２区埋土３	新段階②層	小中皿	—	5.1	—	見込み草花文	普通	肥前	17c中葉～後葉		30	22
CJ004	堀（新段階）２区埋土３	新段階②層	小型端反碗	7.0	—	—	梅花散らし文	密	肥前	17c後半		30	22
CJ005	堀（新段階）２区埋土３	新段階②層	小中皿	—	6.8	—	青磁	粗	肥前	17c中葉?	貫入	30	22
CJ006	堀（新段階）２区埋土３	新段階②層	小中皿	—	—	—	文様あり	普通	肥前	17c？		—	22
CJ007	堀（新段階）２区埋土３	新段階②層	小中皿	—	—	—	青磁	普通	肥前	17c後半？	貫入	—	22
CJ008	堀（新段階）２区埋土３	新段階②層	小中皿	—	—	—	文様あり	密	肥前	17c後半～18c	ハリ支え1	—	22
CJ009	堀（新段階）２区埋土３	新段階②層	中型丸碗	—	—	—	草文	密	肥前	17c後葉～18c前葉		—	22
CJ010	堀（新段階）２区埋土３	新段階②層	小型端反碗	8.3	—	—	蝶文	密	肥前	17c後葉～18c前葉		—	22
CJ011	堀（新段階）２区埋土	新段階埋土	小中皿	—	—	—	口紅　輪花皿 陽刻花唐草文	密	肥前	17c後葉～18c初		30	22
CJ012	堀（新段階）３区埋土１	新段階②層	小中皿	—	8.5	—	見込み文様あり	密	肥前	17c後葉～18c		30	22
CJ013	堀（新段階）３区埋土１	新段階②層	小中皿	—	—	—	文様あり	密	肥前	17c後葉～18c		—	22
CJ014	堀（新段階）３区埋土４	新段階②層	瓶類	—	—	—	網目文　丸に草文	普通	肥前	18c		30	22
CJ015	堀（新段階）３区埋土６	新段階②層	小中皿	—	—	—	内面：梅枝文 （赤・緑・茶）	密	肥前	17c後葉～18c前半		30	22
CJ016	堀（新段階）３区埋土	新段階埋土	小中皿	12.7	—	—	二重斜格子文	普通	肥前	18c		—	22
CJ017	３号溝埋土１	—	中型端反碗	10.7	3.8	5.4	外面：松竹梅文？ 内面：口縁四方襷文 見込み宝文	密	瀬戸？	明治	近代磁器	—	22
CJ018	３号溝平石下埋土	—	燗徳利	—	6.2	—	摺絵　雲に飛鶴文	密	不明	明治	近代磁器	—	22

表20　武家屋敷地区第16地点出土土師質土器・瓦質土器観察表
Tab.20　Notes on various unclazed ceramics and fumed ceramics at BK16

登録番号	種類	出土場所	堀大別埋土	口径cm	底径cm	器高cm	調整	備考	図	図版
CH001	土師質・皿	堀（新段階）２区埋土５層	新段階④層	—	6.3	—	内面：ナデ 底部：回転糸切り痕a	全体に黒色化	33	25
CH002	土師質・焼塩壺	堀（新段階）３区埋土１層	新段階②層	—	—	—	外面：格子目 内面：不明	器面が摩滅	—	25
CH003	土師質・焼塩壺	１層・撹乱	—	—	—	—	外面：ナデ 内面：布目圧痕	畿内系焼塩壺 刻印は不明	—	25
CG001	瓦質・火鉢	５号溝埋土１層	—	—	—	—	内面：ナデ 外面：ナデ	角形　脚付き	33	25
CG002	瓦質・蚊遣（蓋）	５号溝埋土１層	—	14.0	10.0	2.4	内面：ナデ 外面：ナデ	底部回転糸切り痕あり 内面受熱により白色化	33	25

表21　武家屋敷地区第16地点出土陶器観察表
Tab.21　Notes on glazed ceramics at BK16

登録番号	出土場所	堀大別埋土	器種	口径cm	底径cm	器高cm	文様	釉薬	胎土	生産地	製作年代	備考	図	図版
CT001	堀（古段階Ｃ）４区西側調査区セクション４層	古段階⑤層	小中皿	—	—	—		長石釉	粗	美濃	17c初～前葉	鼠志野貫入	—	23
CT002	堀（古段階Ｃ）２区　埋土３層	古段階②層	擂鉢	—	—	—		無釉	粗	不明	不明	焼締め	—	23
CT003	堀（古段階Ｂ）３区古段階検出面	—	碗不明	—	4.3	—		鉄釉（黒色）	密	大堀相馬	19c		31	23
CT004	堀（古段階Ｂ）３区古段階検出面	—	擂鉢	—	—	—		灰釉（緑褐色）	粗	岸	17c		—	23
CT005	堀（新段階）２区埋土２層	新段階①層	大鉢	—	12.5	—	白泥刷毛目文	透明釉	やや粗	唐津	17c後葉～18c前葉	目跡あり	31	23
CT006	堀（新段階）２区埋土２層	新段階①層	中碗不明	—	—	—	呉須絵？	灰釉（淡灰白色）	密	京・信楽	18c	貫入	—	23
CT007	堀（新段階）２区埋土３層	新段階②層	大鉢	38.2	—	—	印花　雷文花唐草文	長石釉	普通	唐津	17c後葉～18c前葉	三島手	31	23
CT008	堀（新段階）２区埋土３層	新段階②層	中型丸碗	—	—	—	上部灰釉（淡黄灰褐色）	腰部鉄釉（淡茶褐色）	やや粗	瀬戸・美濃	18c前葉～中葉	貫入腰錆碗	31	23
CT009	堀（新段階）２区埋土３層	新段階②層	中碗不明	—	—	—		灰釉（淡茶褐色）	密	肥前	17c後半～18c前半	貫入呉器手	—	23
CT010	堀（新段階）２区埋土３層	新段階②層	中碗不明	—	—	—		灰釉（淡灰白色）	密	肥前	17c後半～18c前半	貫入呉器手	—	23
CT011	堀（新段階）２区埋土３層	新段階②層	小碗	—	—	—		灰釉（淡青灰白色）	密	大堀相馬	18c末以降	貫入失透釉	—	23
CT012	堀（新段階）２区埋土３層	新段階②層	瓶類	—	—	—	緑釉流し掛け	灰釉（淡黄灰白色）	やや粗	瀬戸・美濃	17c前葉～中葉		—	23
CT013	堀（新段階）２区埋土５層	新段階④層	碗不明	—	5.4	—		不明	普通	不明	不明	受熱痕	31	23
CT014	堀（新段階）２区埋土５層	新段階④層	中碗不明	—	—	—	白化粧鉄絵（黒褐色）	透明釉	密	肥前	18c前半？		—	23
CT015	堀（新段階）２区埋土５層	新段階④層	不明	—	—	—		透明釉	密	不明	不明	軟質施釉陶器	—	23
CT016	堀（新段階）３区埋土４層	新段階②層	中碗不明	—	—	—		灰釉（淡青灰白色）	やや粗	小野相馬	18c	失透釉	—	23
CT017	堀（新段階）３区埋土	新段階埋土	碗不明	—	5.5	—		灰釉（淡黄灰白色）	密	肥前	17c後半～18c前半	貫入呉器手	31	23
CT018	堀（新段階）４区埋土	新段階埋土	中型丸碗	—	—	—		灰釉（暗青灰色）	やや粗	小野相馬？	18c前葉？	貫入	—	23
CT019	堀（新段階）４区埋土	新段階埋土	擂鉢	—	—	—		鉄釉（暗褐色）	粗	不明	17c？	瀬戸美濃の可能性あり	31	24
CT020	堀（新段階）４区埋土	新段階埋土	中型丸碗	—	5.2	—	見込み呉須絵	灰釉（淡黄灰白色）	普通	肥前	17c後半～18c前半	貫入呉器手	31	24
CT021	堀（新段階）４区埋土	新段階埋土	小中皿	—	6.7	—	鉄絵草文	長石釉	やや粗	美濃	17c前葉	志野織部貫入	31	24
CT022	13号溝埋土	—	中型丸碗	—	—	—		灰釉（淡灰白色）	密	肥前？	不明		—	24
CT023	４号溝b埋土	—	壺・甕類	18.0	—	—		鉄釉（暗茶褐色）	粗	不明	不明		31	24
CT024	５号溝埋土	—	大鉢	—	19.7	—	鉄絵草文	長石釉	やや粗	美濃	17c前葉	目跡1	32	24
CT025	５号溝埋土	—	小碗	6.7	2.6	4.0	呉須絵	灰釉（淡緑灰白色）	やや粗	瀬戸・美濃	18c末～19c前葉	貫入	32	24
CT026	５号溝裏込め	—	小中皿	—	4.5	—	外面灰釉（淡緑灰白色）	銅緑釉	やや粗	美濃	17c前葉	総織部灰釉貫入	32	24
CT027	５号溝底面溝埋土	—	土鍋	—	6.5	—		鉄釉（茶褐色）	普通	大堀相馬	19c	底部外面炭化物付着	—	24
CT028	１層・撹乱	—	小中皿	14.2	6.0	3.8	見込み印花文見込蛇の目釉剥	灰釉（淡青灰白色）	粗	小野相馬	18c	半失透釉	32	24
CT029	１層・撹乱	—	湯飲み	6.4	3.9	7.0	星文高台内銘「硬陶」	透明釉	密	–	明治後期以降	日本硬質陶器株式会社製	—	24

表22　武家屋敷地区第16地点出土便所埋め甕（近代）観察表
Tab.22　Notes on modern glazed ceramics used for toilet from BK16

登録番号	出土場所	器種	口径cm	底径cm	器高cm	文様	釉薬	胎土	生産地	製作年代	備考	図	図版
CT030	便所（近代）	甕	—	19.1	—	白釉流し掛け	鉄釉（黒色）	粗	堤	明治以降	便所内の埋め甕	—	31
CT031	便所（近代）	甕	—	19.3	—	白釉流し掛け	鉄釉（黒色）	粗	堤	明治以降	便所内の埋め甕	—	31
CT032	便所（近代）	甕	—	18.5	—	白釉流し掛け	鉄釉（黒色）	粗	堤	明治以降	便所内の埋め甕	—	31

表23　武家屋敷地区第16地点出土軒丸瓦観察表
Tab.23　Notes on round eaves tiles at BK16

登録番号	出土場所	瓦当文様	瓦当直径 cm	瓦当内径 cm	周縁幅 cm	釘穴	刻印	図	図版
T001	1層・撹乱	連珠三巴（右巻）	—	—	2.1	—	—	34	26
T002	1層・撹乱	連珠三巴（左巻）	—	—	2.3	—	—	34	26

表24　武家屋敷地区第16地点出土軒桟瓦観察表
Tab.24　Notes on eaves-pan tiles at BK16

登録番号	出土場所	瓦当小巴部分文様	小巴径 cm	瓦当垂れ部分文様	瓦当垂れ形状	瓦当垂長 cm	釘穴	備考	図	図版
T003	1号溝埋土	—	—	無文	中剣	5.0	—		—	—
T004	14号溝埋土	無文（石持）	8.3	—	—	—	—		—	—
T005	4号溝a埋土	無文（石持）	8.4	—	—	—	—		—	—
T006	4号溝b埋土	無文（石持）	8.4	—	—	—	—		—	—
T007	1号井戸掘方	—	—	無文	中剣	4.6	—		—	—
T008	瓦溜まり1（1層・撹乱）	—	—	無文	中剣	4.7	—	刻印あり（和田）	35	27
T009	瓦溜まり1（1層・撹乱）	無文（石持）	8.2	無文	中剣	4.9	—		—	—
T010	瓦溜まり1（1層・撹乱）	—	—	無文	中剣	4.9	—		—	—
T011	瓦溜まり1（1層・撹乱）	無文（石持）	7.8	—	—	—	—		—	—
T012	瓦溜まり1（1層・撹乱）	無文（石持）	8.5	—	—	—	—		—	—
T013	瓦溜まり1（1層・撹乱）	—	—	無文	中剣	—	—		—	—
T014	瓦溜まり1（1層・撹乱）	無文（石持）	8.2	—	—	—	—		—	—
T015	瓦溜まり1（1層・撹乱）	無文（石持）	8.0	—	—	—	—		—	—
T016	1層・撹乱	連珠三巴（右巻き）	—	—	—	—	—		34	26
T017	1層・撹乱	無文（石持）	8.1	無文	中剣	4.7	—		—	—
T018	1層・撹乱	無文（石持）	8.0	無文	中剣	4.6	—		—	—
T019	1層・撹乱	無文（万十）	8.4	—	—	—	—		—	—
T020	1層・撹乱	無文（石持）	7.8	—	—	—	—		—	—
T021	1層・撹乱	無文（石持）	8.2	無文	—	—	—		—	—
T022	1層・撹乱	無文（石持）	8.2	—	—	—	—		—	—
T023	1層・撹乱	無文（石持）	8.3	—	—	—	—		—	—
T024	1層・撹乱	—	—	無文	中剣	4.8	—		—	—

表25　武家屋敷地区第16地点出土軒平瓦類観察表
Tab.25　Notes on a kind of flat ezves tiles at BK16

登録番号	出土場所	瓦当文様	瓦当形状	瓦当垂長 cm	頭幅 cm	尻幅 cm	長さ cm	図	図版
T025	瓦溜まり1（1層・撹乱）	無文	中剣	4.8	—	—	—	—	—
T026	瓦溜まり1（1層・撹乱）	無文	中剣	4.4	—	—	—	—	—
T027	1層・撹乱	無文	中剣	4.8	—	—	—	—	—
T028	1層・撹乱	無文	中剣	4.8	—	—	—	—	—

表26　武家屋敷地区第16地点出土平瓦観察表
Tab.26　Notes on flat roof tiles at BK16

登録番号	出土場所	頭幅 cm	尻幅 cm	長さ cm	頭谷深 cm	尻谷深 cm	厚さ cm	溝	釘穴	刻印	図	図版
T029	1号井戸付属暗渠	(24.8)	(25.0)	26.3	2.8	3.2	1.9	—	—	—	—	—
T030	1号井戸付属暗渠	24.5	24.8	25.8	2.9	2.1	1.8	—	—	—	—	—
T031	1号井戸付属暗渠	—	25.0	25.8	—	2.9	2.0	—	—	—	—	—
T032	1号井戸付属暗渠	24.4	24.7	25.3	2.7	2.7	1.9	—	—	—	—	—

表27　武家屋敷地区第16地点出土桟瓦観察表
Tab.27　Notes on a kind of pan tiles at BK16

登録番号	出土場所	全長 cm	全幅 cm	きき幅 cm	きき足 cm	尻切込長 cm	頭切込幅 cm	釘穴	図	図版
T033	1号井戸付属暗渠	27.0	28.0	—	—	10.2	—	—	—	—
T034	1号井戸付属暗渠	27.0	—	—	—	—	4.5	—	—	—
T035	1層・撹乱	27.0	28.1	24.0	14.0	10.7	4.5		—	—
T036	1層・撹乱	26.8	27.4	24.1	17.8	5.8	3.3	1カ所	—	—

表28　武家屋敷地区第16地点出土刻印瓦観察表
Tab.28　Notes on carved seal tiles at BK16

登録番号	出土場所	瓦の種類	刻印	図	図版
T037	1号溝埋土2層	平瓦1類	刻印(十六)	35	27
T038	4号溝検出面	桟瓦	刻印(四宮)	35	27
T039	1号井戸付属暗渠	桟瓦	刻印(ナ)	35	27
T040	瓦溜り1（1層・撹乱）	平瓦1類	刻印(エ)	35	27
T041	瓦溜り1（1層・撹乱）	桟瓦類	刻印(治十七年高知縣和田類次)	35	27
T042	瓦溜り1（1層・撹乱）	桟瓦類	刻印あり	35	27
T008	瓦溜り1（1層・撹乱）	軒桟瓦	刻印あり(和田)	35	27
T043	1層・撹乱	平瓦1類	刻印あり	35	27

表29　武家屋敷地区第16地点出土古銭観察表
Tab.29　Notes on coins from BK16

登録番号	出土場所	堀大別埋土	銭名	外径 mm	穿径 mm	重量 g	備考	図	図版
MC001	堀（古段階C）4区　埋土1層	古段階③層	寛永通宝（古）	25.0	5	2.4	一部欠損　錆化顕著	36	29
MC002	3号溝平石下埋土	—	寛永通宝（新）	22.0	6	2.1	完形	36	29
MC003	1層・撹乱	—	寛永通宝（新）	22.0	6	1.9	完形　錆化顕著	36	29
MC004	2号溝埋土	—	半銭	22.0	—	3.4	完形 二百枚換一圓 大日本・明治十五年・1/2SEN	36	29
MC005	1層・撹乱	—	十銭	17.5	—	1.8	完形　大日本・明治四十二年・10SEN	36	29
MC006	1層・撹乱	—	五銭	19.0	4	2.4	完形　大日本　大正九年	36	29

表30　武家屋敷地区第16地点出土煙管観察表
Tab.30　Note on pipes at BK16

登録番号	出土場所	種類	全長 mm	ラウ特徴						吸口特徴		備考	図	図版
				全体形状	火皿形状	接合方法	首部アワセメ（ラウから見て）	火皿直径 mm	ラウ口直径 mm	全体形状	吸口直径 mm			
MO001	3号溝平石下埋土	延べ	128.5	ⅡC	2a	3	右	9.8	6.3×10.0	ⅡB	6.2	首部・吸口に灰吹に打ち付けた叩打痕あり	37	28
MO002	1層・撹乱	雁首	17.1	ⅡC	1a	3	右	10.1	9.5				37	28
MO003	1層・撹乱	雁首	56.2	ⅡC	1a	3	左	10.0	10.2			首部に灰吹に打ち付けた叩打痕あり	37	28

表31　武家屋敷地区第16地点出土金属製品観察表
Tab.31　Notes on metal implements at BK16

登録番号	出土場所	種類	材質	法量	備考	図	図版
MO004	1層・撹乱	認識票	銅	長径45.6mm　短径33.4mm　厚さ0.8mm	刻印「歩□四　機一　五□二」 表面の一部に布付着	—	29

第Ⅵ章　出土木材の樹種同定

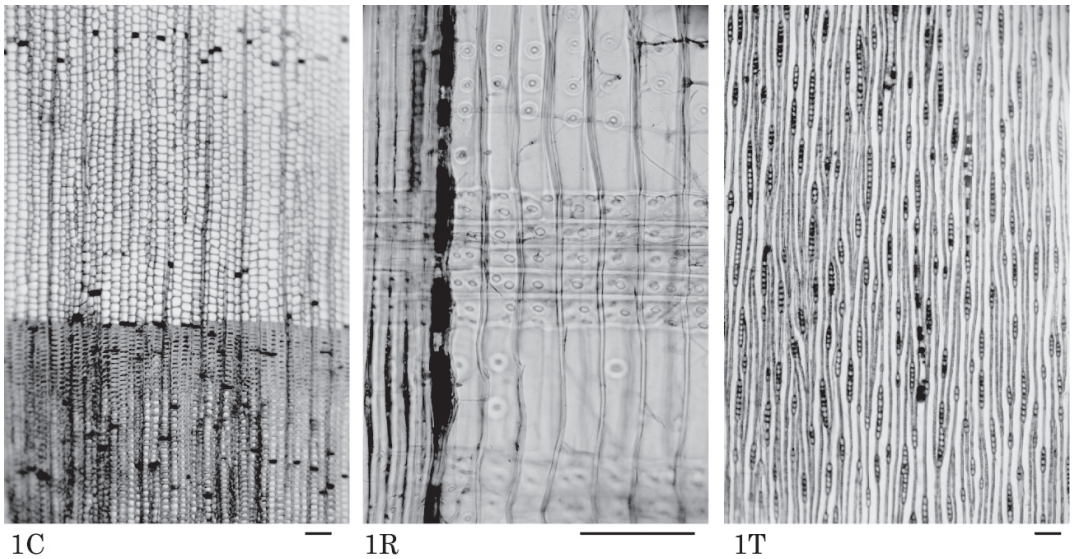
吉川純子（古代の森研究舎）

１．６号溝出土樹木の樹種同定

調査地は仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第16地点である。調査区南端の堀際と考えられる場所には溝状の遺構があり、溝中には当時植栽されたと考えられる木材根の痕跡が認められ残存材があった。そこで当時植栽された樹種を確認するため樹種同定を実施した。試料からはステンレス剃刀で横断面、放射断面、接線断面の3方向の切片を採取しプレパラートに封入して生物顕微鏡で観察・同定した。その結果、出土木材はスギであった。

スギ（*Cryptomeria japonica*（Linn. f.）D. Don）：早材から晩材への移行はやや急で晩材部が厚く年輪界が明瞭で晩材部を中心に黒い物質が充填された樹脂細胞が散在する。放射組織は単列で柔細胞のみからなり、分野壁孔は大きめの楕円形のスギ型で１分野に２個ある。採取された試料は下半部が広がりのある根材であるが切片を採取した場所は上半部の通直な部分であったため、細胞壁に根材の特徴は見られなかった。

仙台城二の丸北方武家屋敷の堀際に植栽されていた木材はスギであることが確認された。仙台市による北方武家屋敷地区調査では、花粉化石と大型植物化石の調査により、モミ属、スギ、マツ属複維管束亜属、オニグルミ、クリ、カエデ属、ウルシなど様々な樹木が植栽されていることが推測され、なかでも花粉分析では多地点でスギ花粉が優勢となることや遺構からスギ球果を出土しており、武家屋敷地区に多数のスギが植栽されていると考えられていた（吉川昌伸・吉川純子2012）。本報告で根株がスギと同定されたことにより敷地にスギが植栽されていたことが確定した。



1. スギ　C：横断面 R：放射断面 T：接線断面、スケールは 0.1mm

図38　６号溝出土木材の顕微鏡写真
Fig.38　Photomicrograph of a planting from No.6 dich at BK16

２．11号溝出土継手の樹種同定

調査地は仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第16地点である。11号溝中には当時利用されたと考えられる竹樋が配置され、樋の継手のうち３点は残存材があった。そこで当時継手として利用された樹種を確認するためこれら３点の樹種同定を実施した。試料からはステンレス剃刀で横断面、放射断面、接線断面の２方向の切片を採取しプレパラートに封入して生物顕微鏡で観察・同定した。その結果、出土木材は２点がスギ、１点はスギまたはヒノキ科であった。

以下に同定の根拠を記載する。

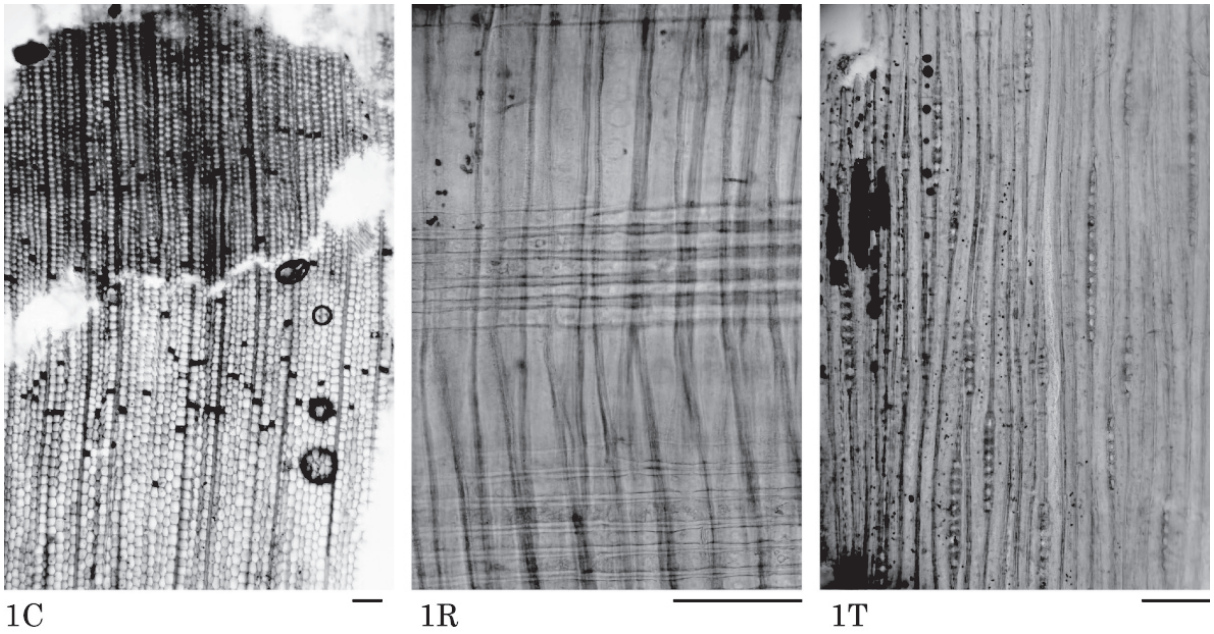
スギ（*Cryptomeria japonica*（Linn. f.）D. Don）：早材から晩材への移行はやや急で晩材部が厚く年輪界が明瞭で晩材部を中心に黒い物質が充填された樹脂細胞が接線方向にやや並ぶように散在する。放射組織は単列で柔細胞のみからなり、分野壁孔は大きめの楕円形のスギ型で１分野に２個ある。

表32　竹樋継手の樹種
Tab.32 List of tree species of joint part of bamboo conduit

試料	分類群
支柱B	スギ
支柱D	スギまたはヒノキ科
支柱E	スギ

スギまたはヒノキ科：早材から晩材への移行はやや急で晩材部が厚く年輪界が明瞭で晩材部を中心に黒い物質が充填された樹脂細胞が接線方向にやや並ぶように散在する。放射組織は単列で柔細胞のみからなり、分野壁孔は大きめの楕円形の孔が１分野に２個あるのは確認できるが外壁孔縁が溶けて形が確認できない。こうした特徴はスギ以外にヒノキ科の可能性が否定できない。

仙台城二の丸北方武家屋敷の溝中に設置されていた竹樋の支柱材は２点がスギ、１点がスギまたはヒノキ科であることが確認された。仙台市による仙台城跡の樹種同定結果では、扇坂トンネル部において試料40点のうちスギが22点と半数以上を占め、杭、板などの土木建築材に多く利用されている（吉川昌伸・吉川純子2012）。仙台城武家屋敷地区においてスギは様々な面でかなり利用頻度が高かったと考えられる。



1. スギ（支柱 B）　C：横断面 R: 放射断面 T：接線断面、スケールは 0.1mm

図39　11号溝出土継手の顕微鏡写真
Fig.39　Photomicrograph of the joint part of bamboo conduit from No.11 dich at BK16

第Ⅶ章　検出遺構の検討

１．Ⅰ期の様相

今回の調査では、調査区南部において、二の丸北側の堀と考えられる遺構を検出した。その堀は、堀（古段階）と堀（新段階）に分かれることが判明した。そして、その埋土の特徴から、それぞれの時期の堀の埋没過程をある程度説明することができた。堀（古段階）は、出土遺物から17世紀初頭から前葉頃にはすでに存在していた。同様に、堀（新段階）は、18世紀前半頃には機能していたが、18世紀中葉には水害により埋没していたことが判明した。そう考えると、17世紀中葉から後葉の間に、堀（古段階）は埋没したこととなる。考古学的に設定した時期に具体的な年代を比定するならば、Ⅰa期は17世紀前葉以前、Ⅰb期は17世紀中葉～後葉、Ⅰc期は18世紀前葉～中葉となる。今回、堀として調査を進めてきたが、本章では、その性格について詳細に検討する。

堀（古段階）の形状からすると、整備された堀というよりは、南方向に向かって傾斜する自然地形の沢と考えられる。堀（古段階A）と堀（古段階C）で一つの小さな谷を形成していたものと推定できる。そして、削平がなされているため不明ではあるが、Ⅰ８区付近が谷頭と捉えられる。一方で、堀（古段階B）は、別の谷であると考えられる。そのため、埋土の特徴に違いが現れたと推定できる。次段階の堀（新段階）は、その北側肩部を近代の５・14号溝により破壊されたと考えると、直線的な形状となる。

元禄・享保（1688～1763）年間に成立した『東奥老士夜話』の「千貫沢・筋違橋之事」には、御作事方の堀江伝七の言として、両方の橋に関して当初は板橋であったが、伊達家二代目の伊達忠宗の頃に土橋としたという記録が残されている（鈴木省三編1925所収）。沢を堰き止めて堀とする場合、板橋ではなく土橋であろうことから、土橋に改築した際に千貫沢を堰き止めた堀が整備されたと推定できる。そして、その時期は、寛永13～万治元（1636～1658）年の頃である。

最も古い絵図として、正保２（1645）年の『奥州仙台城絵図』がある（図４－１）。この絵図には、すでに堀として整備された千貫沢が描かれている。従って、千貫沢が整備されたのは、寛永13～正保２（1636～1645）年の頃と言える。この時期はⅠb期に相当すると考えられるが、調査から得た年代と矛盾していない。

このⅠb期の遺構群は、千貫沢整備の状況を考える上で、重要な資料であると言える。本調査区は大規模な削平を受けているため確実性にかけるが、本章では今回の調査で得られた資料を元として、Ⅰb期の遺構に関する一つの解釈を試みたい。

Ⅰb期の６号溝の植樹の痕跡は、非常に特徴的である。列状に杉の植樹をしていることから杉並木と考えられる。これを杉並木とするならば、あえてこの場を堀として沈める必要はない。そして、６号溝より南側から南側に向かって急激に落ち始める。それから堀（古段階）埋土最上面の土は固く締まり、乾裂が多数認められていることから、水を湛える堀が当初よりこの位置にあったとは考えづらい。これらのことから、堀（古段階）上面の場は、堀として水没させたのではなく筋違橋通そのものと捉え、６号溝を筋違橋通南端の並木と想定したい（図40）。筋違橋通北端は、明確な遺構があるわけではないので判然としない。しかし、遺構の分布状況や溝の軸方向等を考えると、12号溝近辺が想定できる。竹樋を埋設した11号溝や、用途不明のピット群は、屋敷地内の諸施設と考えられる。そして、当初整備された堀は、６号溝より南と推定する。また、先にも上げた『東奥老士夜話』の「千貫沢・筋違橋之事」の中に、土橋にした際に、橋の上に杉を植えたという記載がある。６号溝は土橋そのものではないが、その周囲に杉を植えて整備したということは十分に考えられる。以下では、以上の解釈を前提として、その後の変遷について考察する。

筋違橋通は、18世紀前葉までは機能していたが、18世紀中葉頃に水害により埋没してしまう。文献記録に残された18世紀中葉頃の自然災害としては、千貫橋付近の石垣が破損した元文４（1739）年の梅雨がある（藤澤敦2006）。その様子は、同年の『仙台城修復窺絵図』にて記載されている。そのほかにも、この時期の頃には、複

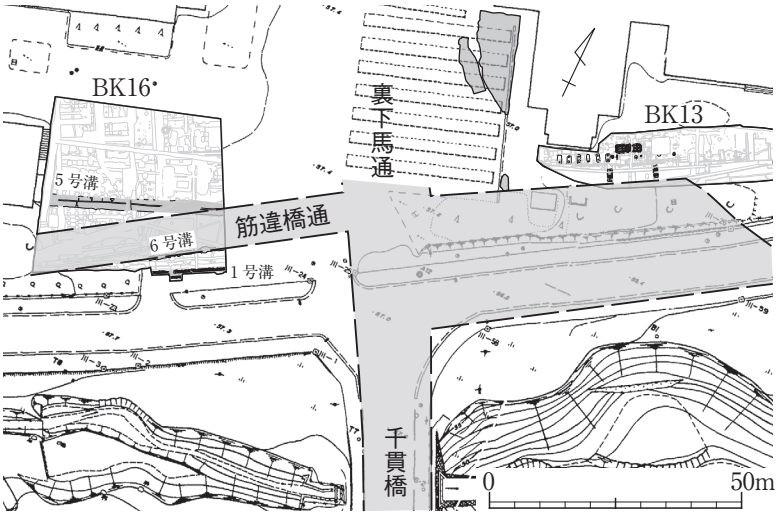


図40　武家屋敷地区第16地点付近のⅠb期における道路の推定
Fig.40　The reconstruction of the old road around BK16

数回の洪水などの水害が記録されている（齋藤鋭雄2004）。今回の堆積層がどの出来事によるものか判別は難しいが、そうした水害により筋違橋通は埋没したものと考えられる。

この想定された筋違橋通は、５号溝より北側で検出した地山面とはおおむね30cm程度の標高差が認められた。北側では近世の面が削平されていることから、当時の標高はより高かったと推定できる。そのような状況からすると、屋敷地が筋違橋通より一段高い場所に位置し、水害が発生した場合には、筋違橋通が埋没する程度で留めるように考えられていたのではなかろうか。そして、そう考えるならば、11号溝等は屋敷地内に位置するのではあるが、一段低いところに設置された排水施設という可能性も想定したい。

以前に調査した筋違橋通と裏下馬通交差点東側の武家屋敷地区第13地点（『調査報告』２）では、１号溝古段階北端を筋違橋通北端と推定し、その北側に「北下馬厩」が位置していたことを考察した。その際には指摘してなかったが、１号溝古段階と「北下馬厩」が位置していた面には、0.7～1m程度の段差が存在していた。このことを考えると、筋違橋通と屋敷地等の構造物が建てられる場所には、段差が存在していたことは指摘できる。

また、宝暦10～明和３（1760～66）年の『仙台城下絵図』（図５－８）では、堀の表現では無く、通常の沢として描かれている。そして、沢と筋違橋通の間には空白地が描かれている。一方で、その絵図の前後の時期の絵図では、通常の堀として表現されている。絵図の正確性が問題とはなるが、水害等の出来事により、堀が埋まってしまう時期もあったものと想定する。その際には、筋違橋通も埋没していたのではなかろうか。その後の様相は、削平されているため不明ではあるが、埋没した筋違橋通の上部に新規の筋違橋通が復旧されていたと推定する。

今回の考古学的調査では、堀と想定し、古段階と新段階に区分して調査・報告を進めてきた。しかし、その後の整理や絵図・文献等の検討から、堀（古段階）は自然の沢であり、堀（新段階）は筋違橋通が水害によって埋没したものと解釈した。堀（新段階）の北側が直線的なのは、道路筋であるからであろう。また、このように想定した場合、堀が整備される以前、つまり沢が埋まる以前の筋違橋通の位置は、今回の調査区の北側に位置していたものと考えられる。

もちろん、本調査区北側の削平された部分に一貫して筋違橋通が位置し、道筋の変更が一切無かったということも想定できる。堀（古段階）上面に関しては、堀北側に段差を構築することにより、通常は単なる開地であるが、大雨の際に溢水した場所として整備したと捉えることも可能であろう。しかし、並木のあるⅠb期の遺構群の存在や、堀（古段階）最上面における固く締まった表面や全体に広がる乾裂などの状況、そして最古の絵図（正保２（1645）年）においても、当初から水を湛えた堀として表現されていることから、そのように断言することも難しい。今後の周辺の調査事例を積み重ねて、確実な考古学的証拠により判断したい。

２.Ⅱ期・Ⅲ期の様相

Ⅱ期の土地の使われ方は、検出遺構が溝のみであるので不明である。その中でも５号溝は、その機能から察するに、造成した際に水が湧きやすく地盤が脆弱な堀（新段階）埋土の端に構築したものであろう。そして、５号溝の規模からすると、道路との境であった可能性がある。その後のⅢa期においても、５号溝と同じ場所に14号溝を再構築し、それより北側に建物を建てている。これらのことから、５・14号溝はⅡa～Ⅲa期における筋違橋通北端であることは想定できる。もちろん、この筋違橋通の位置が造成前まで遡るかどうかは不明である。

Ⅱ期に関しては、今回の調査では建物の存在が確認できなかった。明治初期から第二師団設置以前の絵図（図５－11～13）でも、本調査区の周辺には建物が全く描かれていない。本調査区で明らかにしたように、おそらくⅡ期には、実際に規模の大きな建物は構築されていなかったものと考えられる。今回の調査区から東側に位置する第４地点の調査（『年報』13）の際には、明治初頭に畑として利用された層（４層）を確認している。今回の調査区では、畑などの痕跡は見当たっておらず、畑地として利用されていたかどうかは不明である。

川内北地区では、明治21（1888）年第二師団設置の前、明治14～16（1881～83）年に川内地区の民有地を買収などしたりし、師団司令部周辺に関連施設の造営を推し進めたことが指摘されている（加藤宏2011）。明治15（1882）年の地形図（図５－13）でも、川内地区にはそれ以前には記載されていなかった「陸軍省用地」の文字が明記されている。これ以後に大規模な造成が始まる。

Ⅱ期の５号溝は、規模の大きな排水用の溝であると考えられる。第二師団は、こうした排水溝を当初に敷地端に構築し、その後の造成作業を進めたのではないかと推定する。この場所では、以前は畑地として利用されていた可能性もあるが、Ⅱ期当初には、そのような層を含めて地表面から１m程の削平が行われ、整地されたものと考えられる。この第二師団による初期の整備期をⅡ期と考えたい。

また、第13地点の報告書（『調査報告』２）で検討したように、筋違橋通と裏下馬通の交差点東側に設置されていた厩建物は、幕末に撤去されている。そして、それ以後の絵図・地形図、例えば明治８（1875）年『宮城郡仙台町地引図』（図５－11）などでは、その厩建物が設置されていた場所は、屋敷地内に取り込まれている。それに伴い、筋違橋通の北端は裏下馬通の東西で直線的に通るように表現されている。これらのことからすると、幕末の厩撤去時に、道路なども整備された可能性が考えられる。この幕末から明治初頭の時期を、第二師団の造成以前として考え、Ⅱa期より前の出来事として推定する。本調査区におけるこの時期の筋違橋通りは不明であるが、その後の展開を考えるならば、５号溝とほぼ同じ場所に位置していたのではないだろうか。

Ⅲ期は、第二師団設置以後の時期である。Ⅲa期になると、規模の大きな礎石の建物が建設されている。これらの建物は、その規模や構造から明治38（1905）年地形図（図３－２）に表記されている歩兵第29連隊あるいはその以前に位置していた歩兵第17連隊における建物であろうことが推察される。そして、次のⅢb期になると、14号溝の上にレンガ造りの建物が構築され、１号溝近辺まで伸びる。そして、1号溝によって南側が区画されている（図12）。つまり、Ⅲb期になると、筋違橋通北端が南に移る様相が見て取れる。

昭和３（1928）年地形図（図３－３）では、筋違橋通の様相が変わり、大堀通交差点から西側付近までの筋違橋通が直線的となっている。そして、大堀通交差点近辺から西側の堀がほぼ消失している。この件については、第12地点の報告書（BK12：『年報』11）に考察がなされており、この時期に堀の大規模な埋め立て等が行われたことが指摘されている。この昭和３（1928）年地形図が描かれた以前の大正14（1925）年には歩兵第29連隊が若松市に転出し、昭和２（1927）年にはその跡地に陸軍教導学校が開設された。この筋違橋通の改変は、こうした動きと連動しているものと推察できる。そして、調査区西半に位置するレンガ造りの建物は、その場所などから、昭和３（1928）年地形図（図３－３）に描かれている陸軍教導学校の建物（「建物b」）と推定できる。これらの様相からすると、筋違橋通を作り変えた際に、敷地を拡幅する目的で、本調査区周辺における筋違橋通をやや南側に移したのではないかと推測できる。

引用・参考文献

東北大学埋蔵文化財調査室・仙台市教育委員会の報告書に関しては、直接引用したもの以外は省略した。

【東北大学埋蔵文化財調査室刊行報告書関連】

澁谷悠子　2011 「仙台城下絵図にみる屋敷拝領者変遷と階層性」『仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第11地点・第12地点』東北大学埋蔵文化財調査室調査報告１

東北大学埋蔵文化財調査委員会　1985 『東北大学埋蔵文化財調査年報』１

東北大学埋蔵文化財調査委員会　1990 『東北大学埋蔵文化財調査年報』３

東北大学埋蔵文化財調査委員会　1993 『東北大学埋蔵文化財調査年報』６

東北大学埋蔵文化財調査委員会　1994 『東北大学埋蔵文化財調査年報』７

東北大学埋蔵文化財調査研究センター　1997 『東北大学埋蔵文化財調査年報』８

東北大学埋蔵文化財調査研究センター　1998 『東北大学埋蔵文化財調査年報』９

東北大学埋蔵文化財調査研究センター　1999 『東北大学埋蔵文化財調査年報』11

東北大学埋蔵文化財調査研究センター　2000 『東北大学埋蔵文化財調査年報』13

東北大学埋蔵文化財調査研究センター　2001 『東北大学埋蔵文化財調査年報』14

東北大学埋蔵文化財調査研究センター　2005 『東北大学埋蔵文化財調査年報』18

東北大学埋蔵文化財調査研究センター　2006～2010 『東北大学埋蔵文化財調査年報』19－１・２・３・４・５

東北大学埋蔵文化財調査室　2007 『東北大学埋蔵文化財調査年報』21

東北大学埋蔵文化財調査室　2010 『東北大学埋蔵文化財調査年報』24

東北大学埋蔵文化財調査室　2011 『仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第11地点・第12地点』東北大学埋蔵文化財調査室調査報告１

東北大学埋蔵文化財調査室　2013 『仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第13地点』東北大学埋蔵文化財調査室調査報告２

【仙台市教育委員会刊行報告書関連】

佐藤　洋ほか　1985 『仙台城三の丸跡』仙台市文化財調査報告書第78集

佐藤　淳ほか　2008 『若林城跡－第５次発掘調査報告書－』仙台市文化財調査報告書323

原河英二ほか　2009 『仙台城跡』仙台市文化財調査報告書342

佐藤　洋・在川宏志　2009 『仙台城跡９－平成20年度調査報告書－』仙台市文化財調査報告書348

金森安孝・渡部　紀　2009 『仙台城跡第１次調査　第１分冊本文編』仙台市文化財調査報告書349

佐藤　淳ほか　2010 『若林城跡－第８次・第９次発掘調査報告書－』仙台市文化財調査報告書377

吉川昌伸・吉川純子　2012 「扇坂トンネル上段部と亀岡トンネル進入路部の植物化石」『仙台城跡ほか』仙台市文化財調査報告書402　pp.204-216

【その他の報告書・論文等（50音順）】

青山礼志　1982 『新訂貨幣手帳』　ボナンザ

阿刀田令造　1976（初出1936）『仙台城下絵図の研究』斎藤報恩会博物館図書部研究報告４　東洋書院

江戸遺跡研究会編　2001 『図説江戸考古学研究事典』　柏書房

大橋康二　1994 『古伊万里の文様　初期肥前陶磁器を中心に』

小川啓司　1974 『そば猪口絵柄事典』

加藤　宏　2011 『旧第二師団軍事施設配置に関する歴史的研究』（自費出版）
関西陶磁史研究会　2006 『京焼の成立と展開－押小路、粟田口、御室－』
喜多川守貞著、朝倉治彦・柏川修一校訂編集　1992 『守貞謾稿』第一～五巻　東京堂出版
九州近世陶磁学会　2000 『九州陶磁の編年』
京都市埋蔵文化財研究所　2004 『平安京左京北辺四坊第二分冊（公家町）』
小池一之ほか　2005『日本の地形３　東北』 東京大学出版会
古泉　弘　1987 『江戸の考古学』考古学ライブラリー48　ニューサイエンス社
小林　克　2000 「あかりの道具研究の方向」『江戸文化の考古学』 吉川弘文館　pp.221-242
小林清春監修　1994 『絵図・地図で見る仙台』 今野印刷
齋藤鋭雄　2004 「城下の災害」『仙台市史　通史編５　近世３』 仙台市　pp.131-137
佐賀県立九州陶磁文化館　1990 『柴田コレクション展Ⅰ－初期伊万里から柿右衛門へ－』
佐賀県立九州陶磁文化館　1991 『柴田コレクション展Ⅱ』
佐賀県立九州陶磁文化館　1993 『柴田コレクション展Ⅲ』
佐賀県立九州陶磁文化館　1995 『柴田コレクションⅣ　－古伊万里様式の成立と展開－』
佐賀県立九州陶磁文化館　1997 『柴田コレクションⅤ　－延宝様式の成立と展開－』
佐賀県立九州陶磁文化館　1998 『柴田コレクションⅥ　－江戸の技術と装飾技法－』
佐賀県立九州陶磁文化館　1999 『柿右衛門－その様式の全容－』
坂田　啓編　1995 『私本　仙台藩士事典』 創栄社
作者不明 『東奥老士夜話』（鈴木省三編　1925 『仙台叢書』第８巻　仙台叢書刊行会　所収：1972　平重道解題　宝文堂にて復刻）
鈴田由紀夫　1995 「17世紀末から19世紀中葉の銘款と見込み文様」『柴田コレクションⅣ－古伊万里様式の成立と展開』 pp.272-279
瀬戸市史編纂委員会　1993 『瀬戸市史　陶磁史篇四』
瀬戸市史編纂委員会　1998 『瀬戸市史　陶磁史篇六』
瀬戸市文化振興財団埋蔵文化財センター　2006 『江戸時代のやきもの－生産と流通－』記念講演会・シンポジウム資料集
仙台市科学館編　1985 『仙台市地形区分図』 仙台市科学館
仙台市史編さん委員会編　2006 『仙台市史　特別編７　城館』 仙台市
仙台市史編さん委員会編　2008 『仙台市史通史編６近代１』 仙台市
東北大学百年史編集委員会編　2003 『東北大学百年史四　部局史一』 東北大学
東北歴史資料館　1995 『仙台・堤のやきもの』
土岐市美濃陶磁歴史館　1996 『特別展堺衆のやきもの　堺環濠都市遺跡出土の桃山陶磁』
土岐市美濃陶磁歴史館　2005 『第17回織部の日特別展　織部様式の成立と展開』
土岐市美濃陶磁歴史館　2006 『第18回織部の日特別展　天下人とやきもの』
土岐市美濃陶磁歴史館　2007 『第19回織部の日特別展 ポスト織部の時代 元和寛永の茶陶』
土岐市美濃陶磁歴史館　2008 『第20回織部の日特別展　桃山時代の茶陶生産』
土岐市美濃陶磁歴史館　2010 『第22回織部の日特別展　公と武　京と江戸のやきものの文化』
根津美術館　2002 『知られざる唐津　二彩・単色釉・三島手』
藤澤　敦　2006 「三　元和・寛永前期の様相」『仙台市史　特別編７』 仙台市　pp.253-259
山本忠尚　2001 『和英対照日本考古学用語辞典』 東京美術
吉岡一男編　2005 『絵図・地図で見る仙台　第二輯』 今野印刷

RESEARCH REPORTS
IN ARCHAEOLOGY ON THE CAMPUS OF TOHOKU UNIVERSITY
No.5 MARCH 2016

The Archaeological Research office
On the Campus, Tohoku University
2-1-1, Katahira, Aoba-ku Sendai-shi, Miyagi,
980-8577, JAPAN

Summary

On the campus of Tohoku University a lot of archaeological sites are known. Among them, Sendai Castle is the most famous and largest one. Almost all of the south part of Kawauchi campus is located on its secondary citadel area. The north part of Kawauchi campus is located on the sites of *samurai* residences.

In Japan, if existing circumstances need to be changed in the known site area, excavation research on the buried cultural properties must be carried out. The Office mainly carries out salvage excavations of archaeological sites on campus.

This report carries the research result of salvage excavations of BK16 (Loc.16 of *samurai* residences located at the side of north outer moat of *Ninomaru*, i.e. Secondary Citadel of Sendai Castle), on Kawauchi campus, which was conducted by the Archaeological Research Office on the Campus of Tohoku University in 2013.

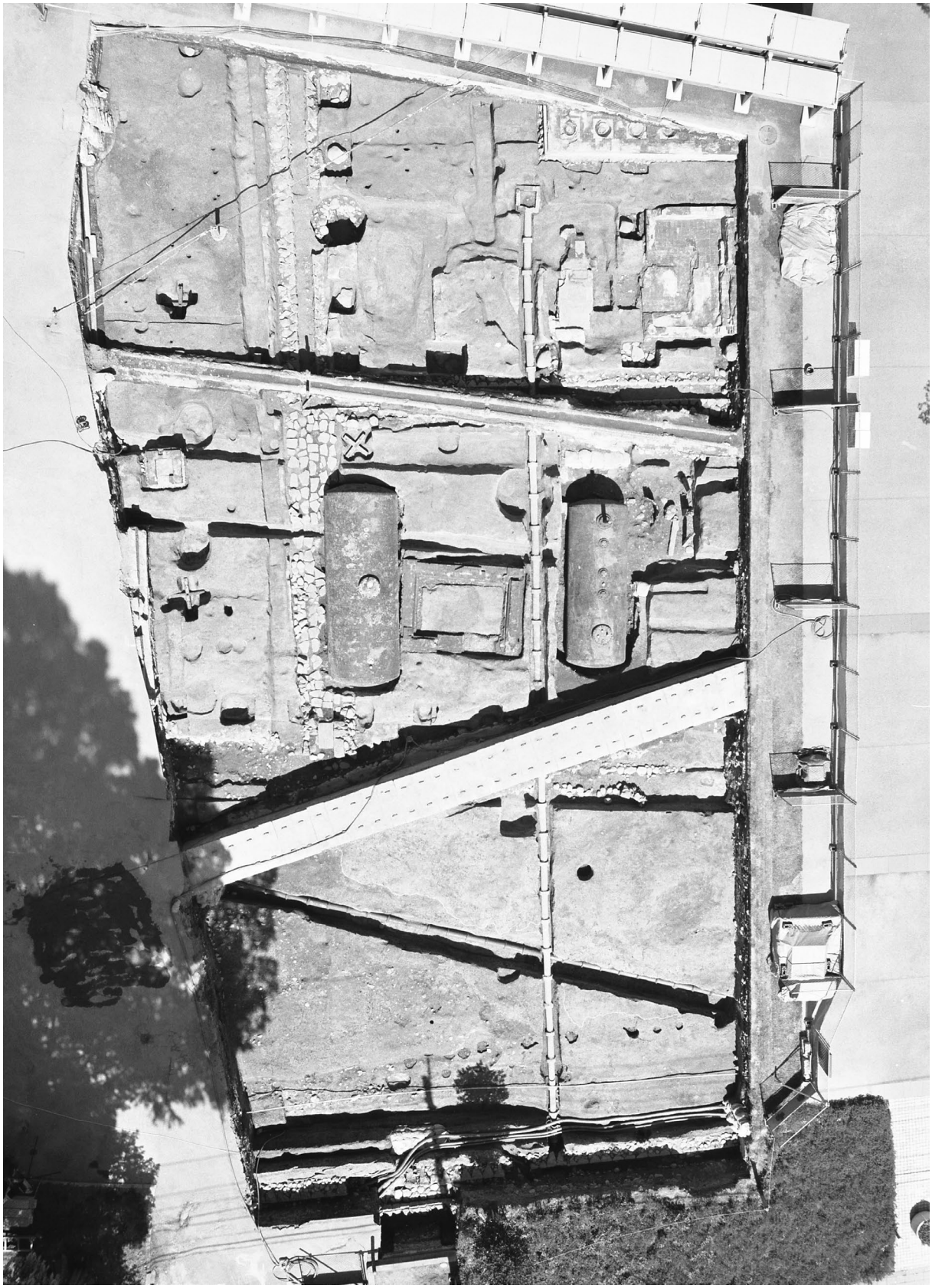
There is a large swamp stream on the south side of this excavation area. The swamp stream is called *Senganzawa* and has been located nearly in the same situation since Edo period. In comparison with old maps in Edo period, this excavation area used to be at the north side of *Senganzawa* swamp stream, at the west side of the crossroads of *Sujikaibashi* Street and *Urageba* Avenue. It was the place around Sujikaibashi Street and a north moat of *Ninomaru*.

In this area, the Imperial Japanese army was stationed from the Meiji period until the end of the Second World War. During this period, almost all of the excavation area was leveled in a large scale and were developed to flat places. After that, many buildings, ditches and wells for the army were constructed and produced. A number of porcelain, ceramics, metal implements and glasses belonging to the Meiji period were discovered from these structures.

Almost all archaeological structural remains belonging to Edo period were taken away and destroyed in this development by the Imperial Japanese army. However, relatively deep structural remains such as a moat, some ditches and a well feature exceptionally remained in situ. Some remains of porcelain, ceramics and other artifacts belonging to Edo period were found here for the same reason.

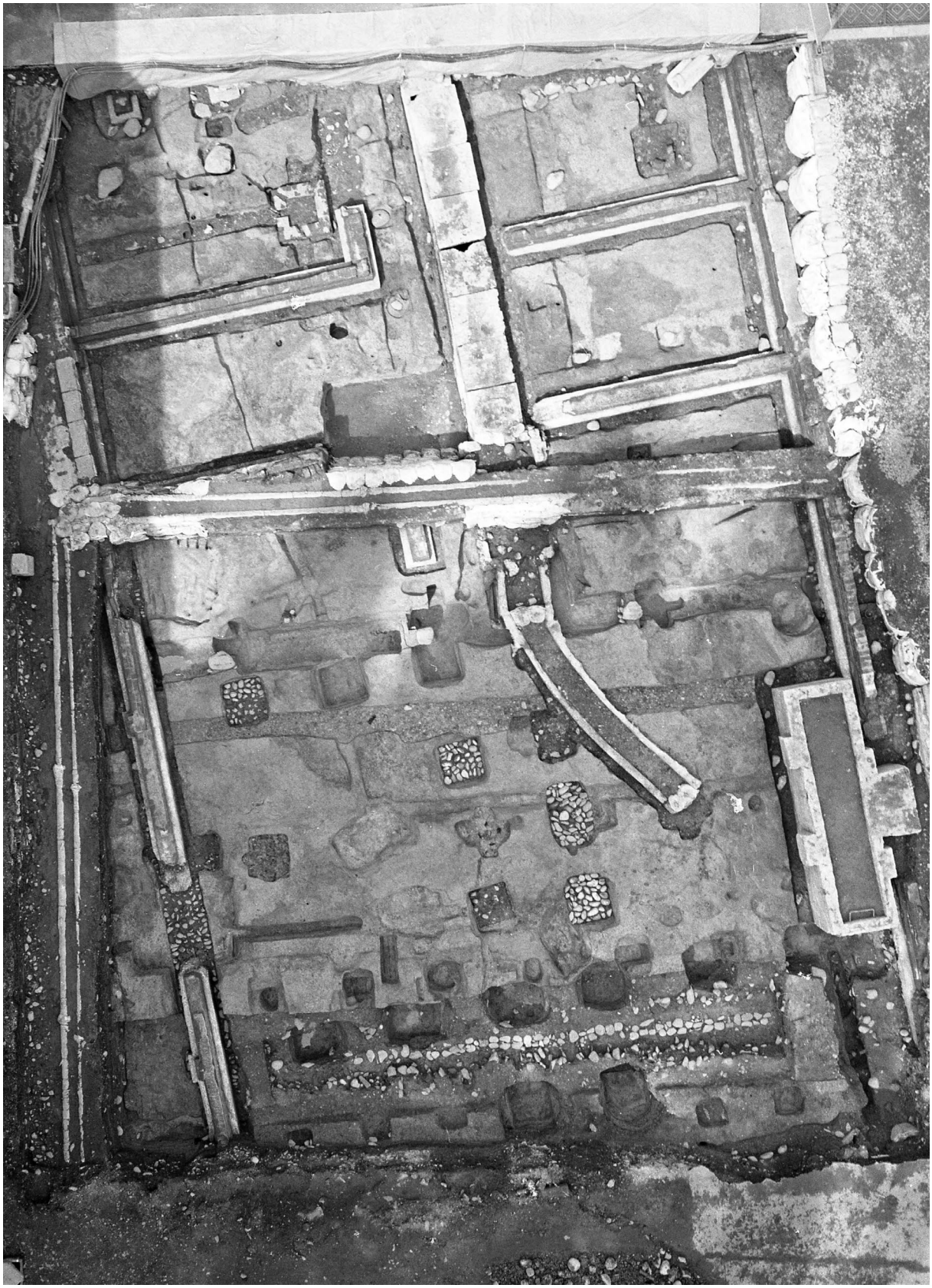
Structural features belonging to Edo period can be classified into two stages, namely the first stage and the second stage based on the evidence of sedimentary layers. The first stage was the period of a natural swamp stream. This place had not yet been constructed as a part of the *Ninomaru* citadel and its samurai residences. The second stage was the period organized as *Ninomaru* and residences. It is indicated that the deposits of these structural remains were caused by some deluges, and then Sujikaibashi Street was buried. Judging from the associated artifacts, the first stage was from the beginning to the early stage of the 17th century. The second stage was from the beginning to the middle of the 18th century.

写　真　図　版



１・２区（2013年８月28日撮影：上が北）

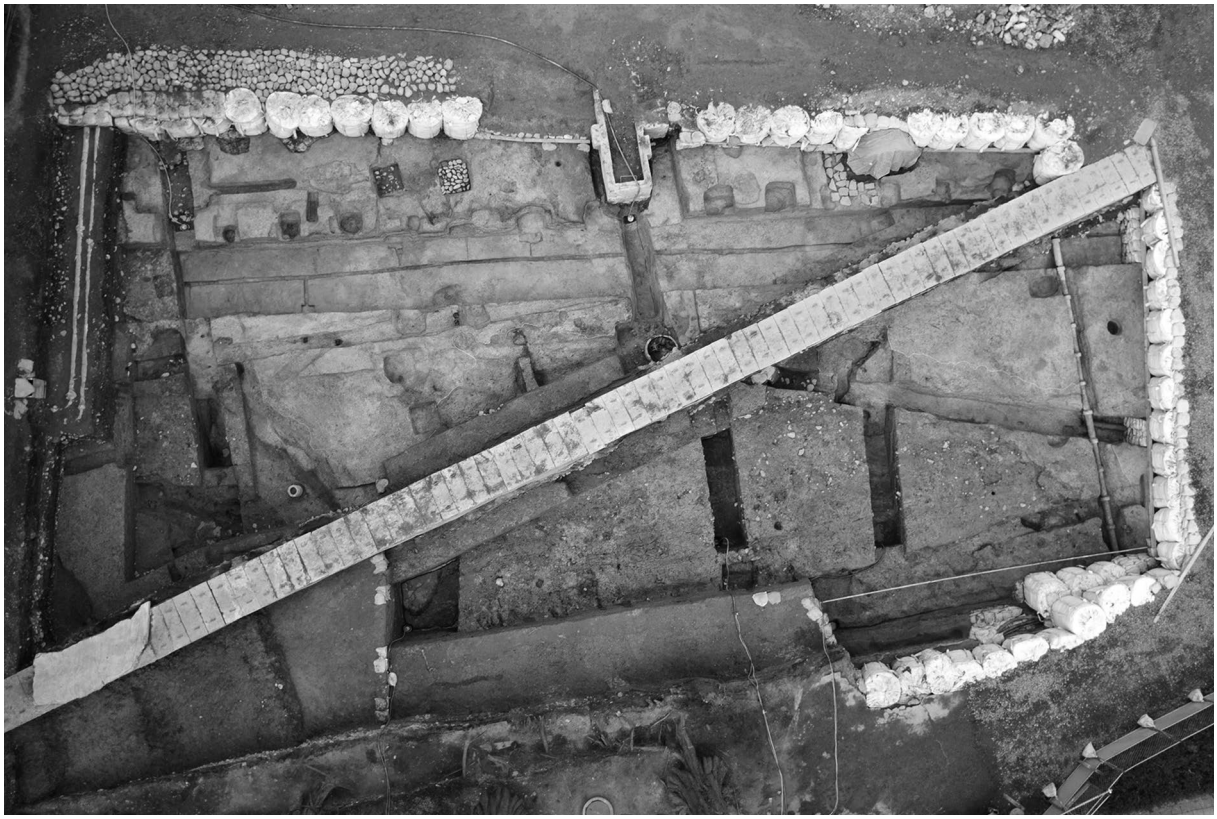
図版１　武家屋敷地区第16地点全景（1）
Pl.1　Views of BK16 (1)



３区（南端部以外：2013年10月5日撮影：上が北）

図版２　武家屋敷地区第16地点全景（2）
Pl.2　Views of BK16 (2)

1．堀（新段階）古段階検出状況（2013年11月20日撮影：上が北）



2．調査終了状況（2013年12月11日撮影：上が北）

図版３　武家屋敷地区第16地点全景（3）
Pl.3　Views of BK16 (3)

1．調査区東壁土層断面（B列）（西から）

2．調査区東壁土層断面（C列）（西から）

3．調査区東壁土層断面（D列）（西から）

4．調査区東壁土層断面（E列）（西から）

5．調査区東壁土層断面（F列）（西から）

6．調査区東壁土層断面（G列）（西から）

7．調査区東壁土層断面（H列）（西から）

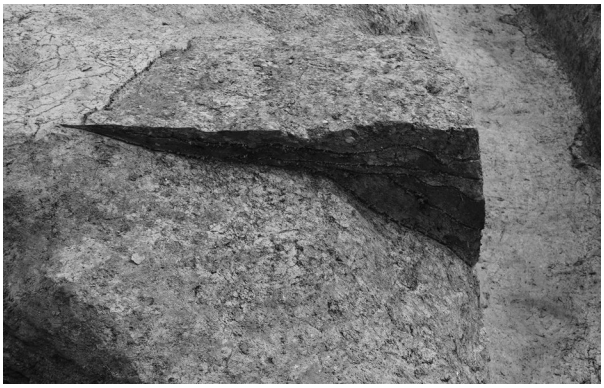
8．調査区東壁土層断面（I列）（西から）

図版４　武家屋敷地区第16地点の遺構（1）
Pl.4　Features at BK16 (1)

1．調査区東壁土層断面（J列）（西から）

2．調査区東壁土層断面（K・L列）（西から）

3．堀（古段階C）東側調査区東壁断面全景（西から）



4．堀（古段階C）東側調査区東壁断面北側（西から）

5．堀（新段階）完掘、堀（古段階C）検出（２区：北西から）

図版５　武家屋敷地区第16地点の遺構（2）
Pl.5　Features at BK16 (2)

1．堀（古段階）（３・４区）検出（西から）

2．堀（古段階B）調査区東壁断面（西から）

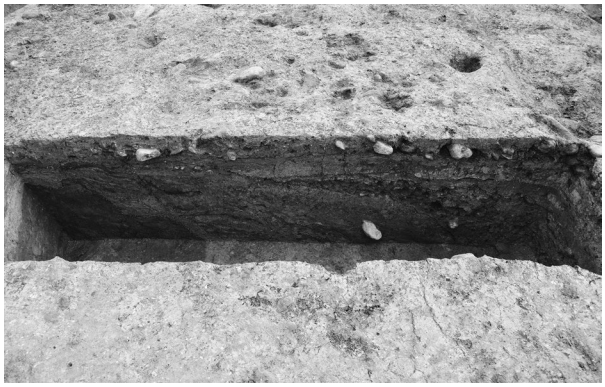
図版６　武家屋敷地区第16地点の遺構（3）
Pl.6　Features of BK16 (3)

1．堀（古段階C）東側調査区東壁断面中央（西から）

2．堀（古段階C）東側調査区東壁断面南側（西から）

3．堀（古段階A）断面（東から）

4．堀（古段階A）完掘（東から）



5．堀（古段階C）中央調査区東壁断面全景（西から）

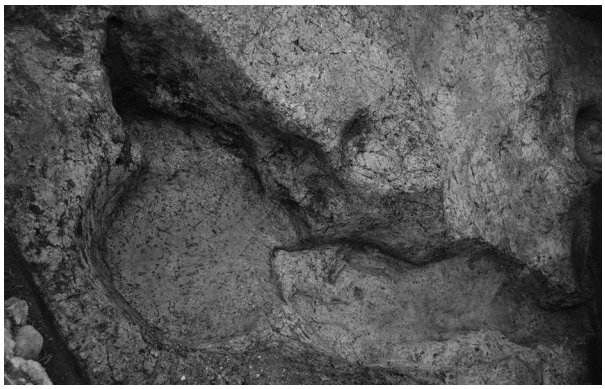
6．堀（古段階C）中央調査区東壁断面北側（西から）

7．堀（古段階C）中央調査区東壁断面南側（西から）

図版７　武家屋敷地区第16地点の遺構（4）
Pl.7　Features at BK16 (4)

1．堀（古段階C）西側調査区西壁断面（東から）

2．1号土坑断面（東から）



3．1号土坑完掘（北西から）

4．13号溝断面（東から）

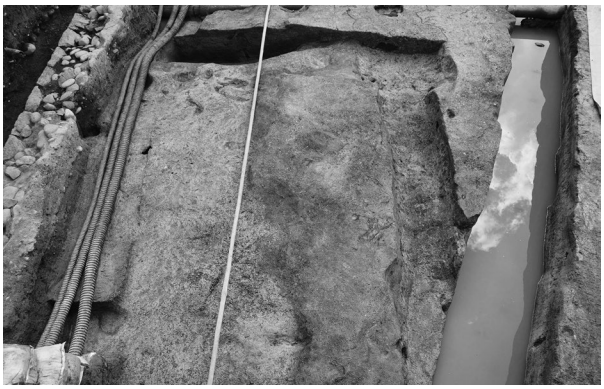
5．13号溝完掘（南から）

6．6号溝・堀（K3区西壁）断面（東から）

7．6号溝検出（東から）

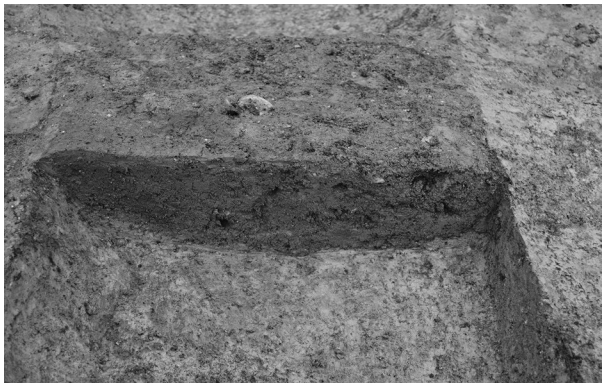
図版８　武家屋敷地区第16地点の遺構（5）
Pl.8　Features at BK16 (5)

1．6号溝完掘（東から）



2．6号溝・堀（K2・3区）完掘（東から）

3．6号溝・堀（L7区調査区西壁）断面（東から）



4．10号溝断面（東から）

6．11号溝竹樋継手D、E断面（東から）

5．10号溝完掘（西から）

図版９　武家屋敷地区第16地点の遺構（6）
Pl.9　Features at BK16 (6)

1．11号溝竹樋検出（西から）

2．11号溝完掘（西から）

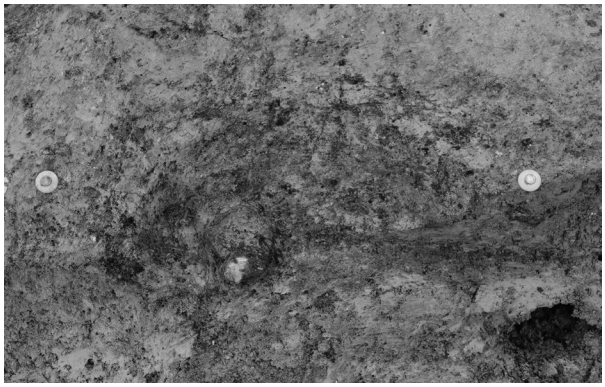
3．11号溝竹樋継手B断面（東から）

4．12号溝断面（東から）

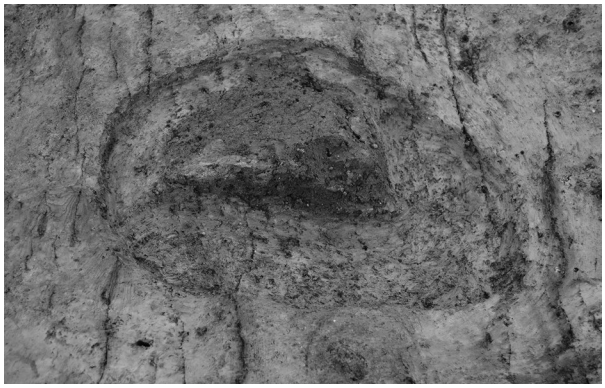
5．12号溝完掘（西から）

図版10　武家屋敷地区第16地点の遺構（7）
Pl.10　Features at BK16 (7)

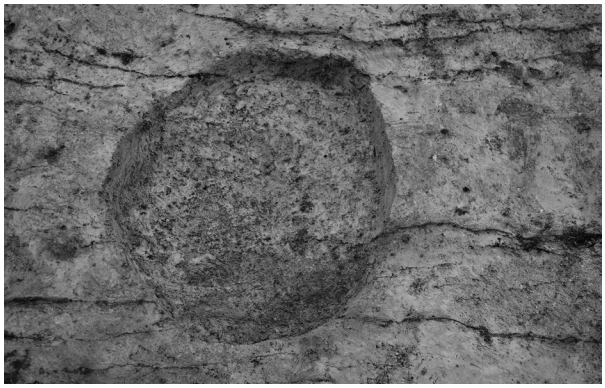
1．ピット７断面（北から）



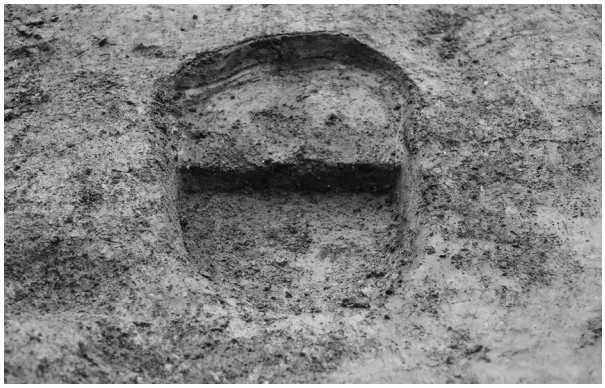
2．ピット７完掘（北から）



3．ピット９断面（東から）



4．ピット９完掘（南から）



5．ピット10断面（南から）

6．ピット10完掘（南から）

7．ピット11断面（南から）

8．ピット11完掘（南から）

図版11　武家屋敷地区第16地点の遺構（8）
Pl.11　Features at BK16 (8)

1．堀（新段階）２区検出全景（北西から）

2．３区南・４区撹乱除去状況（北西から）

図版12　武家屋敷地区第16地点の遺構（9）
Pl.12　Features at BK16 (9)

1．3区南・4区撹乱除去状況（南西から）

2．堀（新段階）5列断面全景（北西から）

図版13　武家屋敷地区第16地点の遺構（10）
Pl.13　Features at BK16 (10)

1．堀（新段階）（５列北側）断面北側（西から）

2．堀（新段階）（５列北側）断面中央（西から）

3．堀（新段階）（５列北側）断面南側（西から）

4．堀（新段階）（５列南側）断面北側（西から）

5．堀（新段階）（５列南側）断面中央（西から）

6．堀（新段階）（５列南側）断面南側（西から）

7．堀（新段階）（８列）断面北側（西から）

8．堀（新段階）（８列）断面中央（西から）

図版14　武家屋敷地区第16地点の遺構（11）
Pl.14　Features at BK16 (11)

1．堀（新段階）（８列）断面全景（西から）

2．堀（新段階）（８列）断面南側（西から）

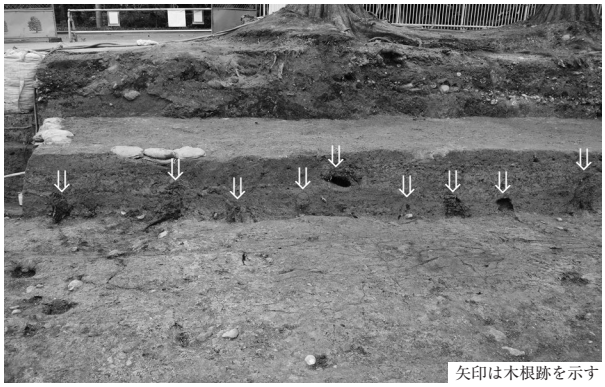
3．堀（新段階）（H8区）断面（西から）

4．堀（新段階）（13列）断面北側（西から）

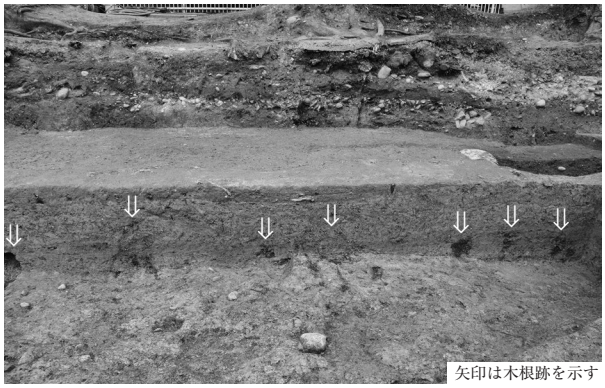
5．堀（新段階）（13列）断面中央（西から）

図版15　武家屋敷地区第16地点の遺構（12）
Pl.15　Features at BK16 (12)

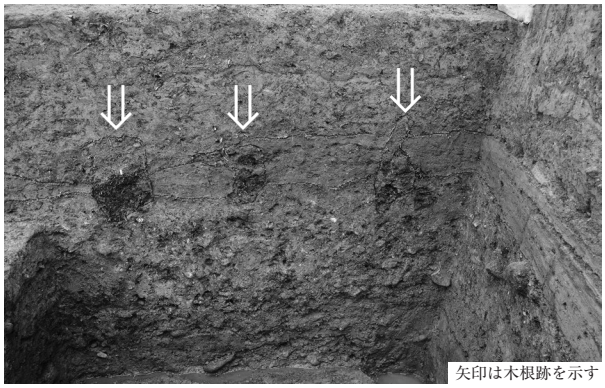
1．堀（新段階）（13列）断面南側（西から）



2．堀（新段階）（L8・9区）南壁断面東側（北から）



3．堀（新段階）（L10・11区）南壁断面西側（北から）



4．堀（新段階）（L11区）南壁断面（北から）

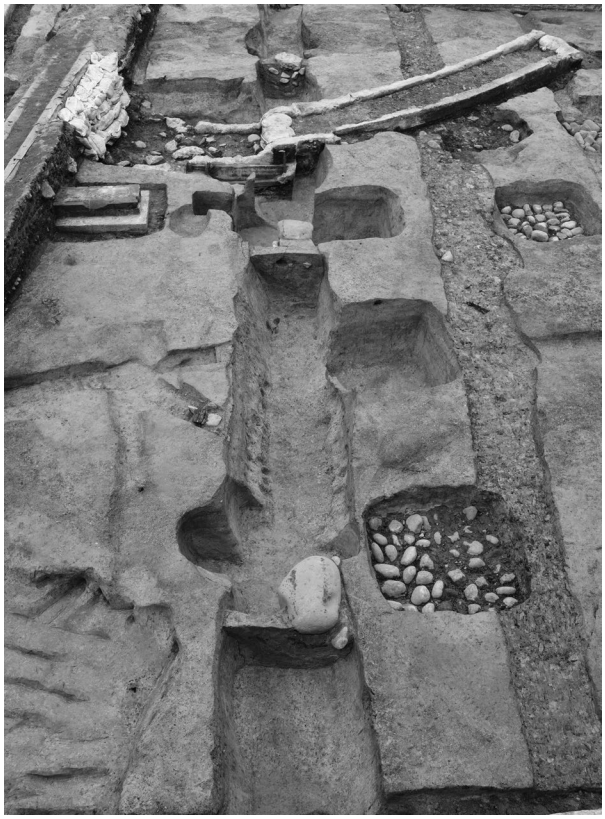
5．堀（新段階）（G3区）断面（西から）

6．2号井戸石組検出（南から）

7．2号井戸断面（南から）

8．5・14号溝（H・I13区）断面（西から）

図版16　武家屋敷地区第16地点の遺構（13）
Pl.16　Features at BK16 (13)



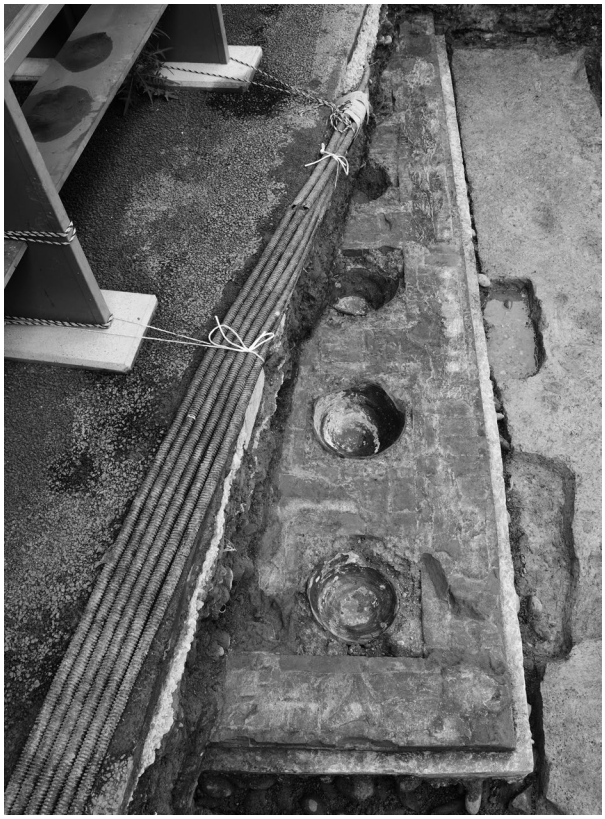
1．4号溝（E9区以西）完掘（西から）

2．5号溝（2区）底面溝検出（東から）

3．5号溝（1・2区）完掘（東から）

4．5号溝（1・3区）完掘（東から）

図版17　武家屋敷地区第16地点の遺構（14）
Pl.17　Features at BK16 (14)



1．便所検出（西から）

2．5・14号溝（H8区）断面（西から）

3．1号井戸暗渠検出（東から）

4．1号井戸掘り下げ状況（東から）

5．西側木樋完掘（南西から）

6．1号溝（L5区）検出（西から）

図版18　武家屋敷地区第16地点の遺構（15）
Pl.18　Features at BK16 (15)

1．2号溝周辺（D3区）断面（西から）

2．3号溝（調査区北壁）断面（南から）

3．3号溝（C7区）西側石組（東から）

4．3号溝（B8区）西側石組（東から）

5．1号溝検出（東から）

6．3号溝全景（南から）

図版19　武家屋敷地区第16地点の遺構（16）
Pl.19　Features at BK16 (16)

1．2号溝全景（東から）

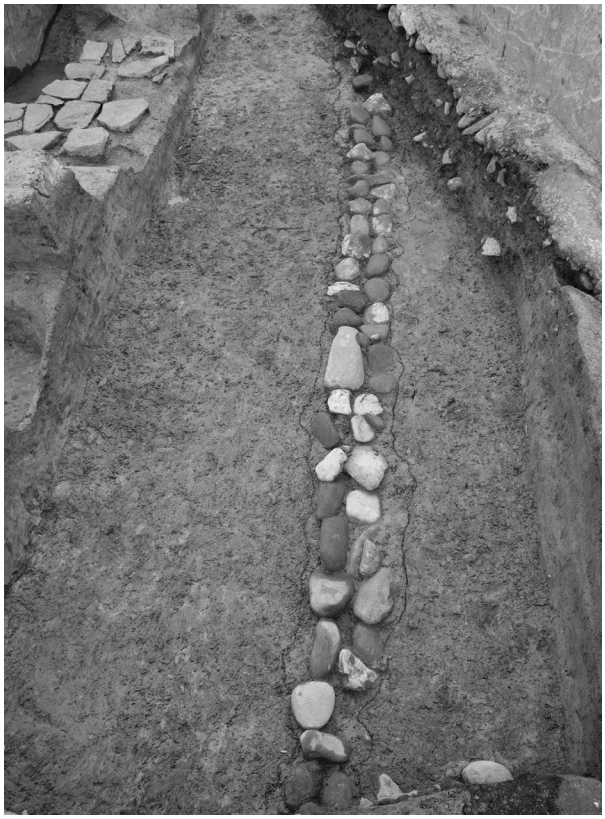
2．2・3号溝接続部（東から）

4．14号溝（H9区以西）撹乱除去状況（東から）

3．9号溝検出（西から）

5．3・14号溝接続部上段撤去状況（南から）

図版20　武家屋敷地区第16地点の遺構（17）
Pl.20　Features at BK16 (17)



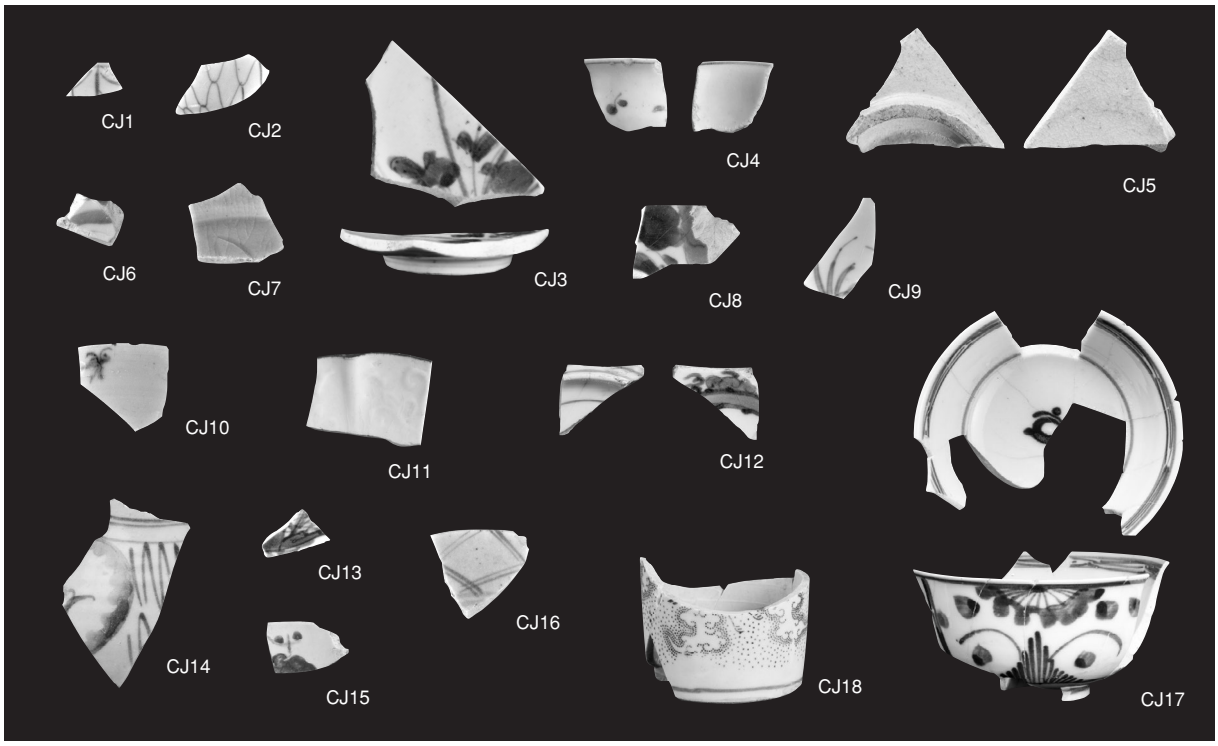
1．14号溝（H6～8区）底面溝検出（北西から）

2．3・14号溝接合部検出（東から）

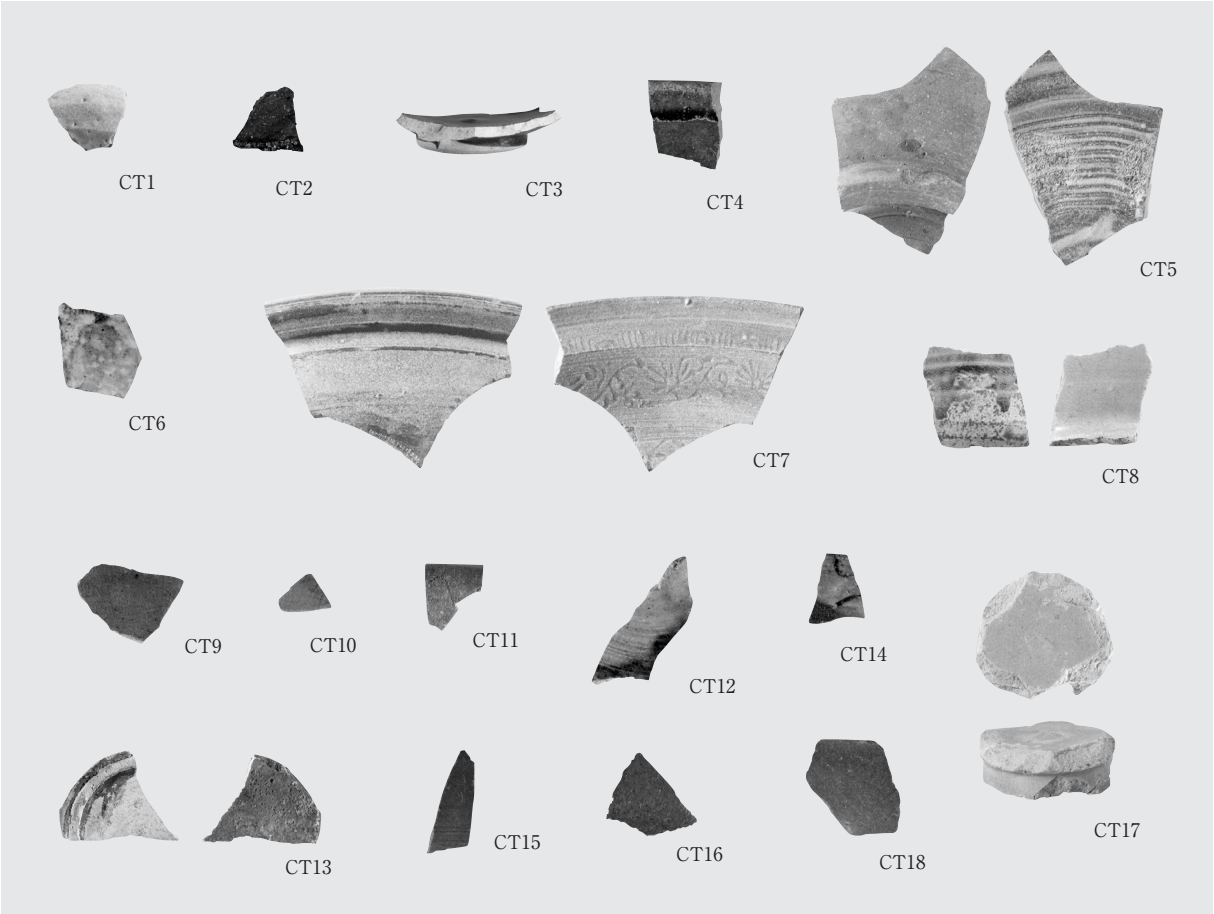
3．14号溝（H9区以西）完掘（西から）

4．14号溝（H6～8区）底面溝完掘（北西から）

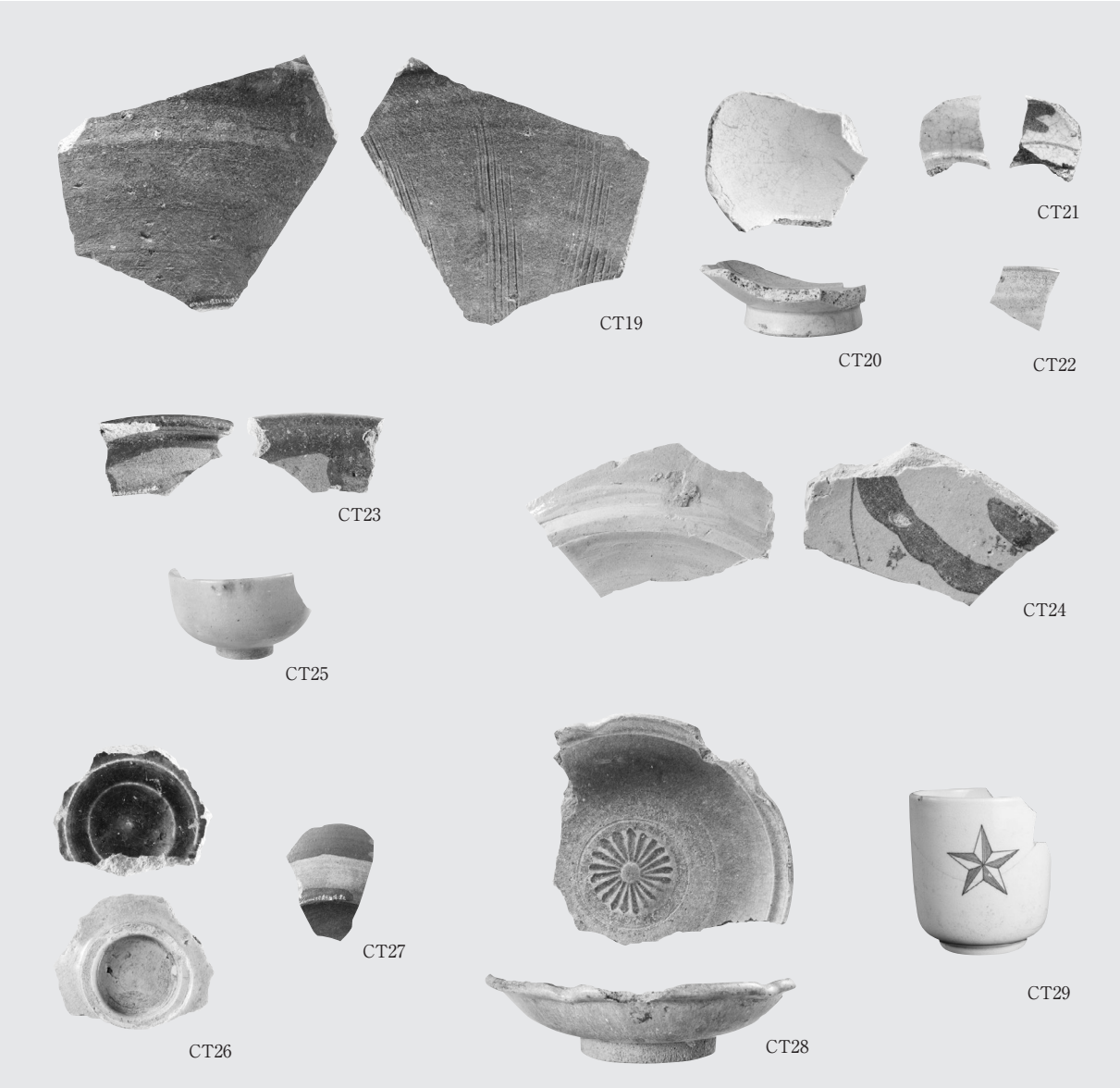
図版21　武家屋敷地区第16地点の遺構（18）
Pl.21　Features at BK16 (18)



図版22　武家屋敷地区第16地点出土磁器　S=1：3
Pl.22　Porcelains from BK16



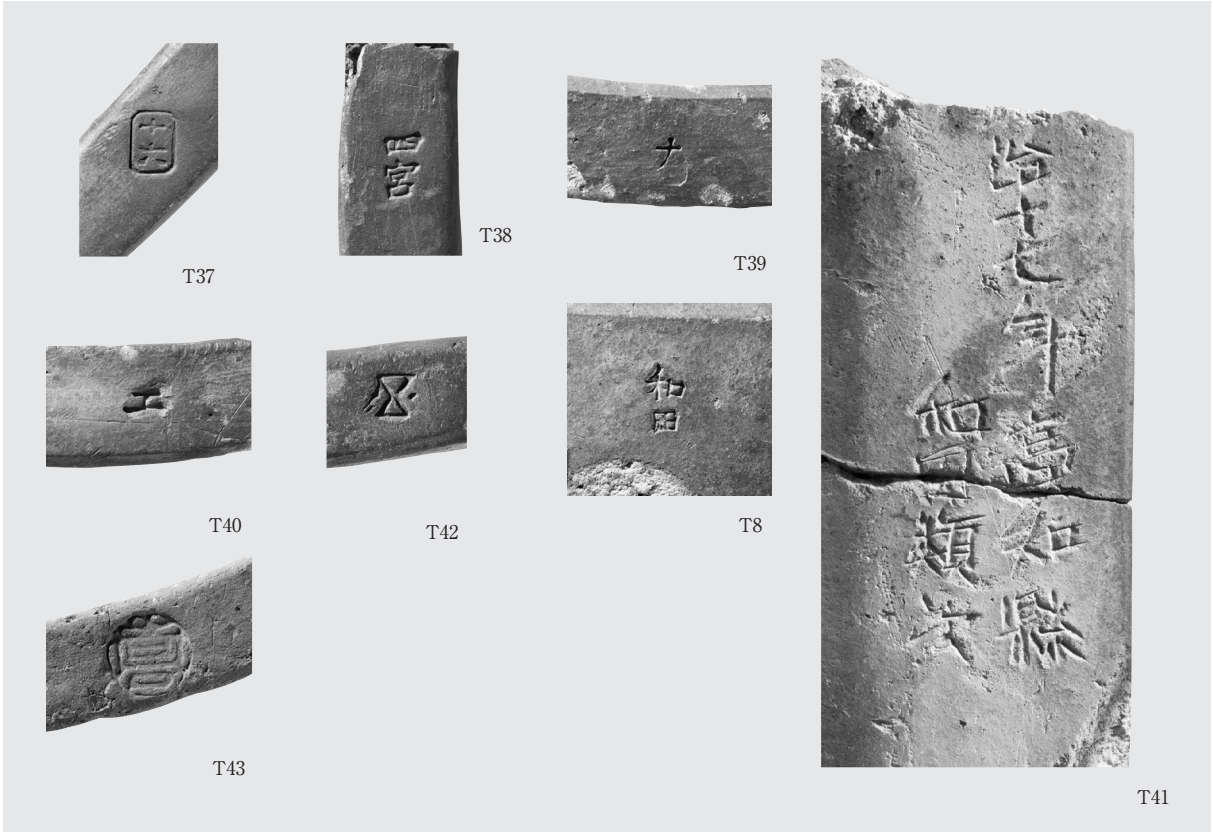
図版23　武家屋敷地区第16地点出土陶器（1）　S=1：3
Pl.23　Glazed ceramics from BK16 (1)



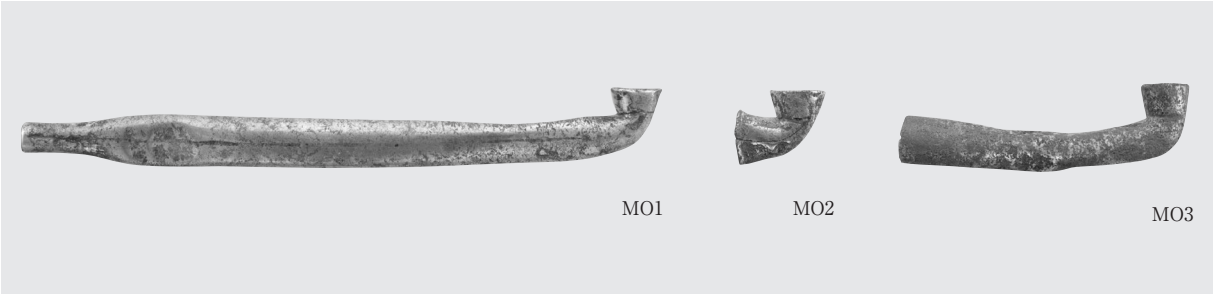
図版24　武家屋敷地区第16地点出土陶器（2）　S=1：3
Pl.24　Glazed ceramics from BK16 (2)

図版25　武家屋敷地区第16地点出土土師質土器・瓦質土器　S=1：3
Pl.25　Glazed ceramics from BK16

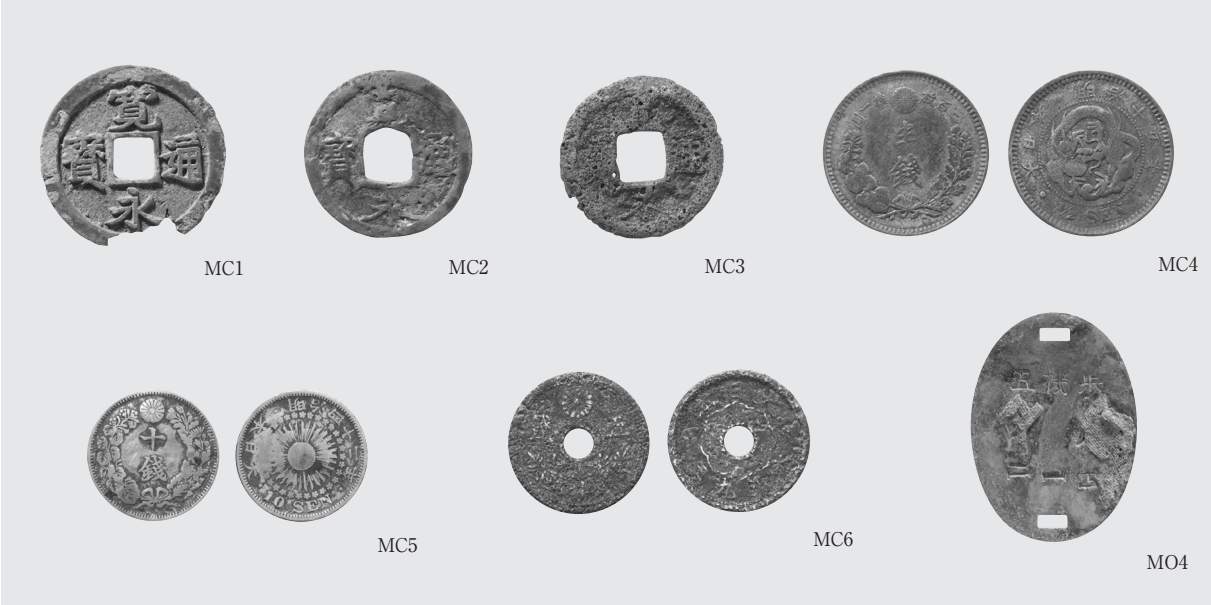
図版26　武家屋敷地区第16地点出土軒丸瓦・軒桟瓦　S=1：3
Pl.26　Various roof tiles from BK16



図版27　武家屋敷地区第16地点出土刻印瓦　S=4：5
Pl.27　Roof tiles with seal impression from BK16



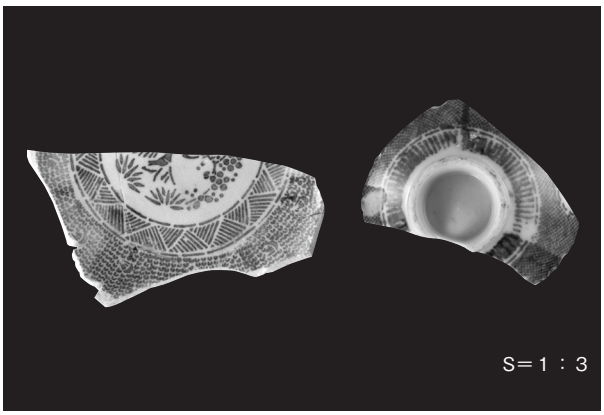
図版28　武家屋敷地区第16地点出土煙管　S=2：3
Pl.28　Pipes from BK16



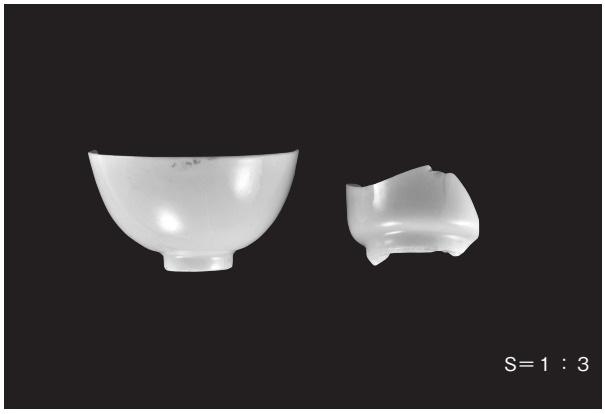
図版29　武家屋敷地区第16地点出土古銭・金属製品　　S=1：1
Pl.29　Coins and metal implements from BK16　　MO4S=2：3

近代手描き磁器（1層・撹乱出土）

近代銅板転写磁器（1層・撹乱出土）



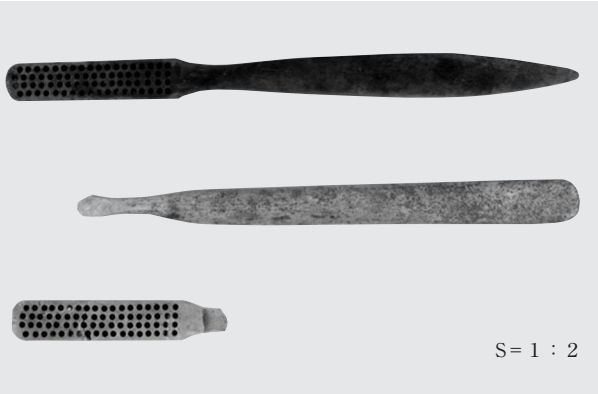
近代摺絵磁器（1層・撹乱出土）



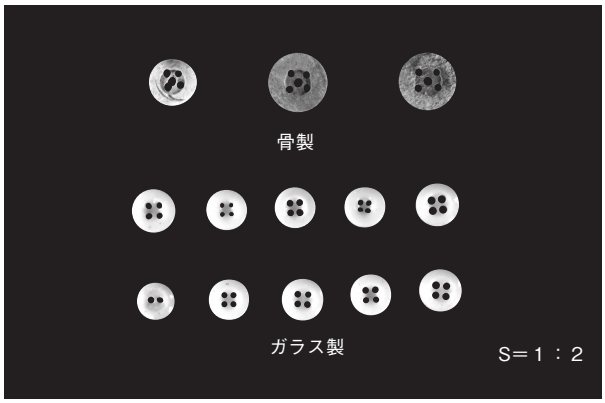
近代白磁（1層・撹乱出土）

図版30　武家屋敷地区第16地点出土近代遺物（1）
Pl.30　Various mordern implements from BK16 (1)

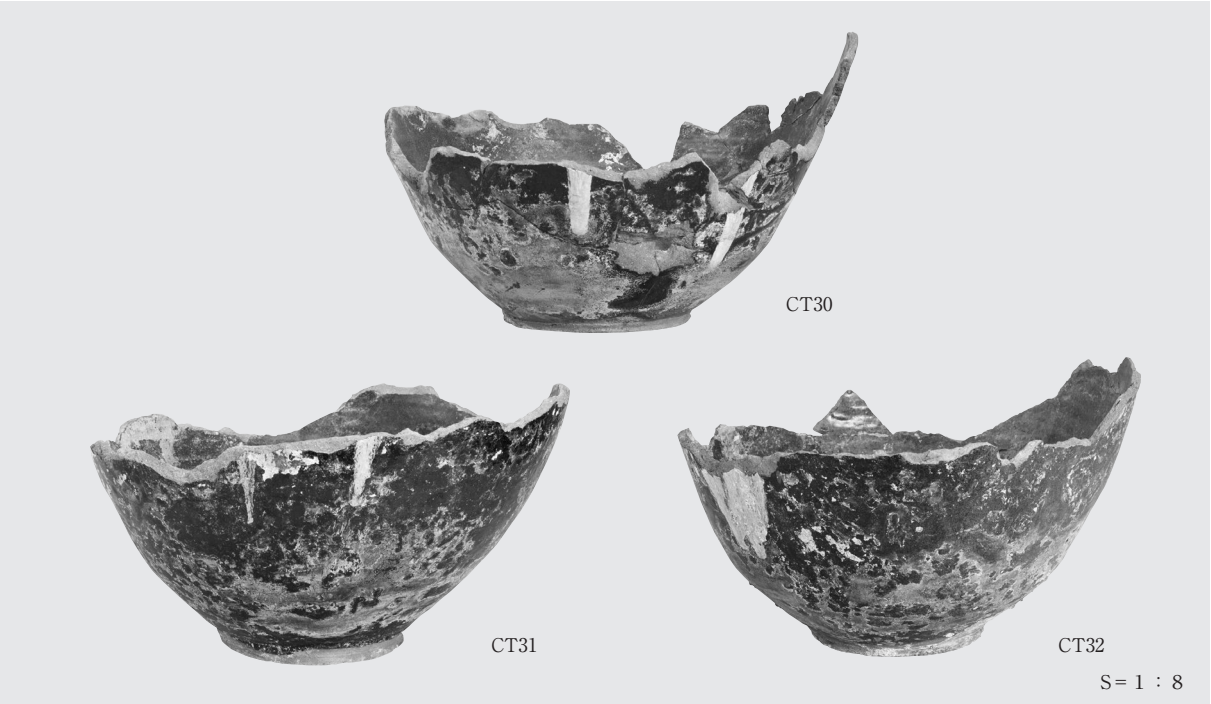
近代金属製品（１層・撹乱出土）



歯ブラシ（１層・撹乱出土）



ボタン（１層・撹乱出土）



便所埋め甕

図版31　武家屋敷地区第16地点出土近代遺物（2）
Pl.31　Various mordern implements from BK16 (2)

報　告　書　抄　録

ふりがな	せんだいじょうあとにのまるほっぽうぶけやしきちくだい16ちてん
書名	仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第16地点
副書名	
巻次	
シリーズ名	東北大学埋蔵文化財調査室調査報告
シリーズ番号	5
編著者名	菅野智則・柴田恵子・石橋　宏
編集機関	東北大学埋蔵文化財調査室
所在地	〒980-8577　宮城県仙台市青葉区片平二丁目1－1　TEL022－217－4995
発行年月日	西暦2016年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		世界測地系		調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
せんだいじょうあと 仙台城跡 にのまるほっぽう 二の丸北方 ぶけやしきちく 武家屋敷地区	みやぎけんせんだいし 宮城県仙台市 あおばくかわうち 青葉区川内41	04100	01033	38度 15分 36秒	140度 51分 10秒	2013.4.1 ～12.19	1200㎡	学生支援センター新設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
仙台城跡 二の丸北方 武家屋敷地区 第16地点	城館	近世	近世：ピット、井戸、溝、堀（沢、道路跡）	陶磁器・土器・瓦・金属製品	

要約 仙台城跡 二の丸北方 武家屋敷地区 第16地点	近世から近代の遺構・遺物が多数確認できた。調査時には、ピット、井戸、溝、堀として遺構を確認した。近世の出土遺物は堀からの出土が中心であるが、細片で点数も限られている。考察の結果、堀と考えた遺構は、その古段階は自然の沢地形が埋没したものであり、新段階は筋違橋通を埋めた水没の痕跡と推定した。江戸期における筋違橋通の様相と自然災害の痕跡を確認することができた。また、仙台城二の丸に伴う堀は、本調査区より南側に位置するものと考えられる。

東北大学埋蔵文化財調査室調査報告５

仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第16地点

平成28年３月31日

発行　東北大学埋蔵文化財調査室
〒980－8577　仙台市青葉区片平2丁目1－1　TEL 022（217）4995

印刷　株式会社　東北プリント
〒980－0822　仙台市青葉区立町24－24　TEL 022（263）1166

Research reports in archaeology on the campus of TOHOKU UNIVERSITY No.5

Samurai Residences around Sendai Castle (BK16 site)

- Excavation reports of Loc.16 of samurai residences located at the side of north outer moat of Ninomaru i.e. Secondary Citadel of Sendai Castle -

Archaeological Research office on the Campus,
Tohoku University